

342

493



始

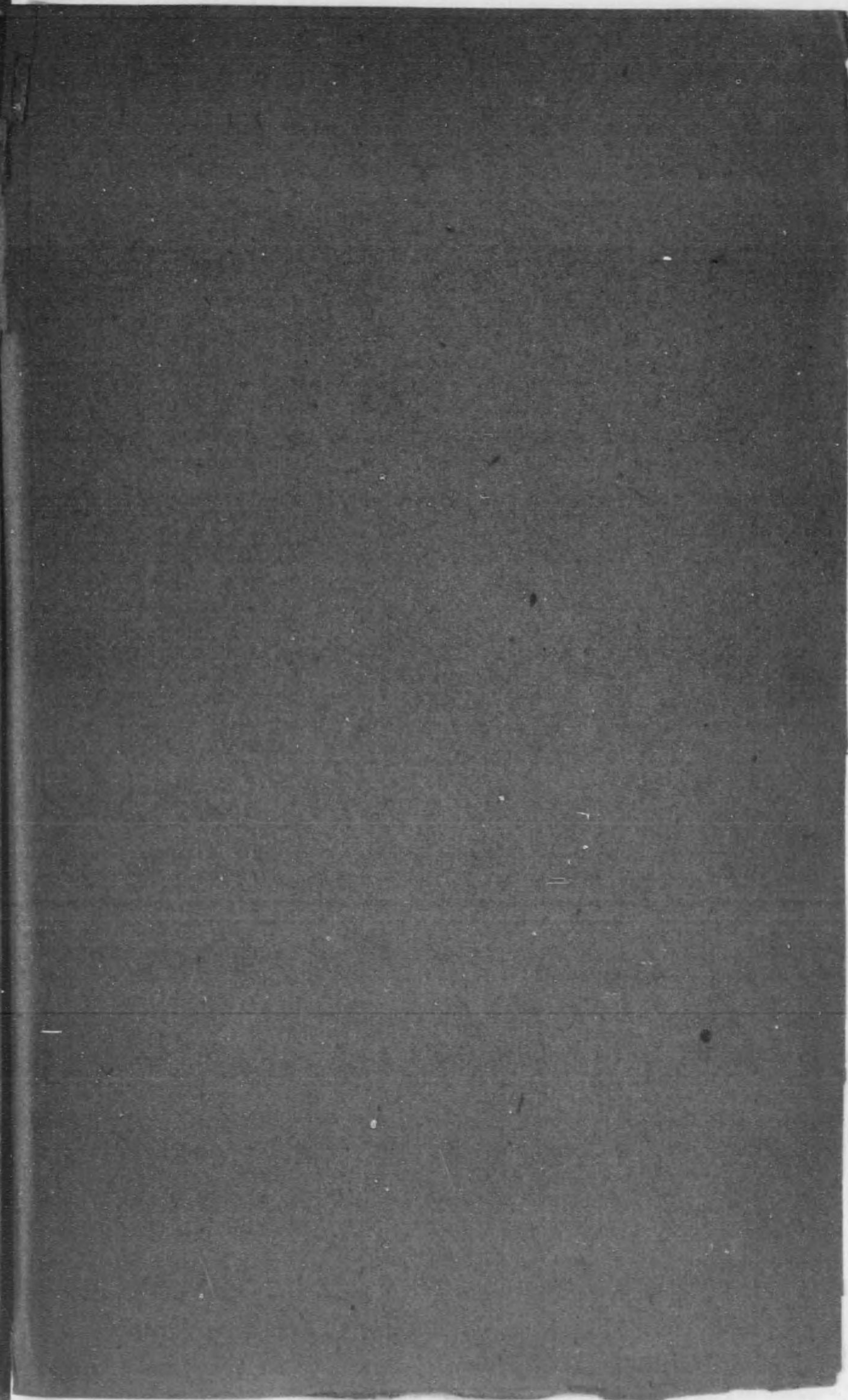


342
493



第二集

社會問題的建設的解釋



342-493

歸一協會叢書



第二集

歸一協會編纂

社會問題的建設的解釋

東京 博文館發行

會寄贈本

大正
6. 2. 16
寄贈

序言

茲に譯出するエルウッド教授の「社會問題」(The Social Problem, a Constructive Analysis, New York, 1916)が如何に歸一協會の目的に副ふた論策であり、又現代文明に對する適切親切の研究評論たるかは、之を通讀すれば明白にならう。それ故、その内容について一々編者の蛇足を副へる要はない。

但し一言副へておきたい點がある。日本の保守的思想家の中には、本書に叙してある如き西洋文明の弊を見て、頭から之を嫌惡し、咒咀し、而して之に對する對治策を、所謂「日本固有」の道德に求める人がある。「日本固有」といふ事の意義を此に評論する必要はないが、此の如き保守論者の「日本固有」には極めて漠然たる者或は抽象的な者、又はどうしても現代時勢に逆行するものが甚多い。その様な對治策が無効に終るのは明白の事である。即ち一は、現代文明の潮流に對して日本のみが孤立の位置に立ち得ないのと、一は、對治策は一層建設的又研究的でなければならぬといふ事情のあるためである。此等の事は編者の意見として、別に評論しやうが、兎に角、現代の潮流

THE SOCIAL PROBLEM
A CONSTRUCTIVE ANALYSIS

BY
CHARLES A. ELLWOOD
Professor of Sociology in the University of Missouri.

社會問題の建設的解釋

ミッスーリ州立大學社會學教授

エルワード原著

歸一協會譯編

言 序

に對しては、科學的思想で研究する事と、社會的の建設組織を整へる事と、而して精神的にも、開國進取の實を擧げて、世界と共に問題を處理する事と、此等が要件であると信ずる。此等の點に關して歸一協會々員の間に諸種の意見もある事であるから、それ等は又追つて一冊として本叢書の中で發行する。

本書の翻譯は、某文學士の初稿に基いて、編者が原文と比較して修正を加へたものであるが、印刷が出来て見ると、不満足の點も少なからずある。然し大體の意味に於て誤を傳へはしない。原著者は、翻譯の承諾を與へると共に、誤植追加をも送つて大に厚意を表せられた。原著者に對しては、日本文としても餘り上乘でない譯文の出來た事は、氣の毒に感じ、又讀者も此點を宥恕して、意味を取られん事を希望する。終に編者の論文二を附録とした。

大正五年十二月十九日

編者 姉崎正治

(原著者) 序 言

西洋文明の中に出た社會問題を簡單に分析して、調和のある進歩を遂げる基礎たるべき科學的社會哲學の大綱を示したい、此が此の小著の目的である。現代文明は危機に際會して、社會哲學の再建を要求しつつある、即ち茲に新に西洋文明の建設を遂げるには、十八世紀や十九世紀に行はれた如き思想を基にするのでは到底不満足である。一方には革命を避けると共に、他方(保守)反動を避ける爲に、社會の事に關して考ふべき方針を示したいといふのが、此の書の目的である。即ち進歩的社會運動に對して、科學的基礎を與へたいといふにあるから、如何なる階級、如何なる黨派又は宗派の人にも、此等の考察を促したい。それ故、此の一書の方針は、文明の要素價値に對しては、どこまでも積極的に建設的である事を見てほしい。消極思想は會社生活に永遠の寄與をなし得る者でないといふ事を、吾々は夙に悟るべき筈であつた。

書中の論點については、一々參照引用を附する事は、成るべく之を避けて

おいた。然し此の一書の根據として一層科學的の方面は、著書自らの「心理的方面から見た社會學」(Sociology in Its Psychological Aspects)に参照してほしい。又大西洋の兩岸に在る多くの同僚の著書に負ふ事のあるのは勿論であつて、茲に謝意を表する。特にオックスフォードとロンドンで友人等から有益な助言や批評を得た事を記すのは、快事として茲に之を特筆する。

オックスフォードにて

一九一四年十二月八日

チャールス・エ・エルウッド

第一協會叢書社會問題の建設的解釋

目次

第一章 緒論……………一—二元

現代文明の問題、一——社會哲學再建の必要、五——社會問題は科學的に解決が出来る、九——社會的結合の性質、一〇——文明の定義、一三——西洋文明の現状、一四——革命の原因、一九——全體が蠻性に立戻る事も出来る、二二——社會問題は本來精神的なり、二四——現代文明の中で諸種の觀念の衝突、二六——悲觀するに及ばぬ、但社會的再建を要する、二八。

第二章 現代社會問題の歴史的要素……………三—五八

社會の發達に於ける傳承の勢力、三二——西洋文明に於けるヘブライ傳承の影響、三三——ギリシャ傳承の影響、三八——ローマ傳承の影響、四〇——キリストン民族傳承の影響、四二——キリスト教の影響、四四——中世文明の統合企圖、四六——近世に於ける個人主義の勃興、四七——近代科學の勃

興、四九——工業の革命とその結果、五一——近世思想に於ける「批評的」運動、五三——近世人道主義の勃興、五四——十九世紀の失敗した點、五五——アメリカ社會狀態の特質、五六。

第三章 社會問題に於ける物質的及生物的

要素……………五九—九〇

社會發達の物質的條件、五九——天然富源の保存、六一——社會衛生運動、六二——人類社會に於ける遺傳の力、六六——遺傳に關する近代の學說、六七——實際社會學の一要部としての優種論、七二——優種論の困難、七三——近代社會で優種案組織の必要、七七——優種主義立法の限度、七九——輿論と個人理想との勢力、八三——優種主義の積極的立案、八六——理性に適つた優種論の道德的價值、九〇。

第四章 社會問題に於ける經濟的要素……………九一—一二四

西洋文明に於ける社會思想は主として經濟的、九一——「經濟的定命論」の中にある真理の要素、九二——現在の資本制度に優る工業組織の必要、九五

——資本組織に對する非難、勞力の横領、九七——現在の資本組織から出て來る不當な富の分配、九八——階級戦争と國家戦争、一〇一——富者貧者共に物質主義に赴く、一〇三——現在資本組織の弊害を除く途、一〇四——現在經濟組織の不公平を除く一方法は税制の科學的改革、一〇七——此の如き税制改革に對する非難、一〇〇——經濟政策と社會主義との別、一一三。

第五章 社會問題に於ける精神的及理想的

要素……………一一五—一三四

社會の發達に於ける觀念と理想との勢力、一二五——社會の進化が複雑になるに従つて理想の勢力も亦増進する、一二七——西洋文明に於ける消極的觀念理想の發達、一二八——家族生活の價值を見直す必要、一二〇——政治の價值を見直す必要、一二二——宗教の價值を見直す必要、一二五——道德の價值を見直す必要、一二六——キリスト教の價值を見直す必要、一三〇——道德教育を改善し西洋文明に存在して居る精神的價值を保存する要、一二二。



社會問題の建設的解釋

チャールズ・エ・エルウッド原著

第一章 緒論

現代文明の問題

彼の「社會革命の學說」を著した政治學者ブルックス・アダムス(Brooks Adams)は、現今一般に行はるゝ社會組織は千九百三十年に達する前に必ず衰滅期に至るであらうと云ふことを近頃公言して居る。現今の社會狀態が、革命前に於けるフランス社會に酷似して居つて、當時のフランスの貴族社會が、眼前に社會改革の必要が迫つて來て居るに關はらず恬として顧みる處がなかつた如く、現今の上流社會が之と同一の暗愚を繰返して居ること

第六章 社會問題の解決……………一三五—一五三

人間の知識と性格との範圍内で社會問題の解決、一三五——外部組織では足りない、一三六——一方に偏した立案では足りない、一三八——革命的方法では足りない、一三九——個人の品性が中心である、一四二——品性の發達とその支配との根本三點、一四四——犯罪の問題労働問題を社會問題解決の實例として見る、一四六——社會指導者を教練する必要、一五一。

附録……………一五五—一八〇

文明の熱病 (姉崎正治)……………一五七

戦後の精神的覺醒 (姉崎正治)……………一七一

目次終

は、特に注意すべき事だとアダムスは云つて居る。社會的不安の點で、フランス革命前と今日の社會状態と酷似して居ることは、苟くも社會歴史研究に従事する學者の一見確認する處で、敢て其がために深き洞察力を要する譯でない。現今社會の缺陷は、一方に於て社會的特權を有する階級が、自利のためには他人の利益を顧みず、徒らに保守的態度を採らうとするかと思へば、他方では是に反抗して、無特權の社會が飽くまで激越な改革を施さうとする。此の二つの勢力が遂に衝突を起して社會に擾亂を醸す。社會の指導者が建設的精神と義務的精神とを保持し、又濶大で建設的な見解を提出せず捨てて置けば、蓋しフランス革命以上の惡結果を醸すも知れぬのである。

現今の文明問題は現存の政治及工業組織の破壊といふ事より以上のものである。其政治的革命を如何にして避くべきかといふ問題以上、更に文明其自らの衰退又は破壊を如何にして避くべきかといふ大問題を控へて居るのである。現に(千九百十四年)世界の大半は俄然有史以來の大戦禍中に投じたが、是は既に西洋文明にどこか大缺點のある證據であつて、さもなければ今回の如き世界の大戦争は起らなかつたに相違ない。

多くの思想家は世界の文明は衰滅に瀕しつゝあるといふが、現に行はるる歐洲大戦争に

現はれる幾多の實例は、斯かる決論が單に一時的悲觀論でない事を示す場合が多い。不安の現社會状態は、革命當時のフランスの社會状態よりも、遙か羅馬帝國衰微の當時に酷似して居る。其は敢て彼のフェレロ(Ferrero)の如き歴史家を煩はすに及ばずして、宗教心道徳心の衰退、社會統制力の減退、之に對して秩序を建てる爲に有力な人物の必要、中央集權の必要、此等は正しく過去の羅馬社會其のまゝの現象を呈するものと云はねばならぬ。羅馬文明を亡ぼした實利主義、個人主義、物質主義、軍國主義、家庭結婚に關する低級判斷、宗教道徳に於ける無神論等が、今の西洋文明に少なくとも一般流行しつゝあることは疑ふ餘地がない。

十九世紀西洋文明の根底を洞觀することの出来なかつた人々に取つては、今回の大戦亂は、洵に不意打であつたに相違ない。然し吾人の考にすれば、其は何等外交上又其他の不意の偶然事ではない。寧ろ此の戦亂は、西洋文明の根本的腐敗を物語つて居るのである。元々吾等は自己中心的又物質的な思想學說の上に安全な社會組織が出来ると思つたのが誤であつた。又國民生活に堅實な道徳的基礎を求めずして、唯だ個人主義の上に求めやうとした結果、反つて蠻性の復活を見たのである。個人も國民も、利己、物質欲、動物方に依つて

安固な調和的社會秩序が建設し得る如く豫想したのが、抑も大なる誤であつた。今日でも、第十九世紀の西洋に行はれた利己的な社會的消極主義の教義が、實際に於ても又理論に於ても、共に現今の大戦亂の動因たりし事を不問に附して居る愚人が尠ならず居る。而して其等の人々は、其にも懲りず、斯かる社會的大混亂の根本原因を、生物的經濟的方面にありとして熱心に探求して居る。成程生物的經濟的條件は文明の刺激とはなるであらう、然し原因とはならぬ。眞の文明の根本は、個人の精神的態度と、價値の自覺とにある。實に第十九世紀に是認せられた精神的態度及道德的價値が、實際に於ては健全なものではない事が判つた。今日の世界的大戦争は、此の舊時代の文明を抛棄して、新なる根底の上に社會組織に關する新哲學主義を創設する人の出現を要求する。

以上の謬見は固より現社會の一部を代表するものであり、又然からんことは、吾等の共に願ふ處である。然し實際上には、現今の西洋には、社會的見解や、人生理想の問題が色々になつて、そこでは一方には社會的破壊力と、之に對して社會の再建進歩を計る考とが戦を開いて居るので、他の總ての紛擾は此の根本から出て居る事である。而して今此の社會的争闘の結果が如何なる形式を以て現はれて來るか云ふことは、誰も豫見し得るものがない。

い。唯だ其結果は必ず或形式を以て將來現はれて來ると云ふことと、其結果には常に前陳の兩勢力の影響があると云ふことだけは見定める事が出来る。固より其結果は偶發的性質にも非ず又宿命的性質のものでもない。歴史家や社會學者が云ふ通り、古から國民や文明の生命には自然的消滅がないと云ふことは確である。若しあつたとすれば、人民、特に社會に於ける思想界活動界の指導的人物が、誤つた方向を取り、判斷を誤つたと云ふことに原因するであらう。彼の「十字路頭の文明」の著者フィッギス (Figgis) 氏の云つた如く今の文明は路に迷つて居るが、その行く手の先は一つに定まつて居ると云ふことは出來ぬ。要は現在並に近き將來に於ける個人の社會的見識と社會的品性の如何に據つて定まるのである。従つて現存する社會問題を解決する程度、又其社會問題を解決し得る個人を尊重すれば、それだけ吾人は文明の將來を利導し得るといふ望みを抱き得る。

社會哲學再建の必要

吾々の祖先の小天地は、種々な現存の力に依つて、俄然其範圍を擴大し新天地を開拓するに至つた。然し此の如き變化を來たした方の何たるかは、今日に於ては未だ十分に知れな

い。多數の新問題は突然續出した。或は人口の増殖、知識の増殖、或は民族、特種文化の混淆、新機械の發明、其他工業、政治、さては宗教の發達に伴ふ諸問題が躍起した。其等の新問題は、皮相なる研究者が見ても相關的現象であるといふ事は分かつて居るが、段々深く見れば、其奥底に嚴として社會問題なる者が横つて居るのである。尤も此の大問題の性質が如何なるものであるかと云ふことに就いては、學者間に未だ一致點がない。理論家も實際家も、共に自己の小天地に踞踏して互に管見を恣まゝにして居る。従つて今日に於てはハウウオース (Howarth) やホブソン (Hobson) の如き二三の卓識家があつても、世俗には知れず、自然此の社會問題に對する濶大の解決は、得て望むことが出來ない次第である。(Howarth, Work and Life 及 Hobson, The Social Problem 参照)。

近來の社會問題は、階級間の争ひや國民間の争ひのために、一方では非常に複雑になつて其真相を穿つ事が困難になつたのと、他方では其がために反つて根本争點の明になつたものがある。今日では最早此等を單に國民的問題として眺むることの出來ないといふ事は明になつて來た。今回の大戦争は、諸國民の間に聯絡ある系統のある事と、人道的共同生活のある事とを明にした。然るに彼のベルンハルデの如く、或る一國の主張のみを認め

て、苟くも國家又は國民性以外に於ては、人道的團結は行はるゝものに非すと云ひ、又其一國のみが世界的優越の位置を有する如く主張するに於ては、此の如き國家的我執を生活の基とする見解に對して、他の文明國は噤然たらざるを得ないであらう。而して此に對して人類を一單位として見る事が、社會學上の見地として現はれて來た。元々、一國民であらうが、一社會であらうが、又一民族であらうが、唯だ己一個の私欲を逞しくすると云ふ事は、彼の所謂個人の利己主義にも増して大なる弊害の伴ふものである。人生の一側面の觀察のみを以てして、例へば生存競争といふ如き生物學上の一原則を、さも人類の最高理想の如く想定すれば、其結果遂に戦争を避くることさへ人道に背く如く誤想せしむるに至るのである。寔に懼るべきこと、云はねばならぬ。是等の點よりしても、吾等は、文明的生活に關する總ての判斷は、物質的と精神的との區別なく、濶大な社會問題の立脚地から判斷して行かねばならぬ事を知り初めた。

吾人は今社會問題に對して現代に行はるゝ狹隘なる見解を一々列記して見やう。先づ第一には、社會大多數の人々は、一國內諸階級の間に行はれる經濟關係のみに没頭して居る。是等の人々にとつては、近代の社會問題の大部分は、舉げて労働問題になつて了ふ。此の

見解は、單に労働者と使用者との関係を見るだけでなく、労働と使用との関係を圓滿にするやうな社會秩序を發見しやうと考へて居るに過ぎぬ。従つて物質的富の生産と其の公平なる分配の方法如何とが、其人々等から見た根本的解決方法となるのである。

又國際的平和論者にすれば、國家以上に眼を注いで居るが、國際的葛藤の解決が文明の大問題であつて、現代の社會問題は國際問題に過ぎぬと見て居る。即ち聯邦裁判や、仲裁裁判の設立が出來、軍備擴張や、軍國主義の負擔を軽減さへすれば、其他枝葉の社會問題は自ら解決するものゝ如く考へて居る。

又世には優種論者なるものがある。單に抽象的生物論の上に立つて、眞の社會的根問題は、父と子、子孫に互る種族、遺傳改良の問題だとし、是が解決すれば他の問題は自然に氷解すると云ふ。然し此の議論は、丁度十九世紀の抽象的經濟學者と同じく、人間を生み、健全に之を育てるといふ事だけで、人類の問題は解けるといふ事になる。

最後に婦人問題に就いて云はう。婦人運動の主唱者に云はせると、社會問題は、一に婦人問題の上に懸つて居る。少くとも、男女關係問題が唯一社會問題である。婦人を自由に開放し、社會事業にあづからしめたならば、蓋し餘の問題は立ち處に解決し得ると。

以上の平和主義者、優種論者、婦人権論者の見解は、蓋し渺なからざる社會問題を提供するであらう。然し今吾等少數の者は、斯かる特種問題の範圍を離れ、古代より傳來し來れる社會問題を一束とし、之を人間相互關係の問題だと主唱しやうと考へて居る。即ち人と人が社會的に生存する問題であつて、特に經濟問題、優種問題等の特種問題に固着することは出來ぬ。社會問題は労働問題のみでなく、富力分配の問題でなく、國民力と人口との關係問題でなく、又優種問題でなく、男女兩性問題でもなく、更に廣大の範圍に互つて居る。之を人と人が共に生存するについて一般の問題と見ることが出來れば、人道の問題とか人性の問題と云ふことも敢て妨げない。強ひて之を其一側面に拘泥しては、其問題の性質を不明にするのみならず、其解決の方法に於いても、大なる困難を感ずるやうになる。

社會問題は科學的に解決が出来る

社會問題を解決する爲めには、勿論濶大の見識がなくてはならぬ。然らばと云つて、科學上の知識の届かないものだと考へてはならぬ。常識の必要は云ふを待たぬが、社會なる

ものが如何にして構成せられつゝあるかと云ふ科學上の知識は、濶大の見識家をして、更に確實、深刻なる觀察力を涵養せしむる所以である。單に「社會問題」と包括的に呼べばとて、種々の問題を包括して單に漠然と社會問題と呼ぶのではない。社會問題は事實の問題である。如何なる時代に於ても國民或は個人は、それぞれ大體の社會學の見識から其を解決しなければならぬ。而して人類全體の爲めといふ事を目的にして、此の問題を正しく解決するには、人間相互の關係を支配する色々の勢力を科學的に理會し、それ等の間に働いて居る要素を能く整へて見なければならぬ。一言にして云はゞ、科學的社會學の知識が必要だと云ふことになるのである。

社會的結合の性質

そこで、近世社會學の見地から、社會的團結の性質を研究して、以上の現代社會問題の解決に資したい。畢竟社會とは、それを作つて居る個人間に生ずる關係の集合であつて、集合したる個人間に社會の形を造る限り、多少一定の形式を以て整頓組織が行はれなければならぬ。さうでなければ社會の一定の目的に向ふ行動も行はれねば、又一致の働

もなすことが出来ぬ。固より形容類例は、科學的研究には禁物ではあるが、強ひて形容を用ふれば、社會は一の機械のやうなものである。機械の各部は相互に調整せられて居る。若し此の調整が不完全な時は必ず衝突が起る。さもなければ全然破壊して丁うであらう。社會的集合體も是と等しく、個人の活動の間に調整がなくては社會として完全な働きをすることが出来ぬ。然し社會は、機械の如く生命のない物質的斷片で造り上げたものでない。常に生命あり、感情あり、思考力を有する個人で組織して居る。従つて社會の指導者爲政治家は、機械の如くに社會を運用することは出来ぬ。必ず人と人と相伴共同するにつけての人性を理會して居らねばならぬ。其が爲めには、社會心理學に通曉して渾一體として働く個人の活動の要素を諒知しなければならぬ。

調和調節のある社會組織を造るためには、種々なる要素が必要である。勿論第一には外的物質的條件が大切である。此が社會生活の健全なる發達を助くる底のものでなければ、其社會組織は運轉せぬか、又は破壊するままである。假りに外的境遇が完全であつたとした處で、尙ほ内部的要素が必要になつて來る。内部的要素の第一は、社會に於ける個人の生物學的基礎が健全でなければならぬ。又其から生ずる肉體的衝動や、本能が健全でなけ

ればならぬ。而して其等の要素が完全でなければ、社會全體の共同も強くは現はれない。尙ほ又、個人間の習得性と云ふものも、社會に採つては、遺傳や血統に劣らず大切である。其社會的習慣が同一のものでなくとも、必ず共同的性質を持つて居るものでなければならぬ。然らざれば社會的統一の上に大害あつて小益もない。社會の風習は社會的秩序を保つ上に大切である。又其風習に深い關係ある社會の外部的環境は、特に注目をしなければならぬ。社會の統一が動物以上のものとするれば、人類の主觀的精神的要素は閉却してはならぬ。意識的人類の社會集合に於ては、其運命を左右する決定的最終的要素は人間相互の精神的态度である。例せば、社會の感情、情緒、觀念、信仰、及輿論の如き其である。即ち社會を造る人々は、多少によらず相互間の同情と理會とを保持しなくてはならぬ。此の相互の同情及理會が、社會に於ける個人間の共同生活の基礎たる相互信用信頼と云ふ作用となつて現はれるのである。

以上の諸要素は、人類社會が調和調節して活動するためには是非なくてはならぬものである。又此等の事實から見れば、人類社會の一致は主として精神的心理的のものであることを知るに足る。されば若し其等心理的要素の一でも破壊せらるゝことがあれば、社會は

終に成立せぬ。元來文明社會に於ては、心理的要素と云ふものは人生の調整機關になつて居るが、又之が絶對的に社會運命に對する決定的要素となることがある。而して研究を進めるに従つて、社會の此精神的要素が直接の外的境遇のみから生じ來るものでなくて、其自からの生命歴史を持つものであることを知るに至るであらう。以上の簡單な原理は、人類團體の極く簡單なものから、最も複雑な人類全體の聯絡に至るまで、何れの團體生活にも應用が出来るものである。

文明の定義

抑も文明とは何であるか。人類は本能、感情、情緒などで結合するが、それ等が社會的に聯絡し團結する力となる觀念及理想が生じて始めて文明がある。従つて文明とは年と共に益す、自然を征服し、整頓せる社會生活を營ましむるに適當な、智能と、信仰と、觀念と、理想とを繼承發達し行くことであると云ふことが出来る。簡單に云へば物質的客觀的環境にかへて、觀念と理想との主觀的環境を作るにあり、文明の進化は、此の主觀的環境に聯絡があり、觀念や社會的價値に結合があつて初めて生ずる。更に換言すれば、文明とは

社會人の行爲を整頓する、理想的價値を創造し、又繼承發達するにある。従つて文明は物質的境遇の變化のみで量ることの出来るものではない、而して社會は所謂精神的と呼べる、心理的事實で造られて居ることを知らなければならぬ。一社會を作り上げる個人の間に信仰理想が相似て居るといふ事は、社會團結の基礎たる衝動や、習慣や、感情其ものが同類である事よりは遙か重大の意義を持つて居る。

文明人は己が行動を道德的に批判する共通の標的なくしては、調和的生活が出来ない。衝動や、習慣や、感情等の内より湧出する同類性のみではなく、更に文明人と呼べるゝためには、必ず一般に承認せらるゝ人生の理想、觀念を要求するのである。少なくとも人民の力を基本とする社會に於ては、一般人民の是認する或理想的價値なくしては、文明の社會組織があるといへない。

西洋文明の現状

現今西洋文明に留意すれば、一見社會民心が歸趣點を失つて居ることを知るに足る。素より其が失望的のものでないとしても、理想は殆んど全く不一致なることを發見する。現

代の西洋文明が衝突の爲に分裂して居るとすれば、其原因は、我々が見る價値觀念が上下轉倒して居るにある。過去の舊理想觀念は、多くの階級には亡んで了つて、然も新なる社會秩序を建てるべき理想の建設がない。今や家族より國家に至るまで、甚しい批評を受け、又瓦解の兆を示して居ないものはない。例へば家族といふ制度について見るに、近世西洋社會に行はれた一夫一婦の原則は、今や必しも行はれない。反つて相互の意志で易々と決行する離婚や、さては自由戀愛や、一夫多妻や、混合同棲などを主張する者が、擧つて一夫一妻の家族を攻撃する。今日では此の如き見解を抱いて居る人々の數は、棄ておく事の出来ない位に増加して來た。家族に對する世の意見も、自然に積極的建設的のものでなく、なつて、無組織的になり、又絶對的に破壊的になり、その上其傾向が實行上にも現はるゝに至つた。

若し現今行はるゝ文學を執つて、そこに反映して居る現代社會の内面狀態を観ると、此處にも亦人生理想に關する不一致が著しく現はれて居る。今日の文學は、キリスト教に傳へて來た道徳は一切退けて顧みないのでなく、如何なる人道的立脚點をも顧みない。個人をそれ自身の目的とし、法則とし、其結果は、本能的行動と衝動とを以て、さも人生最

高善の如く考へて居る。奉公義務の觀念や、自己犠牲の觀念は、今の文學にあつて嘲弄的になるばかりである。個人主義に據つて、社會及個人の關するキリスト教の傳來的道德を無視するものは敢て少數でなく、文學の巨星の中にもある。此等から見ても、我等の道德的理想の衰退は争はれぬ事實である。

假に世界文明國の一として米國に其例を採れば、人生目的に關する理想は非常なる不一致、矛盾の状態にある。舊式の理想論者の一部を除いては、富の價又其富より現はるゝ快樂と、勢力と、社會的位置とを彼等は忘るゝことが出來ぬ。實際生活上に於ては、米國人は盡く個人自由の價値を認め、自分の欲する所を行ふに成るべく社會の制限を受けない様にしやうとする。近頃は多數の米人は健康の價値を認むるに至つたが、今に知識の價値、教育の價値、少くとも見聞の價値を承認するに至るであらう。尙ほ其他に於ても、多くの不一致の社會的價値を算すると雖も、吾人は一々これを何と名づくべきか知らない。然し進んで、家族の價値、財産、政治、又道德、宗教の價値については、殆んど一致する所がない。ギッヂングス氏は「米國合衆國の現状は、中央政府の法律及拘束外にある範圍に於ては、人間社會の如何なる利害休戚に關しても一種の無政府的傾向を示し居る。其は蓋し否

むべからざる事實だ」と云つて居るが、是につけ加へて「特に社會的理想設定の範圍に於て」と云ふべきである。

假に歐洲に於ける最文明國の一としてドイツ帝國を例に取つて見ると、其近世文明の弊害は爛熟の程度に達して居る。例へばニーイチエの如き、トライチケの如き、其國の思想家の考にすると、現社會に於ける實際道德は、進化論的自然主義に基き、結局力の崇拜に歸着する。曾ては此國民の誇とした理想的氣風、其國民の特性であつた忠實、即ち Treue や質素の生活は去つて、その代りに全國民が物質主義になつてしまつたといふことは、多く識者の直感する處である。斯る物質主義が論理的に徹底するとすれば、必ず社會的生活に對して、消極的破壊的のものとなつて現はるゝに相違ない。果せる哉、現今ドイツ國に於ける教育ある有力社會に於ては、軍事組織を尊重し、國家の力は最上權力なりといふ信仰が、半意識の状態で其社會の精神を支配しつゝあるに至つた。されば久しき間マキアベリの政略主義なるものが、實際政治方針は素より、學者界の思想をも支配するに至つた。チュビンゲン大學總長、リュメリン (Gustav von Rümelin) は、現代に於ては、最早やキリスト教道德は、政治上、特に國民間の外交上に於て、一切採用することが出來なくなつた

と云ふ事を告白したが、其は未だ二三十年とは経たない事である。

此の考は次第に四方に反響して、終に最近ドイツ軍事論者の一人は公言して曰く、「彼の博愛の教は、國の間に應用することが出来なくなつた。強ひて國交上に應用しやうとすれば、必ず國家的義務の衝突が起るであらう。……キリスト教の論理は、要するに個人道徳を説くもので、政治的外交的道德を説くものでない」と。

尤もドイツ人が盡く以上の如き思考を抱懐して居ると見る事が出来ないのは、恰も多妻主義主張者があるからといつて、國民が皆之を是認して居ると云へないと同じである。然し一度は社會的理想主義とキリスト教の敬虔とを以て有名であつた國が、斯る實際的傾向によつて如何に道徳に於て野性に戻り、藝術に於て自然主義に走りつゝあるかといふ事を見る要はある。實にドイツ國は、西洋文明が野蠻に戻りつつある事を最も明に代表して居る。而して其野蠻性の復活する原因を探れば、一に歐洲國民の激烈なる生存競争に基くものと云はねばならぬ。

西歐諸國に於ける野蠻性の復興した例を挙げやうと思はゞ、必ずしも困難な事ではない。實に現戦争に於て最も忌むべき點は生命財産の破壊ではない。寧ろ今回の大戦亂の場合を

除いては曾て見られぬ、敵對國民に對する憎惡感情是である。ドイツ國に於ける元帥、大將、記者、大學教授、及神學者等すらも、敵國に對する憎惡は非常なものである。亦同盟國側にあつても、例へばベルジクの有名なる文士メーテルリンクの如きは、「ドイツは恰も蜂の巢の如きものであつて、之を絶滅し盡さねばならぬ」とさへ罵倒して居る。是等双方、敵國民の各階級を通じたる憎惡の程度から見ると、此等の感情から平和を齎す事が出来やうとは、どうしても考へられぬ。ウヘルス(H. G. Wells)の近世文明の破壊に關する豫言の如き、或は近く適中の時期が到着するかも知れぬのである。

革命の原因

固より以上の叙述は、悲觀的結論の根底とする爲に述べるのではない。其等は事實であり、又其事實が社會の擾亂を證明すると云ふまでである。或程度まで、其社會擾亂の状態が西洋文明の経過しつゝある現在の道程を示して居るのであるまいか。事實現今西洋諸國民の間に行はるゝ消極的社會思想は社會の常態から出た事ではない。それ等は確に事實危険の伏在を示す事實であるが、一體社會の進歩で、一の健全状態に進むためには、人間がそ

の社會生活を支配する觀念や、理想に多少混亂の起るのは免れない。従つて普通大變遷が一社會に起る場合には、必ず是に伴ふ大混亂がある。實際に社會の弾力性が十分にあれば如何なる混亂にも耐へ得るために、社會組織を根底から破壊し去るが如きことはない。換言すれば、社會は革命なくして漸進的に改善の道に就くであらう。然るに現今の實際社會に於ては、社會の勢力を握る階級が弾力性、調節力を缺いて居つて、己の利己心と短見とに依つて、社會の漸進的變遷の道を阻まうとして居る。則ち上流社會では保守主義を採るがために、下流社會に於ては自ら之に反抗する、又不健全思想が蔓延して來る。而して此の瓦解の思想は、相寄つて現社會の制度を攻撃する唯一の武器となるのである。斯くの如くにして、現社會に對する反抗の精神は、現在の社會組織では不利益の位置に在る總ての階級に擴がり、他の方にも感染する様になる。今にして上流社會が讓歩しなければ、社會は上下の二階級に分れて、必ず血腥さい革命を起すに相違ないと思はれる。

社會進化の常道を逸することは非常に危険なことである。社會に行はるゝ短見と私心とは屢々此の危険を造るのであつて、其結果は斯る人爲の障害が恰も流水を一時堰き止めるダムの如くで、終に流水は決河の勢を以て押かゝり、社會的洪水を形成するに至る。之は

一般社會革命の原則であつて、彼のフランス革命を始め、近時の支那革命、メキシコ革命の如き皆其類である。

然し特に注意すべきことは、社會的組織は一般機械的組織とは違つて靜止的でない。社會組織は如何に人工的に巧妙に出來上つても、即ち如何に巧妙に行政的統一が行はれて居つても、社會其ものは其まゝにして一箇處に留まつて居ることは出來ない。社會生活は恒に變化して、昨日まで社會を安寧に導いた組織も今日は最早や用を爲さぬ。昨日の善は今日は最早や醜になると云ふことは、特に社會組織の上に適用すべき諺である。文明社會は常に整頓の建て直しをしなければならぬ。進歩は社會存在の法則である、従つて世の勢力を握る階級が一定不變の行政方針を定めやうとした處が、其は結局治世上に於て困難を造るに過ぎぬ。社會的革命を避けんとするには、時勢に適順した漸進的改良の方法を施す外にはない。若し是に反して、社會に革命を起さうとするならば、最早や用をなさぬ社會組織を強ひて維持するに限る。現今の米國に於ける各階級の社會責任者が、以上の如き時勢適順性を欠いてゐる以上は、その狀勢は危険となるに違ひない。

全體が蠻性に立戻る事もあり得る

尤も如上の社會的混亂が所謂時勢推移の期には起り、従つて破壊的思想も上流社會の抑壓に反抗して現はれたものとすれば、危険は一體どこにあるのであるか。危険は、實に此の如き混亂と瓦解とが極端に行き過ぎるにある。從來世界の歴史及社會學に於ても、古い社會制度が全部破壊した後には必ず新なる健全なる社會が出現するといふ保證はついて居ない。反つて一社會制度の破壊の後には、比較的劣等の社會が出現することが多い。斯かる一般の場合には消極的破壊的思想が大勢力を以て流行し、遂に狂熱的傾向を發揮して、始めは攻撃の爲に用ひた考を實説として主張するに至る。自然結果は革命時代の虛無運動に化し、遂に有力の巨人が出て、之を治むるまで如何ともすべからざるものになる。

元來文明と云ふものゝ性質は、前にも述べた如く、理想的社會價値の傳布と蓄積とから成立つもので、其性質たるや極めて脆弱なものである。特に高尚な社會組織に關係ある習慣價値は最も速に崩壊し易いのである。ホップハウス(Hopkins)も云つた如く、社會的習慣が一度崩壊すると、其後は、其習慣の造られた以前の野蠻状態に復するもので、容易に

恢復し難い。殊に高級の文明の場合程一事が困難になる。高尚なる社會的價値の減退する時は、社會的責任心が人の心に消耗し行き、唯々物質主義と個人主義との跋扈する時に於て最も明白になる。今日の如く國民相互に血を以て洗ふが如き國際的戦争や、社會内部の革命の起れる際には、社會價値減退の程度が加速度の勢を以て進む。従つて人間の動物的本能が益々勢を得て、遂には前述の消極的見解が黨派の私見に利用せられ、社會恢復の途は全く閉さるゝに至るのである。斯くの如き争闘が長く續けば、社會的損害は遂に恢復の道がなくなる。

生物的進化には必ず一轉化を要する如くに、社會の發達にも其に類似した革命が現はれて來ねばならぬと云ふ意見は、近頃大分學界に流行するやうになつた。尤も如上の原則は事實上にも適用の出來ぬ譯ではない。然し古から斯かる革命に依つて行はれた社會進化には、常に非常な社會的消費を拂つて居る。階級間の血腥き争ひは社會的廢頽を示さずには果たさない。例へばフランス大革命や、米國に於ける南北戦争の如きは、文明の自然回復力で創痍を治しはしたが、此の如き方法を執らなければならぬといふ事は、忍び得ない損害であつて、其目的を果すためには餘りに高價であると云はねばならぬ。吾人は社會的變

轉を目的とするとは云へ、其が目的を果すためには及ぶ限りに於て、賢明の方法を案出しなければならぬ。然らざれば反つて其方法が目的を破壊することとなる。元來革命の方法は二重の災害を社會國家に與へる。一は過去の文明の傳統を破り、二は破壊が習慣になつて大反動を生ずる傾がある。

社會問題は本來精神的なり

社會の性質から見ても、又社會の變遷から見ても、現代の社會問題は、全體に於て心理的精神的のものである事を明にして來た。即ち今日の社會問題は、その根本に於ては、人間の團結生活に關する價值、理想、意見に關する問題であつて、此點は極端な定命論者や機械論者を除いては一樣に賛同する處である。例へば現今の實際的社會主義者や、優種論者の如きは、昔の倫理學者や神學者と同じく、人生の價值を自分の方面のみから律しやうとする。唯だ兩者の異なる所は、今の社會主義者は、社會の經濟狀態や生物的狀態が變化すれば、他の事柄は自然に解決すると信ずるにある。人間の仕事はその境遇に左右せられるからといつて、時間の餘裕や娛樂機關を善くさへすれば、その他の改良が直に出来る

いひ、又は遺傳の事さへ善く案配すれば、境遇などの事は心配するに及ばぬといふ。此等並に其他の改良意見なるものも、多くは此の極端なる偏面觀たるを免れぬ。然し其等の間にあつても尙ほ一致した點は、斯る社會的變轉の行はるゝ前に當つて、先づ社會の輿論や一般の信念が一致するを要すると云ふことにある。

此の如く第一義の社會問題は本來精神的であるとしても、必しもその他に物質的方面を閉却すると云ふことにはならぬ。人間の社會的生活には常に個人的性質と等しく、一方では物質的條件に支配せられ、他方に於ては價值、理想で代表して居る心理的條件に支配せらるゝが一般である。苟くも現今の社會問題に留意する人々は、現今の文明に對して物質的條件殊に經濟的條件の必要を否認するものはない。亦近くは、優種學的研究に基づく生物學的條件の肝要な事も段々認められる様になつて來た。然し斯かる物質的社會問題を認める場合にあつても、尙ほ斯る種類の問題を解決するには、それ等を我々の觀念や理想、又價值觀念に關聯せしめなければならず、即ち此等の觀念や理想が、その物質的條件をも包含し、それ等と圓滿の關係を保つ様にしなければならぬといふ事になる。

現代文明の中で諸種の觀念理想の衝突

社會問題の第一義が精神的だと云ふことは、必しも其問題が學問上からのみ知力的に解決せらるゝと云ふ意味ではなくして、社會に於ける精神的心理的作用が獨立的の偉大なる勢力を持つて居るものであることを云ふのである。換言すれば現今の社會的理想の如きものも、遠き昔から傳來して來たもので、一朝一夕に物質的境遇の變革に依つて變化し得ざるものであると云ふこと、又物質的方面にも精神的方面と等しく傳來があり、従つて一方に於て、現在我々の文明には傳來勢力と理想との間に不調和があり、又他方には我々の觀念や理想を現在の生活状態と相應せしめる事が缺けて居るのと、此等が現代社會問題の起つて來る因由である。事實現今の社會は非常に混亂して居る。上流社會から見ても、下流社會から見ても、家族から見ても、人種から見ても、將た國民から見ても、個人から見ても、孰れの立脚地から見ても、生活に關する觀念理想が衝突混亂に苦しんで居る。人と人の間も、階級の間、又諸國民の間、關係は皆不調和で、文明は分裂して居る。是れ各の人や階級が、社會生活に適しない混沌の觀念や理想で各々動いて居るからである。

今や我が西洋文明の基礎には悪い石ある事を認めねばならぬ、従つて若し今にして其大の家屋の大部を破壊せずして濟めば、其根底の基を据え換へなければならぬ時節に會して居るのである。然し從來の社會改良方法と考へられたのは、多くは消極的且一面的の基礎に複雑な社會組織を建てやうとするにある。例へば前世紀以來行はれた物質主義、個人主義、利己的國家主義の如きは、即ちそれで、二十世紀も亦此等の誤つた案内に導かれて出發して居る。物質主義の如きは、根本に於て文明の動因たる精神の活動を無視し、又個人主義にあつては、社會共同生活の基礎を否定し、社會的責任、義務の如きを全然閑却し去らんとする。利己的國家主義は人類一般の生活を無視し、人類共同の生活を全く棄却して顧みない有様である。然も是等の沒常織の考が教育あり識見ある社會の人々に尙ほ盛に行はれ、又社會問題の解決に任すべき社會學者の間にすら、斯くの如き意見を有する者のあるは、歎きても猶ほ餘りある處である。

以上の如く社會的には消極に過ぎない觀念や理想が全體を支配する間に在つて、人々が不具的人物となり、不調和的性格のものとなると云ふことは自然の數である。兒童としても親としても、又夫としても、婦としても、但しは勞働者としても、將た工場主としても、

公民としても、官吏としても、社會的生活に適しない不具的人物となるは現今實社會の狀態である。實際今日の歐米社會は高尚なる生活の價値を尊重しない野蠻人を造りつゝある有様で、過去の如く外より來る敵はなくとも、社會の内部に生ずる獅子身中の蟲が恐ろしい。社會の城壁が崩壊することがあれば、それはアフリカやアジアの蠻人襲撃ではなくて、己の戸内の敵が與へる被害に過ぎぬ。即ち人類の進歩が、或る高地に達してその前途を達観し得る様になつたのは、極めて近年の事であるが、其處へ來た時には、進路を阻害する敵が、自らの中に現はれて來たのである。

悲觀するに及ばぬ、但社會的再建を要する

但し現状を單に悲觀するに及ばぬ。只現在の危険と困難とを明にし、特に社會の指導者階級が目を醒まし心を弘くして之に當る覺悟を必要とする。個人の間には正義の樹立、國民の間には平和の樹立を念としなければならぬ。特に個人の性格を作り出す源泉に注意して、徒食の輩、怠惰の徒を除く様になければならぬ。社會問題の解決が個人の性格を左右するにありといふ事は、或る人々から見れば、社會問題を社會的に解決する事の出來な

いしるしだといふ事になるが、此の如き見解は誤であつて、此は社會問題の最も困難な點であるが段々に説明しやう。

現在の社會狀態は悲觀失望にはあらず、更に前途經綸の策を立つべき時に遭遇して居る。又其策たるや、室内机上の空論ではなくして、實際的經驗、實際的工夫に出づるものでなくてはならぬ。現代は、人類の社會がその進化について自覺し始めた時代であるので、社會の實狀を意識して、之に依つて自らの運命を定むべき時なのである。社會の指導者は文明の要素について、各々その性質を明にして、その將來の障害を除く様に、科學的理會で進まなければならぬ。此から以下四章、此等要素を吟味しやう。

第二章 現代社會問題の歴史的要素

社會的の發達に於ける傳承の勢力

傳承と云ふものは人類社會の發達には存外關係の多いものである。知識、思想、乃至價値等は、皆世々代々の社會を經過して現代社會生活の精神的方面を形造つて來たのである。大觀すれば、是が個人の所謂主觀的境遇を造つて行くもの、従つて個人の發達を支配して行くものである。傳承と云ふものは、斯うして社會生活の何れの情勢にも入り込んで來る。尤も經濟上の定命論者になると、社會に於ける斯かる精神的要素が、各生命を具へる事を無視するが、實際に於ては、現存の如何なる社會問題と雖も、此の傳承を離れては、全く解釋することが出來ぬ。斯くして、如上の社會的理想及思想の歴史を知らずしては、現社會問題は終に解すべからざるに至るのである。

今如上の見解に據つて人類社會生活の太初に遡るは假令可能の事であるとしても、此場合無益の事である。其學術的研究は社會的人類學や史學の役であつて、此處には必要がない。唯だ吾人人類が現代の如く次第に高等文化に進みても、尙ほ其太初は野蠻蒙昧の時代にあつたことを知らなければならぬ。例へば現代の文明の如きも、尙ほ幼稚の状態を免れない點もあつて、物質的方面に於ても尙ほ石器時代を去る事遠からぬ點もあると同時に、社會や道德の方面にも未開野蠻の遺風は尙ほ存して居る。其野蠻性が現代社會の秩序亂雜の基因となるのみならず、人間本來の動物的本能と相助けて、吾人の現代生活を元の野蠻の時代に逆戻りさせる恐れがある。若し今にして此の野蠻的本能を絶滅しなければ、人道は遂に亡ぶるに至るであらう。現今ニュー・メキシコのブエプロ印度人が、太古の蛇舞踏を殘存して居ることは、敢て不思議とすべきでない。寧ろ歐米文明人間に尙ほ多くの野蠻人のあることを大不思議としなければならぬ。

然し吾等は現今社會狀態如何を、此以上に述ぶる必要はない。唯だ本章には西洋文明の直接根源を闡明し、且つ最近の社會的先人が果して如何なる貢獻をしたか、又如何なる新勢力がその中に生じて來たかを研究すれば足るのである。

抑も現代の歐米文明の基因は甚だ複雑である。從來世人は西歐文明の源泉がギリシヤとロマとにあると云ふ、其説は固より當を得て居る。然し尙其外二個の人種、即ちヘブライ種族と古代チュートン族との大な影響がある。吾人はヘブライから社會的理想—倫理宗教に關して大なる影響を蒙つて居る。少くとも、歐米文明は、現今に於ても宗教道德の方面に於ては、少くとも名目の上ではヘブライ思想を標準として居る。尤も世人の多數は、現今に於ては此の名目上の信順をさへも棄却せんとする状態に居る。

西洋文明に於けるヘブライ傳承の影響

文明の研究で、ヘブライ倫理宗教の價値が如何なる批評に値するにしても、西洋文明が如何にヘブライ思想に影響せられたかといふ事は有史以來の最も驚くべき現象である。尤も西洋文明は直接ヘブライ人の崇拜した唯一神を拜した譯ではなく、キリスト教を通じて初めて其宗教思想を學んだのである。然し此は、ヘブライ人が物質或は精神の方面で古代の世界を支配した爲に、世界が彼等の神を信するに至つたのでなくて、事實彼等は世界で賤められた亡國民であつたのである。古來の哲學者及歴史家は此のヘブライ文明の影響を

説明して、彼等の勢力は、彼等が直接の影響ではなくして、實はギリシヤ文明を通じて變形寛和したる間接的影響であつたと考へた。而してキリスト教が西洋に行はれる様になつたのは、その中にあるギリシヤ的要素の力であるといふ。然し今此の問題を審議せずとも、事實キリストの教には、後期のヘブライ豫言者が含蓄的にでも教へて置かなかつた者はなく、此の點はキリスト自らも認容した處であつた。云はゞキリストの事業はヘブライ思想の必然の結果と見ることが出来る。若し中世の教會中に生まれた教會の宗義を除いて見れば、キリスト教のユダヤ教に對する關係は、恰も開花の薔薇と其莖とにも似て居る。固よりギリシヤ文明のキリスト教に對する影響は偉大なるものがあつたけれども、其根本に於てはキリスト教は依然ユダヤ教思想だと云はねばならぬ。従つて延いてはユダヤ教は現代の歐米文明にも間接的名目的ながら影響すること尠少なからざることを知るに足る。

此の如くユダヤ思想が、西洋諸國に宣傳せらるゝに至つた理由は、少くとも一つある。其は昔のユダヤ人が宗教倫理の上で超越的天才であつた事である。或論者が云つたやうに、「世界各國民が皆眞面目を失つた時に、只だ獨りユダヤ民族は眞面目、眞摯の民族であつた」。彼等の宗教、倫理思想が世界を征服したのは、一に彼等が祖先から傳來して來た宗教

觀念が、眞摯であつた事と社會的に有用であつた事とに基くのである。實にギリシヤが美術の方面で秀でて居た如くに、當時のユダヤ民族は正に倫理宗教の上で世界に秀でて居たことは疑ふべからざる事實である。然も倫理宗教は、藝術に比して、遙に多く生活行爲に影響を與へ、その代表する價値理想は社會生活に對して直接の關係を持つて居る。道德宗教が、斯の如く人類の生活に深大の關係を有するために、一般には科學的藝術的思想に先つて、倫理宗教の觀念が異常の發達を遂げたことは、敢て怪むに足らぬ所である。

世界多くの民族ある内にあつて、ユダヤ民族が特に宗教道德的方面に發達したと云ふことは、一度彼等の實際社會生活を檢すれば、明瞭に了解し得られる。抑もユダヤ民族が世界の青史に其名を露はすに至つたのは、既に其以前に於て約千年間、セム民族の文明が幾多の弊害に苦みたるに鑑みて初めて成立したのである。此は彼等の學者の既に記した處に明である。ユダヤ民族は元牧民であつて、其社會的統一を求むる爲めに家族制度を採つた。然も唯一神教を崇むるに至つたと云ふことは、専ら地理的關係に基くものだと云ふ、ルナン等幾多の學者が唱へる處である。若し一度彼等の社會制度を研究し、且つ其實際生活法を尋ねるならば、彼等の宗教、道德思想は自然に明白になると信する。彼等の道德宗教思想

は、主として家族に基いて居て、結局家族的生活の理想の實現と云ふことに存するのである。従つて神は彼等の父であつて、彼等自らはその子、即ち互に同胞だと考へた。その豫言者等の用ひた宗教的用語は、皆家族的社會的生活から借りて來たものであつた。此れにユダヤ人の社會的生活、特に家族的生活に於ける統一と調和との勝れて居た事を示すものである。従つて彼等の思想は、多少狭隘な國民思想を持つて居るが此れを除いては大に社會的なる點に於て稱すべきである。彼等が主觀的個人的の理想を避け、主として理想的社會生活、特に範圍廣き家族の愛と義務とに盡したことは特色とすべきである。その間に後期の豫言者やキリストが此等の思想を弘く遍通的にし、即ち世界的にして、その倫理は人道的になつた。而して此のユダヤ民族の社會思想は、ギリシャの文明に歓迎せられて歐洲の天地に傳布せられ、泰西文明の裡に攝取せらるゝに至つたのである。

なほ他方面から見ると、ユダヤ民族の道德の特徴は、家族生活の價値を理想的に擡げて、その基の上に宗教と道德とを合體せしめた點に存する。是がために道德、宗教は勿論、社會生活にも深遠の意味を加ふるに至つた。固より其當初に於ては彼等の思想も極めて稚氣あり又狭量の性質を持つたけれども、歴史の進展する間に、其思想は次第に精神的となり、

遂に豫言者及キリスト教が之を擴大するに至つた。之に反して、ギリシャの宗教は、殆んど非道德的と云ふべきである。ソクラテスの如き、プラトリーの如き、社會的指導者すら、ギリシャの宗教の内からは、理想的社會道德を發揮することがなかつた。反つて宗教と道德との絶縁が、社會の道德を進めるに必要だと見られた位である。その結果、ギリシャ末期の倫理は、宗教を離れて生氣を失ひ、制限ある道德又は低い道德教となつた。兎も角ユダヤ人の道德は、宗教的熱情を以て倫理思想を涵養し、且つ道德をも宗教をも社會生活の上に打ち立てた爲に、古代の文明の中で生残り又傳播したのである。勿論その傳播は、プラトリー學派やストア學派の援助に待つたとは云へ、久しく西洋文明を感化する力を持つに至つた次第である。

斯くの如くにしてユダヤ民族の宗教的道德的理想が、我等西洋文明の最も重要な根底を建設せしものとすれば、ギリシャが占有した文明的源泉の名譽は、正に此のユダヤ民族に譲らなければならぬ。一體倫理、宗教の理想は、文明の指導的基礎となるものであつて、社會的生活の理想や價値はその中に含まれるのである。然るに不幸にも此のユダヤ思想は他の文明に接觸して、その中にある反對の要素や又その主義と相容れない生活の中に飛び

込むだ。兎に角ヘブライ文明は西洋文明に一要素を齎らした。而して之と同時に他の文明が常に此のヘブライの宗教倫理思想を破壊せんとして追つたのである。

ギリシヤ傳承の影響

ギリシヤ文明は、彼のユダヤ思想の如くに西洋文明に最大なる貢獻をして居らぬけれども、その氣風が猶ほ多大の影響を與へて居ることは拒否すべからざる處である。藝術、哲學、此の二者の人生活動方面に於ては、彼のユダヤ人の宗教倫理に於けると等しく、ギリシヤ人は非常に優秀なる國民であつて、近世の世界各國に對する模範となつた。ギリシヤ人は特に智的方面と美的方面との天才を持つた民族であつた。藝術上の優越は云ふ迄もないが、一般社會の生活上に於ても甚だ多く藝術的性質を具備して居た。彼等は人生の總てを、直ちに美的に觀察し、其宗教は美的宗教となり、其倫理は美的倫理となつた。一言にして云はゞ「生活上の藝術家」と云ふことが、彼等國民の理想とした處である。然し此の一點は、ギリシヤ人の長所であると同時に、又短所たることを知らなければならぬ。

藝術的であるから、従つてギリシヤの倫理思想は又主觀的個人的であつた。尤も其倫理

思想中の健全なるものは、主として社會的國家的であつた。例へばプラトンの理想國に現はれた正義の思想の如きものがある。然しアリストトルやストア學派の主張の如きは、只だ上流社會の一部に行はれたのみである。社會一般に行はれた其他の懷疑派や快樂主義の如きは、皆ギリシヤ社會生活の特色を露はして、個人的の方面に傾いた。彼等學者は、自己實現の道德を教へた。個人的幸福、個人的發達が直ちに人類の最高善だと信じ、其に據つて人生の指導原理を説述したのである。されば此の個人的主觀的教理と其傳統とは、久しく我等歐米人を刺激して自己修養、幸福の理想を追求するに至らしめた。而してギリシヤ文明の結局は如何。歴史の語る處に據れば、ギリシヤ文明は既に其初めに於て腐敗の傾向を有して居たので、遂には漸次廢頽の極に至るの止むなきに至つたのである。

然しギリシヤ人の倫理的理想も、可成り甚大の感化を近世社會の上に及ぼして居る。此れ一に現今の専門大學教育の淵源が遠くギリシヤに發すと云ふばかりでなく、近世の哲學も皆遠くギリシヤ哲學に其の源泉を求めなければならぬ。近代の倫理は確に皆哲學に基礎を置いて居るが、其哲學がギリシヤに發して居るが爲めに、近世の教育ある社會にあつては、宗教思想をユダヤ、キリスト教系に覓むる如く、人生道德問題に就いては此をギリシ

ヤ哲學系に覺むる習になつて居る。前述した如く、現代社會の大部分が人生の實際目的をユダヤ、キリスト系よりもギリシヤ思想系に求むることは、過去の慣習と先人先覺の例とに模ふことよりも、寧ろ人性の自然的傾向に基くことが大原因になつて居る。

ギリシヤ人にとつて今一つの閑却することの出來ぬ功績は、自然及人性に對する科學的研究の第一歩を進めたことと云ふことである。知力の自由といふ事は、哲學的思索や科學的研究に是非必要な事であるが、此の自由はギリシヤの社會に於て初めて大に實現する機會を得た。哲學的科學的傳統は、西洋ではギリシヤ人の初めて開いた所であつた。文藝復興の運動は、唯だ此の傳統の復活を期して與つたものに過ぎぬ。ギリシヤ文明が藝術上の功績は云ふを俟たぬが、此にも優つて大なるものは智力自由の一點に存する。

ロマ傳承の影響

ギリシヤ人は西洋文明に對して、藝術的學術的功績があつたが、其外にも倫理道德、社會的生活の上に屢々大なる感化を與へた。此と并んで尙一つ現代の我等に對して政治法律に關して大なる貢獻をした古代の人民がある。それはローマ人であつて、ローマは非常に廣大

なる領土を征服し勢ひ之を統治するために、古今未曾有の政治機關を造るに至つたのである。主として軍國的好戰的國民であつたがために、それから出た倫理や哲學や藝術は、野蠻を去る事遠からぬものであつたが、ローマ人の政治的法律的天才は、近代政法組織の基礎を造つた。ロマ法が如何に近代社會に影響を及ぼしたかと云ふことは、近世の行政司法官の職名に皆ロマの名目を用ひて居るので見ても知らるゝのである。ロマ法の完全な發展は固より比較的後代の事に屬するけれども、近世の法律家はロマ法に負ふ所多く、古代ロマ法が今日歐洲大陸諸國の法律に重要基礎となつて居る事は、特に吾人の注意すべき所である。英語國民に於ては、其の法律組織及施設は、古代英國民法に根據することは免れぬにしても、其法律の原則、原理、形式等、凡て精神はロマ法から出て居る。斯くしてロマ法は、近代の社會生活や制度の上に政治法律の骨格を與へた。

尤も他方に於て、ロマ帝國は軍國主義の國又征服主義の國家であつたがために、西洋文明には多少とも不幸な社會的傳統を遺した。例へば近代の軍國主義や帝國主義の如きは、實はロマ傳來のものであつて、近代になつて此の精神から常備軍の主張をしたものに第十六世紀のマキャヴェリがある。マキャヴェリは、人も知る如く、大のロマ帝國崇拜者であ

つた。國民の生命と健康とを維持する手段として、不斷の國力發展を必要とする思想は、彼のマキヤヴェリのロマ史より學び得た結論であつた。彼の「力は正義なり」と云つたニイチエの如きも、ダーウキンを誤解したといふよりも、ロマ古典の感化が多大であつた。ロマ帝國は、云はゞ掠奪主義、弱國併呑主義の實行者であつて、利己的國家主義の外に一步も出でなかつた國である。従つて其社會的傳承が他の如何なるものにも増して、人類社會に不幸と災害とを與へたかを察するに餘りがある。或程度に於てギリシャ國民は感覺的快樂主義を以て近世社會に累したが、ロマは上述の掠奪的軍國主義を以て累を後世に及ぼした。此外には、何れの國民にも同様に動物的本能や野蠻性のある事は勿論である。

チュートン民族傳承の影響

其外尙ほ一つ今日の西洋文明に多大の貢獻をなしたるものがある。其國民は古代ドイツ民族である。歴史家は多くドイツ民族の貢獻を拒否して唯だその文明を促成するに預りし男女幾何の人物にのみについて論じた。然し其は歴史家の誤謬であつて、彼等民族の貢獻にまた多大なるものがあることは疑はれぬ。彼等が現代の社會生活に残した根底ある傳承

は、個人的自由性にある。固より北ヨーロッパは、古代に於て殆んど見る影なき社會生活をばして居たので、唯だ單純な工業と、奴隸制度のない原始的共和社會とを造つて居たに過ぎぬ。其がために彼等の個人的自由の氣風は、彼等社會の特色の一つであつた。チュートン人種は其後ロマ人のために征服せられたけれども、彼等の個人的自由の傳統は、更に破壊せられずに久しく傳つたことは、初代ドイツ民族史や初代英國史に於て證することが出来る。而して此の民族的特色が、結局現今西洋文明の特長を造つて居るのであつて、例へば現在英語國民の社會に顯著なる自由的社會生活の理想の如き其一つである。

尤もチュートン人種の傳統が現代文明に最良の寄與をしたとは云ひ乍ら、他面に於ては亦多少の弊害を殘留したことは争はれぬ。初代ドイツ民族の文明は、程度が甚だ低くて、彼等の多くは唯だ海賊山賊的生活をして居つた。其風習は、實は今日の個人的自由の源泉をなして居るのである。吾人の文明が多少無慈悲の傾向を帯びて居ることは、斯かる北歐蠻人の血統を生理的に遺傳して居るが爲めのみならず、精神的方面から云つても、權力即正義といひ、又掠奪的個人主義の思想系統を引いて居るものと見るべきである。自由を愛するチュートン民族のこの特性は、應て個人の獨り免許の基礎を成して居るのである。

キリスト教の影響

斯く論じれば、論者は必ず現代西洋文明に及ぼすキリスト教の感化を今少し詳細に述べる必要があると云ふであらう。然しキリスト教は、前述の如くユダヤ文明にギリシヤ文明が影響して初めて渾成したものである。尤もキリスト誕生の頃は、ユダヤの倫理、宗教、及社會生活が漸次衰退して、豫言者の理想から益す遠ざかり、而してその國家と教會とは反動的保守黨の掌中に陥つて、廢類しつゝあつた。而してユダヤ傳來の形式主義、獨尊氣風は再び現れて倫理や道德に累した。斯かる時勢に際して、キリストの人格は、實に從來のユダヤ國民の宗教、道德思想を其儘繼承するには餘りに偉大であつた。そこでキリストは終に自ら救済主を以て任じ、イスラエルの民を救ひ、其民族の精神的優越權を天下に定めんと叫んで現はれた。彼は神の王國を實現せんとし、人類救済の精神を以て天父の命する所に随つて社會道德の革命を計らうとした。當時キリスト及其他豫言者は、ユダヤ文明の指導者と仰がれ、且つ其指導の理想を以て古來同族豫言者の遺志を繼承して、更に斯かる行動を以て世界萬民の道德宗教の理想を促進せしむる所以と考へたのである。斯くして

初代キリスト教はロマ帝國に入り、曾ては社會改良者と見做されたストアの克己主義や、エピクルの快樂主義がロマ帝國に於て道德的緩和策として失敗したのに代つて、此の精神的大事業を成功したのである。

此の如くキリスト教を以て、ユダヤに於ける極端なる國家主義を打破し、改めて世界に於ける人道的運動に出た、云はゞヘブライ傳承の擴充と見るのである。斯くしてユダヤの宗教倫理思想は、キリスト教として世界的となり、人類的となつたが、なほ其根本に於てはユダヤの根本思想は全然變革したのではない。然かも、かかる大事業を成就したのは、一にキリストの大人格に存したのである。蓋し人類史上の大事業にしてその中心たる指導人物の缺けたる場合はないが、キリストの場合は、大人格の力で傳承が強烈になり又變化を経た適例の一である。社會學にあつても、斯かる大人格の社會的創造力は到底閑却すべからざるは勿論なれども、此處には斯かる細密の歴史的敘述は暫く之を除いて置く。唯だキリストといふかゝる大人物の感化は、西洋文明に對しては、ユダヤ民族傳承の感化に劣らず偉大なるものであることを述べて置きたい。

中世文明の統合企圖

然るに上述四大文明の傳承が、古來完全な調和をしなかつたと云ふことは事實である。例せば、ヘブライの宗教倫理思想が、彼のギリシヤの哲學、藝術、ロマの政法、及チュートン族の個人主義と全くは融和しなかつたが如きは其である。近代社會生活に於ける思想及理想の衝突は、歐洲文明の本流に上述の不調和的傳承があつた事をその主因として居る。中世文明の事業は、正に此の諸種傳承を調和統一するにあつた。中世に於てはキリスト教が中心となつて、ヘブライ宗教や、ギリシヤ哲學や、ロマ政法思想が是に隨伴し、僅にチュートン族の個人主義のみを拒否して現はれた平和であつた。そこで、中世崇拜者は、恰も中世を以て完全なる一大有機體だと考へるに至つた。然し其實、中世文明は、不堅實な又虚偽的性質のものたることは、此等諸種の傳承が中世を通して、常に相衝突した事、又中世文明の最終破滅、及び文藝復興期に於ける異教主教の發生等で明に之を證明し得る。文藝復興は、西洋文明に於けるギリシヤ文明の強い復興であつて、此の運動が彼のヘブライ、キリスト教的傳承と第一に衝突したことは數の自然である。文藝復興期以後に、以上

の兩者孰れが優勢であるかと云ふことは明確でないが、大體に於てはギリシヤ文明がヘブライ思想に勝つて有力であつたと云ひ得る。

近世に於ける個人主の勃興

以上の混亂に加ふるに、西洋の近代文明は、其混亂の内より更に新なる勢力を生むに至つた。其上、近代文明は、古代文明の流を酌んで居るに關はらず、其古代文明と十分の調和をして居ない。従つて現今に於ては、古代文明傳承の葛藤に加へて、現在では未だ圓熟せず漸次發達しつつある近代文明の新運向が之に加つて來た。

近世社會運動の最大なるものは、個人主義であつて、その反面には社會に權威の廢棄を來した。元來此の個人的自由の精神は、ギリシヤ文明の復興には相違ないが、其根底は、依然チュートン族の傳承に基いて居るのである。此の個人主義運動が最初に出現したのは、キリスト教界に於ける新教徒運動であつて、其運動は、實に中世教會の敗徳專横に對する反抗には違ひないが、その根本では、依然チュートン族の個人主義の發現であつて、如何なる種類たるを問はず、宗教的權威に對する反抗運動に外ならぬ。次で此の運動の顯著に

現はれたものは、民本主義運動である。其初めは既に宗教改革の時に發して居るけれども、其結果は第十九世紀になつて、西洋諸國で民主政治の建設となつて現はれた。

中世教會及國家に對する自由開放運動に伴つて、此の個人主義運動は益々其勢を増すに至つた。利己の外に求むべきものなしと云ふ人性の解釋、又思慮ある利己は行爲の全規範となると云ふ利己主義は、西洋文明に於ける固定的傳承となつた。國家及其外の自然に發生した社會團體は、一に個人の契約に成つたものであると云ふことが、近代の一般人の考となつた。その結果、人生の理想は個人の快樂幸福に外ならず、自利といへば幸福といふ外には存し得ない事になる。其結果、社會の制度は一に個人的快樂を増進させるため變革せられ、且つ設定せらるゝに至つた。此の如き見解を以て、色々缺陷のある古風の社會、三百年以上に互つてあらゆる社會改革を拒絶した社會に對したから、その思想は勢ひ社會的革命的氣運となり、遂にフランス革命に破裂したのである。

權威の束縛から個人を開放する運動は、フランス革命に於て其極に達し、又成功に達した如く見えたが、實は其運動はそれでは終らず、個人主義の傳承は、現今にまで及んで居る。其がために教會及國家の權力は、漸次衰退するに至つた。素より多少の蹉跌はあつた

が、個人主義は其がため益々盛になり、非常な廣範圍に及んだことは、殆ど今日に在つても想像のつかぬ位であつた。

殆ど純然の虛無主義にも近づかうとする個人主義の傾向は、果して如何なる邊まで進行するかと云ふことは、現今の西洋文明の水平線上では實に見分けがつかぬ。吾等の祖先は人間精神の開放と云ふことを、獻身的事業の内でも最も高尚なものと信じて居つた。されば、彼等は、人類の歴史は、一に人間開放の進行に外ならぬと解釋した。「開放」といふ考を進めて、個人を家族から開放し、婦人を母の務から開放し、個人を固苦しき義理道德のうちから開放するといふ様な事は、此等の祖先等は考へ及ばなかつた。故に一方に於ては、個人主義が僅少な利益を歐洲文明に與へたことは、歴史上證明し得る事であると共に、他方には個人主義の利益は世界の或る國々では尙ほ一層起る必要はあるが、それが又同時に現代の最大の危険で、社會の秩序や文明に、危険を及ぼしつゝあることも、之を確認しなければならぬ。

一部は個人開放運動に基因し、他の一部は古ギリシャの文藝復興に基いて、近世になつて科學が文藝復興時代から現はれて來た。此の科學的運動は、近世文明を構成する第二の勢力となつたのであつて、例せば、精神的方面にあつても其運動の重大なることは、誰も否認することの出來ぬ處である。即ち科學は、人間精神の眼界を擴げ、舊信念を打破し、終には社會には傳來の勢力ある事も忘れしむるに至つた。更に科學は、過去人の夢想したる所以上に、人類の希望と向上とを實現して、あらゆる物質の世界を征服するに至つた。而して物質的方面に於ける科學の發達は、云ふを俟たぬが、其科學の用を大膽にも人間の身體及精神作用にまで及ぼして、之を左右し得るとし、遂には更に人類社會の構成を論じ科學の威力を示さんとするに至つた。

科學の勃興に對して、キリスト教會は誤つて之に反抗した事も重要な原因となり、又科學自己の力によつて、社會的に見て消極的研究の氣風が現代文明の中には、大に起つて來た。即ち科學の範圍から心理的精神的要素を除去して、唯だ世界を物理的機械的に見んとするに至つた。其がために近世科學は一般に社會的理想を無視するに至つたが、此の破壊的傾向は、今日に於ても主として宗教家が科學に反對する事の強い國（フランスの如き）

には最も明白に現はれて居る。

工業の革命とその結果

一方には束縛から逃るゝ個人の開放運動と、他方には科學的知識の發達とに伴つて、第十八世紀の後半から第十九世紀の初にかけて、大革命が起つた。中世の工業は、僅に小工場の職工が製作し、之を小商店に齎した工業品が其主要なるものであつた。従つて其製造者が直ちに商人となる關係であつたために、其に屬する労働者の如きも、組合團體(guild)の僅少の束縛の外は、極めて自由なる製作をして居つたのである。然るに此の原始的工業界は第十八世紀の末葉及第十九世紀の初葉、機械が人工に代る頃になつて一大變革が起つた。即ち機械の價額が莫大になり、労働者の自營に任せぬ事情のあるため、大資本家の手に成る大工業が次第に發達するに至つたのである。

其結果、從來の小商舖は跡なくなり、之に代つて機械工業が起り、労働者が大工場の下に集合するに至つた。換言すれば從來の手工業が衰微して、現今の機械工業、製造場組織に變遷するに至つた。斯くして社會一般には、一面に於て製造業の進歩で非常な利益を收

めなければ、他面に於て労働社會は非常な損害を招くに至つた。労働者は、斯かる時勢の變遷のために、自由と獨立とを喪ふに至つた。労働者は、今までの如くに自己の手工に依頼することが出来なくなつて、一大機械の一部分の如くなつて了つた。其が遂には資本制度の横暴を生み、労働者の境遇を非人道化するに至つた。加之資本的工業組織は労働者の個人を機械視し、從來の社會階級或は一家族の位置を剝奪して、只だ生産上より見たる一單位と考ふるに至つた。男女兩性の區分、少年青年の間の區分は、斯かる工業主義の暴力で益々之を削減するに至つた。工業の發達は、一方に於て非人道的境遇の力で益々物質的の人生觀の昂進を促がすと同時に、更に個人主義を促進するに至つた。

近世の工業的革命は、一方非常に富の發達を促進した。然も其の富が労働者間には適當に分配せられなかつたに關はらず、社會の大部分は從來の歴史が未だ經驗せざりし生活上の餘裕を感ずるに至つた。換言すれば富力の増進は、社會の人々をして奢侈と享樂とに耽けることを得しむるに至つた。其の結果は、原始時代に於ける危険を免れて餘裕の生活を得しめた。その上醫學の發達が加はつて、富のある者は、醫學の力で肉體や道德上の惡結果を顧みないでよい様にした。

以上の如き理由の下に、社會は經濟上、階級と階級との間に争闘を促成し、益々社會の紛擾を繁くするに至つた。階級戦は各階級の利害問題の爲に激しくなり、一方に於ては特權なき階級と、他方に於ては特權ある階級とが、互に利害を争ひ、此兩者が單に實際的事情の上よりのみならず、更に感情の上から互に對抗の勢を助くるに至つた。此の形勢の爲に、社會的協力性に必要なる同情及理會を失つて、遂に兩者間の距離を連絡せしむる橋梁を失ふに至つた。其がため、社會的階級心は人類團結の傳統を破壊する仲介物となつた。

近世思想に於ける「批評的」運動

近世文明の顯著なる他の運動の一は、輒近思想に於ける「批評的」運動である。この運動は一面に於て個人主義と關聯し、他面に於て科學的運動の發達と深き關係を持つて居るものである。公衆的批評主義なるものは、即ち社會的發達の問題を取扱ふものであつて、現今の自由社會の變遷から生ずる社會其自身の解決法である。此の批評主義は元來積極的建設的のものでなければならぬ。過去の社會が残したものの内、建設的の材料は、之を採り之を保存して、新たな組織秩序を建設する資料としなければならぬ。然るに此の批評主

義も他の一般社會機關と等しく、動もすれば極端に傾き、次第に消極的破壊的のものとなる傾向を持つて居る。斯く云ふ破壊的批評主義は、第十九世紀に於て社會一般の組織及風習を攻撃した。特に中世以來の教會及國家の力が維持し來つた殘留風習に對する攻撃であつた。舊習に對する此の極端な反抗の結果は、社會の道德、宗教、家族、政治に對する消極的主義思想のみが行はれて、其思想、主義が一般社會に廣く傳播した事である。されば斯かる社會的消極主義は、現今西洋文明に於ける唯一無二の危險物と見做すべきものである。此運動が社會的迷信陋習を打破すると同時に、他方に於てはニイチエの無道德主義やナンジカリズムの激烈主義を産出するに至つたことを認識しなければならぬ。斯かる無道德主義が今日に於ては次第に世人に認められ、西洋諸國に寛容せらるゝに至つたが、其結果は矢張り文明の高尙なる價値を漸次破壊することゝなつた。

近世人道主義の勃興

第十八世紀の末葉及第十九世紀の全體に亘つて、人道主義の堅實なる復活が現はれた。之は主として千餘年に及んだキリスト教の社會的道德の精神を充實するものと見るべきで

あらう。然し其他に於ては、民衆の自由開放、人間知識の増加、科學的發見發明、經濟の世界的發達等が又大なる原因をなして居る。一體十九世紀の人道主義は極めて皮相的、矛盾的で變化性を帯び且つ感情的のものであるが、其運動の効果としては、奴隸を開放し、婦人に自由を與へ、民衆一般に教育を普及し、組織的慈善を盛にし、禁酒運動となり、野蠻地に於ける福音傳道事業を興し、さては平和運動の如き、大に見るべきものを生じた。此人道主義運動以外のものは、多くは一得一失で、且つ其効果發展の上にも多少の制限を附して考へなければならぬ。然るに此の人道主義は、其弱點を除き、人道的科學と協力すれば、將來に於て、平和的に圓滿なる人類の發達に資すべきは期して待つべきである。而して其が又第十九世紀が第二十世紀に遺す大なる遺産となるのである。

十九世紀の失敗した點

以上の原因に基いて第十九世紀は社會的大變遷の世紀であつた。青史あつて以來最も進歩的世紀であつたが、又他面に於て建設的方面を發展し得なかつた時期であつた。その間に勢力を占めた理想があつたとすれば、それは個人の自由と物質上の成功とであつたが、

此等の理想は、一層高い社會的見地から見れば、甚だ消極的であつたことが段々明になりつつある。又斯かる消極的理想はそのまゝにして置けば、自然個人主義や物質主義に陥つて、西洋文明の立場を破壊するに至るべき事も明かである。

アメリカ社會狀態の特質

近代文明の諸の特色を北米合衆國民が之を發揮したことを、一應陳述することは無用の事ではない。新大陸の新興國に於て、近代の個人主義や、工業主義や、一般社會的消極主義が發展したのは驚くべきものがあつた。米國は元來植民の土地であるがため、世界の諸國民が此地に來集して、益々近代主義の勃興を促すに至つた。植民の結果は米國に世界の傳承を播布し、雑多なる人生觀を輸入して、近代文明の社會的混亂を益々繁雜にするに至つた。其がために社會的根底を形成する平和と鞏固とは到底米國には見るべからざる所となつた。嘗てギッジングス氏は「第一に相敵對する諸人種の集り、第二には雑多の國民性、異なる生活の標準、宗教道德、法律的習慣、乃至性格思想等の差違を集めて、それで一團の社會を造らんとするは、蓋し米國の外に見るべからざる所である」と云つた。

人種の混合、宗教の混淆、さては傳承氣風の混合、其等が相寄つて人道主義の發生を促したものは、蓋し米國以外の地には未だ見るべからざる所である。「國民の熔鑪」から果して何が鑄造せらるゝか、何人も豫知することの出來ぬ處である。社會學者は、兎角樂天的の考から、文明の混交は、反つて長短相補つて、更に高等なる文明を創造するものであると云ふ。果して其樂天説が、信するに足るや否やは、吾人の確證し得ざる所である。何となれば、近代の科學的研究から見れば、各國民は相互に其長所を學ぶと同時に、又其短所をも學ぶものである。長所のみを學ばんとすることは、其國民の指導者たるべき者の賢明な指導を待たなければならぬ事である。

米國の社會には所謂の邊境生活の氣風が行はれ、文明を後に残した風習が残つて居る。邊境生活には常に蠻力が直ちに法律となり、極端な個人主義が實際生活の上に跋扈することが多い。其が爲に、秩序ある社會の風習が一般に認められなくなる。實際には米國の初代社會は、明に此の邊境氣風を示した。其後社會の發達した時に於ても、この邊境氣風は依然として殘留したのである。其證左としては、離婚、殺人、私刑などの數が、自發性や、個人力や、獨力主義の勢力と共に相並んで多額の數を示して居るにても知られる。なほ其

以外に於ても、邊境生活は、個人に一攫千金の機會を與へ、天然の富源を荒らして自分の富を作るなどの事が甚だ多い。斯の如くにして、歐洲から輸入して來た商賈主義、獨占事業の氣風と個人本位の事業熱は、強く米國人の大多數を支配する力となつた。

以上は大約現代社會に浸潤せる歴史的傳承の要素であつた。素より以上の各問題については地理的、生物的、將た精神的分子が凡て歴史の内に融合して居ることを記憶しなければならぬ。一面より見れば、四流の古代文明は相互に相混じて現代に及んで居り、その上に又近代文明が自ら多大の葛藤を産出して居ることも事實である。今日吾等は、過去の此等文明潮流の調合に成功し得ず、人生の理想に關して紛雜と混亂とに悩んで居る。然し此の状態を免れて、更に新なる理想的社會を建設することは、多大の知能と勢力とを要するが、此の問題は絶対不可能事ではないのである。

第三章 社會問題に於ける物質的及生物的要素

社會發達の物質的條件

抑も人類社會が或一定の物質的條件の下に成立して居ると云ふ事實は到底否むべからざる事である。一方に於て社會が精神的存在であるとも云へるが、又一方からいふと物質的條件の或程度に備はつて初めて存在し得ると云ふ事が出来る。例へば温度の少しの變化でも、此の地球上より人類の生命を絶つことが出来、少々の氣候の變遷が人類の高等文明すらも絶滅することがある。人間は自然を支配すると自負するけれども、事實少しの地震があつたり颶風があつたり洪水が起つたりすると、忽ちにして人命を失ふ程に薄弱なものである。總て人は身體の生理的原则に支配せられ、自然淘汰の原則に服従して生存して居るので、其等の法則を了解し、又其法則に調和的行動を執つて、自ら進歩發達するのである。

極めて卑近な實例を挙げれば、人類の生存は勿論、又文明其自らにも、共に物質的説明を

加ふることが出来る。物質的條件は、人類生活の完成を期するために必要な條件であつて、或は單獨に、或は相互に連合して人生生活を保證するものとなつて行くのである。其がために、今日に在つては、社會研究者にとつて、地理的條件は當然のことであつて、恰も太陽の光線がなければ人類の生存が出来ぬと云ふ程度に明確となつた。今日では社會成立の條件は非常に複雑で、例へば生物界に行はれる生存競争の原理の如き、矢張り生活條件となつて居り、又自然淘汰の如きも、社會進化の上に重大なる要素となつて居る。然し唯だ其等ばかりでは社會發達の原因とはならぬ。社會的文明的發達は、生物進化の途とは寧ろ大に異つて居る所がある。

物質的生物的要素が社會的成立の上に重要であることは、充分に認めて行かなければならぬが、又他方に於ては、只だ其等の方面にのみ注目して、社會的原理や社會的政策を考案せんとすることは大に慎まなければならぬ。人生の發達は、常に肉體精神の兩方面即ち物質的と心理的との兩方面に發達して行くものであるから、社會問題に關しても特に物質的方面にのみ信頼することは不得策と云はねばならぬ。今社會構成の要素を挙げると、精神的要素は除いて、第一、人生の經濟經營に基礎となる天然の資源として、天然の境遇が必

要な事、第二、全人口の健康状態の基礎たる個人的健康、第三、漸次發達せんとする社會文化に適應する個人身心の潜在的性質、即ち遺傳是である。固より健康遺傳の問題は、應て社會理想問題に支配せられるが、尙ほ社會的研究の客觀的對象となるべきは云ふを俟たぬ。

天然資源の保存

今の處では、人類が天候を支配する力は未だ充分でない。之に反して天然的資源例へば地味、灌溉、動植物に關する施設は殆んど完成したと云ふも誣ふる譯ではない。自然的資源の保護策は、直接道德的基礎及科學的基礎の上に設立せられねばならぬと主張せらるゝ程に大進歩を來した。然るに一面に於ては、人は母たる自然の手から奪取し得る丈の掠奪を恣にして、天與の發達改良を謀らずに、唯々個人的利益を貪ばらんとして居る。目前の利己のみを目的とし、土地を耕作もせず、只だ採掘を事とし、未來の開發に對してその資源を蕩盡しても利己の計を立て、植林の施設を爲さずして只だ山林を荒廢し、將來の利得を考へずして動植物繁殖の道を阻害し、鑛脈を無益に採掘する等、如上の行爲は、特に後來の文化の發展を害するものであつて、實に現今に於ける掠奪主義の結果と云はねばならぬ。

固より保護政策或は保護運動なるものは、直接現存人類のために何等の利益を與へないが、之れによつて人道主義の實が行はれるのである。斯の如き運動は、實に西洋文明に於ける特色であつて、所謂新農業主義の如きは斯かる運動の結果を採用したもので、現今の社會問題を解決する上には大に効果あるものと云ふべきである。之に關して更に農業問題の廣汎なる社會問題を説明するために、彼の米國文明に對して鋭敏なる批評眼を持つて居るフェレロ (Ferrero) 氏の言を引用して見やう。曰く、「米國に於ける田舎地方が過去半世紀間に閉却し去られたる状態は、恰も彼の第二世紀の初頭に於ける羅馬帝國と酷似して居る。是れ一に偏頗なやり方が國內に行はれた證據であつて、例へば其結果都市の膨脹は益々激しく、之に反して地方の土地生産力が甚だしく減縮した。即ち一方に於ける國富の増加は、他方に於ける果穀收穫の減少を來すと云ふ形勢を示すに至つたのである」と。

社會衛生運動

抑も富源以上に重要なものは、人民全體の健康を維持し促進することである。スペンサーも云つた如く、「完全な動物となる事が、人生成功の第一要件であり、又完全なる動物の國

民を造ると云ふことが、國民的繁榮の第一要件である。實に近代の西洋諸國は、都市に於ける貧民増加のため、不衛生労働及不衛生商舖のため、低廉の賃銀、長時間労働のため、飲酒や淫慾のため、又流行的奢侈のため、其健康状態を破壊しつゝある形勢である。有名な米國醫師は「過去數百年來の進歩的文明は、世界全人口の永遠の健康状態を破壊して居たことが知られる。其は稠密せる市街生活の人々が、年々歳々其活動力を失しつゝあること、又家族生活の減少、子孫を産み又養育する能力に缺けたる婦人の増加、狂人、不具、罪人の増加の如き、此等は皆人口稠密の結果に外ならぬ。ロンドン、ニューヨーク、シカゴの如き大都會は、近世文明の影響で自己の破滅を執行しつゝある有様である。

以上の叙述を以て、斯かる消極的社會現象が、社會進化の一階梯にありやなしやは此處には論せぬ。然し其叙述の眞なる點は、如何なる學者も、共に首肯するに相違ない。斯かる點より、近來公衆衛生に關する運動は、新意義を有するに至つた。衛生學公衆衛生は、現在でも將來でも、人類全生活に關する一大社會問題である。其は單に少數人の病苦に對する同情、救濟、豫防等ではなく、文明の生理的基礎を維持し、且つ生活者の生理的條件を統制することに存する。少くとも現今では、鑛山、工場、都會生活及不衛生なる田園生

活を改善することは、現在及未來に於ける社會生活を健全ならしむる所以である。

抑も國民の生活力を障阻する病氣は、高等文化の發現に對して最も有害のものである。強ひて之を避けんとすればさげ得べき不衛生的事情、例へば工業上の不慮事、病氣、過勞、不衛生の住居、罪惡を挑發する悪商事、是等は苟くも文化發展のためには道德上又衛生上一步も寛恕すべからざる事柄である。戦争の罪惡は固より大ではあるけれども、平和の害惡は、之を寛恕する事によつて、更に勝る甚大なものがあるであらう。アービング・フッシャー (Irving Fisher) 氏は、避け得べき病氣及死病によつて、合衆國の蒙る一年間の損失は實に十五億弗以上に昇ると云ふことを言つて居る。之に比すれば、一國經濟上の損失の如きは、其一小部分に過ぎない。不健康、病氣のために、實社會より隱退する者の智的、道德的損失、特に個人にして、一家族、一國家、一社會の特種任務のために盡しつゝあるもの、隱退は、非常な社會的損失となるのである。遺憾なことには、今日は病と死が、直ちに社會に於ける不適者を絶滅して行く有効なる原因となるといふよりは、寧ろ社會に於ける有用の人物のみが病死して行く傾向が見える。事實社會の進歩は、比較的青年者の活躍に待つべきものが多いに際して、特に社會の重要任務に盡力しつゝある個人を社會より

隱退せしむることは、國家にとつて最も大なる損失となるのである。家族、社會、國民の最大なる苦惱は生命、衛生に關する無用の不安にある。衛生問題の解決しない間は、社會の問題も遂に解決する期がないのである。

公衆衛生、豫防醫學などいふ名の下に包括せらるゝ有ゆる社會的運動、例へば結核豫防、住居移轉問題、兒童衛生、工場衛生、學校衛生、都市地方衛生問題、此等は總て文明國民の間で研究しつゝある緊要社會問題である。唯だ酒類アルコール、及男女生慾に關する研究は、或社會に於て未だ完全と云ふことが出来ぬ。其等に關する社會的紛擾は實は其等問題に對する輿論の確立しないに基くのである。社會に於ける先見者の多くも、以上の社會問題が相互に連關したものだと思ふことを充分に了解して居ないで、單に物質上の一方面のみを捕へて、論議して居るものが多いのである。結核病は方法如何によつては豫防し得る病氣である。但し此等は皆工場生活、社會道德、遺傳の問題に觸れずしては、解決の出來ぬ問題である。實に現今は人生の物質的方面と精神的方面との二者の連絡を研究する生理的社會學が最も緊要事となるのである。

人類社會に於ける遺傳の力

社會問題は、或程度まで遺傳、詳しくは子孫遺傳が自由に支配せらるゝまでは、十分の解決を與へる事が出来ぬ。上述の社會的傳承に次で、此の遺傳は社會構成の上に重大なる位置を占むるものである。何となれば、遺傳は社會の生理的方面に於ける傳達性を説明するからである。個人が個人の健康を保持することは重大であるけれども、其にも勝りて重大なことは、新しい時代を造る遺傳的要素を保持することである。兎に角人生の流は、その源泉でも亦其沿岸に於ても濁泥に汚さるゝものである。酒類アルコールの害、病氣の災、罪惡、不衛生的境遇は後天的の災害である。然し若し其が一朝遺傳的災害になると、人生の源泉を混濁させるものとなり、遂には年月の進むにつれて、百年河清を望むが如き有様になるのである。されば人道的立脚地から見ても、此の世に生れ來る兒童は、必ず清潔なる遺傳の内から生れなければならぬ。是れ即ち健全なる遺傳を維持する所以になるのである。然し假令ひ善良なる遺傳を持つて生れた兒童にあつても、更に其兒童の境遇を観察すること忘れてはならぬ。尙ほ又其が健全なる遺傳を持つた兒童としても、其上に境遇を

顧慮すると云ふことは、其兒童にとつて重大なことゝなるのである。何となれば、其境遇は直接其兒童の品性の上に大影響を與へ、又時あつては其健康と生命とを破壊することがあるからである。斯く人生の境遇を重大視すると云ふことは、即ち吾人の結合的見地に出づるのである。換言すれば遺傳の重要と云ふことは、天然又は境遇の如何と云ふことに大に關係して居ると云ふことである。固より吾人は精神的方面に於て個人的品性及社會的進化と云ふことの大切なるのは今更喋々を俟たぬが、上述の生理的方面が社會構成の基礎であり、又其生理的方面にあつても、特に遺傳は實際上重大視せらるべきものである。

遺傳に關する近代の學說

然らば遺傳とは何ぞ。其遺傳が如何にして左右せらるゝか。固より其詳細に立ち入つて説明する必要はないが、聊か其一點に就いて論述して見たいと思ふ。

遺傳と云ふことを一般的に考へると、恰も土地に播いた種子の如きものである。其から一定の樹木の成長を期待する。若し其期待が地味や、濕潤、溫度、光線等に關するならば、其は所謂境遇問題である。然し之に反して種子其ものの良否に關するならば、其は遺傳に

なる。然し如何なる人々と雖も、其種子の良否のみを問うて、地味、濕潤、溫度、耕作の如何を顧みないものはない筈である。遺傳は即ち胚種其のものに存する。境遇は胚種の可能性を助くるものに過ぎない事は云ふ迄もない。人類の場合には、固より種子の場合とは多少違つて居る。然し植物の場合と等しく、人類に於ても、遺傳は個人の創造性を代表する。人類は動物中にあつても、社會的生活を營む時に最も自發的變質可能性を發揮するものと云はれるけれども、猶ほ外界の境遇には大なる影響を受ける。今假りに遺傳は胚種其のもののみでありとすれば、其胚種細胞の遺傳の外は遺傳して來ないと云ふことになる。所が近來生物學者は新個體を創造する如上の胚種細胞は、身體を造り上げる細胞に全く關係のないものだといふ新説を出すに至つた。其がため現在の兩親は、己の生涯に得たる後天的經驗を一切子孫に遺傳することが出來ぬことになる。何となれば、兩親の肉體によつて胚種内に其經驗を傳へる方法がないからである。之は彼の有名なるワイスマン原則と云つて世に行はるゝものである。其に就いては種々説があるけれども、結局肉體細胞と胚種細胞とは全く異なるものであることは明である。其であるから兩親の後天的不具は子孫に傳はらず、又機能的變化の如きも遺傳することはない。之を以て見れば、種族の特性の外は

遺傳はしないと云ふことになり、只だ胚種細胞の遺傳のみ認むべきこととなる。

ワイスマン原則なるものは、從來屢々世人に誤解せられた。即ち親有機體の生命は一切子の生命の上に影響がない。親の一方の生活は一切子供の上に關係がないと云ふ原則のやうに考へられて居つた。然し其は事實誤であつて、ワイスマンは、彼の胚種細胞の養分は矢張り血液の内から得るものとして居る。従つて其養分の特質と云ふものは、胚種細胞の上にも影響のある事を知つて居た。然し今日の科學的研究によれば、上述の養分を通して胚種細胞の上に影響があると云ふことは、明確に證明することが出來ぬことになつて居る。唯だ實驗上主として消極の場合のみが現はれて來る。例へば胚種細胞が毒分や營養不良の結果で影響せられることが明になる。アルコールが多量に血液に入ると、身體全組織を害し、胚種細胞を毒し、漸次廢頽の傾向に誘導するものである。アルコール中毒者の子供は、種々なる病氣の爲に精氣を喪失し、苦痛に悩むことが多い。例へば精神虛弱性、癲癇、狂亂等の病に罹るものが多い。此の點に於ても晩近學者の爭論はあるけれども、大體に於て此が科學的意見の最も控へ目な決論である。而して此場合、個人の後天的經驗性は全く遺傳せぬと云ふことは注意すべきである。アルコールの毒素は、次第に胚種細胞を侵して、

廢類的傾向を造つて行くのである。其關係は一般毒素の場合と同一である。或統計に依つて見ると、結核病の如き病氣の高度に進んだ人には、子供が生れぬことになつて居る。胚種細胞に及ぼす營養不良の結果は、老年者の上に最も明瞭に現はれて来る。パリのベルチヨン博士(Dr. Bertillon)の此方面の研究に據ると、六十歳以上の父は、最早や健康な子供を得ることが出来ぬ。両親の有機體の生命が如何なる程度に子孫に影響するかと云ふことは今少し研究の上でなければ確言できぬ。現在吾人が如何に生活しても、更に子孫に影響する處なしと云ふ迄には、學問の研究が進んで居ない。只だ消極的に安全な結論は、人類は成るべく最高生理状態に生活を採ることが、獨り自己の有効性のためのみでなくして、子孫のためにも必要だと覺悟しなければならぬ。

遺傳に關連して尙ほ記憶すべき事は、肉體的遺傳が両親より平等に傳はるが、性質は不可分の個性として傳はると云ふことである。此の事實は所謂メンデルの原則と云ふものであつて、其原則に従ふと、異なる性質が混交して現はれて來ると云ふことは斷じてない。之に反して一代以後は必ず秩序正しく、又一定の比例で以て、相反對する性質が分れ／＼に現はれて來る。例へば薄志弱行の人と通常の人とが結婚すると、其子供等は、皆通常の

人となつて生れる。然るに、其子供達の間で結婚して更に子供を生む、即ち二代目になると、其の二代目の子供は四分の一は薄志弱行で、四分の三は通常人となるのである。又其の二代目の四分の三の通常人たる子供が、更に結婚して子供を産むと、其の子供等の三分の一は通常人であるが、他の三分の二は其内の四分の一が薄志弱行で、残り四分の三は通常人となつて生れるのである。以上は、別言すれば二代目に於て四分の一が薄志弱行で更に四分の一が通常人で、他の二分の一は混成兒と云ふことになるのである。然し事實は其混成兒であるべきものが、胚種細胞の關係上通常人の如く見える場合もある。

メンデルの法則は、此の如く個人の場合に於ける性質遺傳の方法を示して居る。而して之が優種學の上からは非常に重大な事柄であつて、特に通常人と異常人狂人血統との混成問題に重大な關係がある。メンデルの法則によると、二代の間續いて觀察しただけでは、遺傳は明瞭でなく、必ず數代を経て研究しなければならぬ。然るに社會全體としては多數の血統が混交し、其混血の結果は、複雑な混血兒の上に現はれるから、何代経つても明瞭に判らぬことゝなる譯である。

今一つ遺傳に關する事實は、彼の生物學者の所謂變種、即ち高低變動(Anotation)

なるものが遺傳の可能性を持つて居ないと云ふことである。人間の性質上の大差異は必ず遺傳するけれども、假令ひ其が人格に迄影響を及ぼす程の高低變動が起つても、更に後の子孫に遺傳はしない。只だ胚種原形質の上のみ影響を與へるのである。

實際社會學の一要素としての優種論

遺傳の實際的施設を計るものが所謂優種學である。此の優種學なるものは、サー、フランシス、ゴルトンの創めた所であつて、氏は之を「人種の先天性を改良する」學と呼んで居つた。一見この學問は生物學に直接の關係があるけれども、之に反して社會學には關係がないかの如く見える。然るに深く考察すると、人類社會に應用する遺傳は、社會の全體の上で集合的團體的に研究しなければならぬ。ゴルトンによると、「生理的にも又精神的にも未來人種の性質を改良するもの、然も其改良者は必ず社會的支配を受けなければならぬもの」と優種學を説明して居る。さればこそ、ヴィクトル、ブランフォード (Victor Brandford) 氏の論じた如く、此の學は、社會學、少なくとも社會改良の研究を目的とする社會學の内には必ず包含せらるべき學問である。

優種學と雖も結婚及一般男女關係の社會的組織を左右し得る力なくしては、人種を改良することは出来ない。特に現今の實際社會問題としては、賢明な結婚を如何に保持すべきかとの問題に外ならぬのである。尤も賢明と云ふことは、生物學の立場からである。即ち優種學の問題は社會問題であつて、然も其問題を解決するには、熟練な生物學的知識に據らなければならぬ。

優種學的研究に俟つべきものは現代社會問題に甚だ多い。然し其に代へて亦其研究から來る弊害も少からずある。主たる弊害は、社會に於ける遺傳的方面及生物學的方面のみを重視すると云ふことにある。若し從來の社會研究者が此の方面を輕視したと云ふことになれば、其反動として將來必ず其方面を重視し過ぎると云ふことも起る譯である。前述した如く、社會は心理的精神的のもので、社會的文化的進化は、有機的進化の基礎に立つて居るのである。然らば社會的改良は、單に生物學的改良のみに依るべきではない。生物學的にのみ社會改良を重視することは、其結果必ず側面的觀察に了つて、社會にとつて消極的影響のみを與へる事となるであらう。社會に於ける個人的單位を單に生物學的に見るならば、其は恰も經濟學が抽象的に經濟人を認むると同一の矛盾に陥るであらう。分別ある

學者は固より經濟人とか生物人とか云ふものを認める筈がない。従つて優種論者が社會を單に物質的に觀察して、精神的方面を閉却することは大なる誤と云はねばならぬ。

假りに人類を肉體的方面のみから觀察しても、遺傳や、先天的性質の外に後天的の習慣天性と云ふものがある。元來先天的性質が後天的の性質をも支配するものだと云ふ考は、特に人間の行爲の範圍に於ては誤想と云はなければならぬ。行爲は多く社會的境遇に支配せられ、特に其個人の屬する社會の傳承を作り上げる社會的觀念、理想、價值に支配せらるゝものである。先天的固有性と云ふものは、存外昔も今も變りはない。三千年の昔に遡つて見ても、吾人の祖先の先天性は矢張り同じことである。只だ太古人と我等との異なる點は、彼等は野蠻人であり、吾等は文明人であると云ふだけのことである。固より通常人の習慣は、先天性の上に造られるけれども、習慣其ものは社會的後天的のもので、社會的道德的見地からは其習慣が最も大切なのである。吾人の知れる限りでは、先天性は個人を文化に順應させないし、又高尚な道德性を與へるものではない。

其故に優種論者が、吾人の天性は野蠻人であつて、文明や道德などと呼ばれるものは經驗的に獲得したものであること、従つて社會問題は主として精神的であることを閉却する

ならば、其は大なる罪と云はなければならぬ。然し人類の文化も、經驗的の精神的道德的性質も、要は胚種原形質の内の遺傳的能力に基かなければならぬと云ふことは、今更云ふを俟たぬ。又社會改良の根本が遺傳問題にあることも是認しなければならぬけれども、其方面のみに備へて社會改良が出来ると思はゞ、其は大なる誤である。然し遺傳が矢張り個人の性格の根底となるものと云ふことならば、其重大社會問題を解決するためには、遺傳を支配し得ることを研究して見なければならぬ。

優種論の困難

優種學的運動を實際に適用しやうとするには、理論以上に多大の困難が横つて居ることを覺悟しなければならぬ。其困難の第一原因としては、近世文化に於ける個人主義の發達が有力であり、然も其發達が男女關係の上に於て最も大なるものがある。事實結婚は兩者の自由戀愛の上に成立し、且つ其目的とする處も、其男女個人の幸福のみに限られて居る。従つて之を社會的休戚の上から左右しやうとすることは、困難なる事である。とは云へ、此の一事こそ優種論上の最も重大なる問題であるから、當初から全く不可能事として等閑

に附することは大なる誤である。フランス、ゴルトンが云つた如く、結婚制度に就いては、從來多くの識者が之を論じたが、其の多くは研究の不完全のものばかりであつた。事實人種改良のためには、結婚制度を設けて其目的を計ることは、必しも不可能の事ではないが、只だ舊時代の制度を其儘用ひてはならぬ。例へば迷信に據つて或は法律的強制に據つては其實は擧らぬ。寧ろ教育の力、理想の力、輿論の力に依頼して、其業を遂げなければならぬ。されば實際上優種論の適用は、常に教育、理想、輿論の三者に注目し、之に依つて個人を感化する覺悟がなくてはならぬ。

優種論實施上の尙ほ一つの困難は、前述の如く近世文明特色の一たる人生理想の混沌と云ふことに歸しなければならぬ。其結果は個人間の期望理想が一樣でないことになる。然し個人の意見は區々であつても、健康や、生理的勢力や、知識や克己に關する希望に就いては大體は皆一致し得る處である。現今に於ける優種論運動の主なる障害となるものは、人種遺傳に關する知識の不完全と云ふ點にある。然し此の一點は年々歳々、科學、生物學の發達に伴つて、近き將來には完備するに至ることは一見理の明なる處である。

近代社會で優種案組織の必要

近代社會に於ける優種案を組織する必要は、如何なる學者と雖も是認する處で、已にゴルトンの如きは、其考案を計劃し、又其他の社會學者や社會改良家が、既に其必要を叫んで居る。尤も從來久しき歲月の間に、富力や、無益の慈善や、將た又其他の方法で自然淘汰の妙用を人為的に妨害したと云ふことが、實は今日に於て不具的遺傳を社會に多くした結果に陥つたのである。例へば米國に於ては人口一億に就いて五百萬人の精神的不具者がある。其中には明に精神薄弱者が居り、慢性的精神錯亂者や、又癲癇者も居る譯である。近時の學說に據ると、犯罪者も、乞兒も、惡徳者も、皆精神的缺陷を持つて居るものだと云ふ事である。而して其等病者不具者の大部分が遺傳から來ると云ふことは争はれぬことである。若し以上の精神病者に肉體的な不具者を加ふれば、米國に於ては優に三百萬人を下ることはなからうと信ずる。其内で五十萬人は病院に收容せらるゝとして、又其病院の費用が年々約十億弗に上つて、其が直接國民の負擔になるのである。更に其病院外の不具者に對しては、又無限の負擔あることを覺悟しなければならぬ。而して其上、其無數の不具

者が親となつて無数の子孫を造るとすれば、其血統を享けた身心薄弱者が遂に天下に瀰漫して、其危険や測り知るべからざるものがある。此處に至つては如何なる優種論者の誇張も遂に及ばざることゝなるであらう。

他方に於て尙ほ憂ふべき一事は、西洋諸國民の中で、教育あり、又財産ある社會で、人口増殖の度が減じつゝあると云ふ點であつて、其傾向は近來著しく現はれて來た。ウェザム (Wicham) 氏に依ると、英國の貴族社會に於ては多産の夫婦で一千八百四十年頃に七人以上の子供を産むだけども、一千八百九十年になると僅に三・一三人の出産の割になつて居る。然るに此の多産的夫婦の割合其自らが又近來非常激減して居ると云ふことである。一千九百十年マサチュセツ州に於て土着白人毎年出産の割は、人口千人について一四・八であつて、死去の割は一六・三である。之に反して同州の千八百九十年に於ける外國人の出産の割は、千人に付いて四九・五であり、死去は一五・五であると云ふことである。而して此の統計は、社會に於ける健全人口が減少するに反して、不健全人口が激増すると云ふ事を示して居る。現今の西洋文明は正に此の點から「自然淘汰の逆行」をして居るものと云ふべきで、之によつて過去の文明を崩壊することは夥しいものであらう。

今日の國際的戦争或は內地的戦争、孰れにしても實は前述の「自然淘汰の逆行」を援助する媒介者となつて居る。何とならば、戦争と云ふものは、兎に角家族の内より選抜きの強者を奪ひ去る結果になるからである。即ち今日、世界の國民は、極端なる軍國主義のため、社會の最適任者最強者を犠牲に供しつゝある現狀である。さればとて、平和主義が必しも「自然淘汰の逆行」を防禦する保證とはならぬ。反つて無智の妥協や偽悪なる人生の理想は、戦争と等しく優種運動の目的を滅ぼすものとなる。

優種主義立法の限度

然らば此の運動を如何に有効ならしむべきか。之を實際上から觀察すると、益々其困難の度が明瞭になつて來る。特に社會の不具者に對する禁止的法令は、多くは未熟の立法であつて、何等の利益をも與ふるものではない。法律といふもので、どれだけの事が出來、又どれだけ以上は法律の力も及ばぬといふ事を、世人は考へない傾がある。社會の不具者特種病者の結婚を法律上で禁止すると云ふことで、其等惡遺傳を社會から絶つことが出來ると思へば、大なる誤謬であつて、彼等不具病者は法律的結婚以外の方法によつて、其害

毒を社會一般に流布して居ることを知るを要する。換言すれば、愚劣なる法律は、不適者を社會から排除するにあらずして、反つて其不適者から蒙る社會の損害に、更に犯罪者より生ずる損害の負擔を負はせる事になるのである。

吾人は此處で少しく、法律なる者はどれだけの事を成し得るかといふ事を考へて見たい。元來社會が前述の不具者病者を隔離して、之を特に保護する方法を採らぬ時、又社會民衆が其等の遺傳的害毒を未然に防ぐ法律の有効性を保證せざる限りは、假令其不具者病者の結婚を禁止しても、何の役にも立ぬのである。

精神病者、癲癩、氣力喪失者の如きものには結婚を禁止する法律を設定すべしと云ふ議論は、從來屢々聞く處である。其は一應尤もである。然し前陳の如く社會の不具者が一定の制度の下に、保護隔離せらるゝのでなければ、只だ卓上の空論になるのである。其事は犯罪者、悖徳汚行者の場合も同じことで、之を社會より隔離する手段がなければ、何等の効果も擧らぬ。又醫師の健康診断の證明がなければ、男女が結婚の出來ぬと云ふ法律のことも近頃屢々聞いた。然し事實に當つて考へて見ると、理論的に此の如き證明を必要とする種類の人間が、却つて實際には法律を潜つて居るので、自然國家も斯かる禁止的法律を

強ひて勵行することが出來ぬ有様である。國家は蓋し、此の如く公衆道德の低級なために、法律の施行を勵行し兼ねて居る際に、僅に之に代つて其任務を果し得るものは教會と云ふものである。即ち教會は社會の木鐸となるもので、之に集ふ人々は神の前に己等の心身の健康を誓ふことになる。即ち社會の木鐸たるべき教會は、人道主義の上から不道德の結婚を許す事は出來ないから、之に制裁を加へる。事實米國に於ては斯かる結婚制度に對する法則を設けたものが、幾らか存在して又其効果も大に見るべきものがある。

以上の如く云へばとて、其を以て直ちに結婚に關する優種論的法律の不可能なることを云ふのではない。不具者病者に對する結婚上の法律は、必ず適當な社會制度を設けて之に當るべきで、特に輿論の力を以つて其等の法令を擁護する場合には、最も有効と云ふべきである。例へば親戚の間柄にあつては、第一從兄弟及最近親者の結婚は、現今に於て禁止してあるのみならず、學者の研究も此の間の結婚の有害を確證し、其法律の精神を重じて居ることが世上に見えて居る。即ち多數の家族は、多少とも遺傳的缺點を持つて居るから、從兄弟の結婚は其血統上の弊害を倍加することゝなる。之を統計上から見ても、從兄弟夫婦は、他性夫婦に比して、遙か多くの不具者を造つて居ることは確かである。

今一つの法律は若し輿論の力で保護すれば、非常に効果の多いものである。即ち他國より侵入し來る移民制限法である。既に入國した外國移民は、今更之を制限することが困難であるとしても、將來入國し來る所の移民に對しては、充分之を施行することが出来る。既に米國に於ては、移民法が備つて居つて、外國の不具者病者の入國を防いで居るけれども、尙ほ實際上に於ては其法律が充分の効果を現はすに至らぬ由である。若し此の制度を改善して、米國より外國に試験官を派し、是等不具者病者の侵入を未然に防ぐことが出来れば經費も至つて少く、一舉兩得になると信ずる。

優種論の名の下に現今世に行はるゝ今一つの法律は、常習犯罪及不具者の血統を絶斷する爲に之を去勢する法令である。米國に於ては、既に八州若しくは十州は已に此の法令を制定して居るが、其の中で二三州のみが之を斷行して居る現狀である。然し是に關する緻密な學者の研究に據ると、此の法令の結果は危険なるのみならず、未だ疑問中のものである。犯罪人及不具者の去勢は必しも其効果が擧げられない。反つて其法令は弊害を強大ならしめるものである。精神薄弱の婦人に其法令を實施すると、成程其婦人をして母たるの資格を喪はしめるけれども、其が爲に彼等が社會で世間交際をして居れば、殘す弊害を除去す

ることが出来ない。斯かる中途半把の法令は結果不履行のものに了ることは、鏡にかけて見るが如しである。尤も其法令の精神が如上の犯罪人不具者を社會から減じやうとする爲に、之を社會から隔離するならば、有効ではあるが、さうすれば、去勢する必要はなくなる譯である。

輿論と個人理想との勢力

社會が人種の墮落に對して戰ふ爲に、唯一の政策として執るべき方法は、全く望のない不具者を隔離して、永く社會に出さない方法を探るの外ないと信ずる。數十年以來、此の案に對して、社會改良論者が充分の賛成を表せなかつたのは、先づ第一に費用過大と云ふ點に反對があつたのである。然し此の點は、一時は不具者隔離の設備のために過大の費用を要する如く見えるけれども、其實永遠に互つては優種論の學理から社會の將來の利益となるのである。實際上社會は大した費用なくして永遠の狂人不具者の隔離をやつて居るのである。現在米國に於ては二十萬人の精神病者があるが、其大部分は病院内に收容せられて居り、五州に於ては、狂者が公共團體に收容せらるゝと同時に、特に一般精神薄弱者も

病院内に收容せらるゝことになつて居る。唯だ最危険な慢性癲癇病者のみに、充分の手當が届いてゐない。

米國に限らず、不具病者減滅政策の行はるゝ處は、多く其結果が擧がつて居る。例へば北イタリヤのアラスタ州では、數世紀前からクレチン病と稱する遺傳病が一階級に行はれて居た。處が此病氣は甲状腺の崩頽に伴ふ一種の白痴病であることが判つた。一時は教會の結婚奨励のために其數が著しく増加したけれども、一千八百九十年以後遺傳減滅政策が行はれて以來、其數が次第に減少し一千九百十年には百人中一名のクレチン病者と、三名の一部クレチン病者とのみが残つたのである。この政策は、不具者を病院内に完全に收容し、外部社會に接觸せしめない。其結果自然後世に累を残さないから、其點から見ても敢て、人道に背くものと云ふことは出来ぬ。

以上は法律が優種論的目的を果す範圍内であるが、法律に據つて如何ともすることの出来ぬ處は、屢々輿論の力に依つて完成し得ることがある。例へば現今に於ては遺傳的苦痛を嘗めて居る社會であつても、其遺傳病者の一階級にのみ結婚を禁止したり、又人口減縮を計つたりすることが出来ぬ場合があるが、斯かる際に其病者が精神的に不具でないなら

ば、社會の輿論を以て彼等に結婚を禁ずることが出来るのである。若し其が遺傳的盲啞の如き際には、彼等は多くは伶俐であるから、之を教育し、又輿論の勢力を以て、云はゞ優種の良心を發揮せしめて彼等の結婚を抑壓することが出来る譯である。

固より如上の問題について今一つ考ふべき事柄がある。其は今日に於ては學問上より確實な答辯を與ふことが不可能であるが、或生物學者は、遺傳性と云ふものは多くは間歇的傾向を持つて居るものであると云ふ。例へば遺傳病者が健康者と結婚すると、其の次代の子供は決して不具者でない。其であるから遺傳的不具者は常に其範圍外の通常人と結婚すれば、其不具病は次第に減滅するに至ると、優種論者は主張するのである。然し其説は非常に危険であつて、假に其が事實とした處で、現社會に於ては到る處に遺傳的血統が潜伏して居つて、前述の第一血統の子供が、若し過つて他の遺傳血統者と結婚する場合には、其子供は又遺傳的不具者となつて現はれて来る。斯の如くなれば勢ひ社會に於ける遺傳的不具者を驅逐するのではなくして、却つて散布する結果となるのである。結局最良の方策は、苟くも身に遺傳病を有すると自覺せる人々は、自ら努めて結婚を避け、又他方に於ては、遺傳病的血統者は、假令へ結婚する場合に於ても、必ず通常人を選むことを閉却せざるこ

とである。

要するに、社會に於ける此等の優種論的研究問題は、尙ほ多く残つて居つて、従つて獨斷的強制的方策は、現今に於ては未だ行ふことが出来ぬ。此の際安全なる方策は、只だ社會の理解ある人士の良心的判斷に一任するのみである。

優種主義の積極的立案

以上は優種論の消極的方策である。然し優種論的運動を以て、單に此の如き消極的運動即ち惡質なる遺傳を排除することにのみ止まるものと思つてはならぬ。反つて、サー、フランシス、ゴルトン氏が云つたやうに、優等階級の間の結婚を奨励するが何より大切な事である。ゴルトンの言を以て云へば、「優種運動の目的は有要なる階級の人を、彼等の通常可能能力以上に其有要性を發揮し、後生に遺傳せしむることになる。」然るに吾人が現今見ることが如く、假令ひ才能の上では最上でなくとも、肉體的生理的に優等なる階級人は、現今に於て甚だしく出産力を喪失しつゝある有様である。尙ほ現今に於ては、結婚者全數の四分の一が僅に次代子孫の半數を擧ぐるのであつて、然も此の四分の一に入る人々は、多くは

不具的でない迄も、一般平凡の人である。

優種論の問題は、優等種をして次の時代に其優等性を發揮せしむることが要點であつて、換言すれば社會の健全優等なる人の間に結婚を奨励すると云ふことになる。斯く論じても事實實際問題としては、多くの阻障に遭遇するのであつて、例へば或場合に於ては、國家は兒童の産出に對して何かの報酬代償を爲すべきものと認められたことがあつた。即ち母が子を生むと云ふことは、恰も兵士が戰場に臨んで國家に盡すが如きもので、社會國家は當然之に報ゆる處がなくてはならぬと云ふ説も行はるゝ譯である。固より其説は一應有理であるが、之を以て直ちに金錢上經濟上の代償を爲すべきものか否かは疑問と云はねばならぬ。個人が此の方面で社會に盡して居る事は、金錢上で之を償ふべきであるか、又は金錢に依つて代償すべからざる義務を果してゐると見る方が適切ではないか。金錢的代償を爲すことに依つて、却つて其義務の價値を失ふことになることがある。優種的義務は正に斯種の義務と云ふべきであらう。勿論社會は能力ある男女の結婚を經濟的方面政治的方面其他から妨害する譯はない。例へば教育ある男女が三十歳前後まで、經濟的事務や、社會的事務のために結婚の出来ぬと云ふが如き事情の下に置く譯はない、又置いてはならぬ。

然しさればとて之を經濟上から其等階級の人々の結婚を奨励することも出来ないのみならず、其には大なる弊害が伴ふことになる。

今や吾々は物質的方面から優種説を奨励する方法を一時放棄しなければならぬ。此の問題は、要する所、氣永に青年者を教育して、優種論の利益を知り、之に據る人生の理想を知らしめるにある。されば、此の意味にて優種問題は法律上の問題ではなく、教育上の問題である。即ち男女兩性關係、結婚、家族に關する道德教育問題である。即ち青年者をして此の問題に觸れしめるためには、彼のデヴンポート博士(Dr. Davenport)の云つた如く、青年をして、結婚に於ける兩性の選擇を慎み、理智の導きに依つて戀をする様に、之を訓練すべきである。即ち青年男女をして早くから結婚と親たる事について正しい理想を抱懐せしめるにある。若し此の目的を果さんとするならば、男女の社會交際を自由にすることは云ふ迄もなく、更に從來に増して、異なりたる結婚的理想を抱かしめなければならぬ。即ち美容、名譽、財産等の標準に替へて、健康、智能、人格等を標準としなければならぬ。若し此の後の標準にして汎く採用せらるゝに至らば、その結果社會に與へる恩惠は限なきものとなるであらう。

結婚に關する理想を今日の青年に教へるに優つて尙ほ大切な事は、積極的に優種論的教育を授けることにある。即ち學校に於ては、須らく親たるの義務を訓ふべきである。從來の教育は市民教育を重んじて來たが、市民教育で大切な點は、父母の優種的義務を教ふる事ではないか。父母の義務とは、單に子孫の教育等ではなくして、寧ろ遺傳、男女間の道德、家族の社會的位置等でなければならぬ。斯の如き教育は從來家庭教育に一任してあつたが、實は家庭家族は此等に關して充分の任務を盡し得ないから、是非共之を幼稚園以上の公立學校教育に移さなければならぬ。而して斯かる學校教育は、一方に於て家庭教育を援助するものであることも明である。教會の如きは此の意味に於て、社會的理想を宣傳する性質上最も好適の位置ある如く見える。然し教會其自らが斯かる優種論的自覺もなく、且つ廣く世間一般に傳へると云ふことも出來ぬ事情にある。ゴルトンの言を以て曰へば、優種論的運動は優種論的信仰なくしては到底遂行することの出來ぬものである。古來ユダヤ教の如きは確に此優種論的信仰があつた。キリスト教に於ても、博愛の精神から見ても、人の爲に利益を進めよといふ教から見ても、近世の優種運動を理性的に援助しなければならぬ位置に居るのである。此の事は或程度までは優種論的良心なくは成功せぬ運動であり、

又其良心は宗教的優種説が世に傳布して初めて成功する性質のものである。

理性に適つた優種論の道德的價値

現今の社會問題を解決せんとせば、此の優種運動を重大視せねばならぬのは今更云ふを俟たぬ。實に此の優種論は社會の生命ある眞理を示すものであつて、是あるがために世界は新運命に導かれて行くのである。余は嘗て大學學生時代に社會學を學んだが、其講義の中に、社會に於ける遺傳は人爲の如何ともすべからざるもので、其境遇のみが左右し得るものであるとあつた。然し其説は其當時に於てこそ正しかつたけれども、科學の著しく進歩した今日、優種運動の發展した今日に在つては、自然に放任しないで、人爲を以て遺傳を多少とも左右し得る時代に遭遇して居るのである。

尙ほ優種運動の道德的方面は之を看過することが出来ぬ。此方面に在つては、從來の如く結婚した個人の幸福のみを目的とすのではなく、總て人類特に將來子孫の幸福を増進させるを目的とするに至つた。云はゞ人道主義の運動で、従つて是の目的を果し得るならば社會問題の解釋に一步を進めるであらう。

第四章 社會問題に於ける經濟的要素

西洋文明に於ける社會思想は主として經濟的

最近一世紀餘以來、西洋思想は著しく經濟的色彩を帯びるに至つた。社會問題に關する輿論的意識も、甚しく經濟的になつたことは確かである。此の輿論は或程度まで理由のあることで、現今の社會問題とし云へば、經濟事情を外にしては、殆ど全く研究し得ない程に重要なものになつたからである。吾人は此章に於ては、此の經濟問題を簡潔に批評し、又他の事情との關係をも合せて説明したいと思ふ。

社會問題に於ける經濟的要素を必要とする處からして、現今の哲學の内には、特別の一派が生じ、人生の全體を經濟的に説明しやうとする社會學が生じ、今日にあつては、之がために社會學は「經濟的定命論」とか「歴史的唯物論」と云ふやうな別名が附せらるゝに

至つた。此の經濟的社會學の原則は、現代の實際生活から出發しては、實際政策の基礎となるのみならず、又學問上の見地から見ても、大學教授の學說となつて現はるゝに至つた。其の極、米國の某社會學者の如きは、「社會の精神的方面等は強ひて顧るの必要なし」、經濟的物質的事情に一任すれば足ると云ふ意見を述ぶるに至つた。斯の如き見解によれば、前述せし社會の理想、價値の如きは、經濟條件にのみ依つて變遷するものであると云ふ考となる。然かも斯かる管見が學說として久しく繼續しないに關らず、俗世間は既に已に其說に感化せられて、一般世人は唯だく「社會の經濟的條件を案配せよ、其外の事は意に介するに足らず」と叫ぶ。第十九世紀の放任主義の社會學は、先づ經濟的事情に關して亡んだけども、他の事情に關しては尙ほ多大の勢力を持つて居る。經濟的條件が社會の責任の歸着點だといふ考が今日にも残り、而して此が社會の主たる動因と考へらるゝに至つたのである。

經濟的定命論の中にある眞理の要素

現今行はれて居る通俗社會學の說が、全然眞理を含んで居ないものと斷言することは

出來ぬが、同時に其に幾何の社會的眞理をするかと云ふことも、凡そ推斷することが出来る。現今の時勢が多く經濟的事情に左右せらるゝと云ふことは、最早や疑ふべからざる事實である。何れの時代でも人民の生活が常に經濟的事情に大に影響せらるゝことは云ふ迄もない。換言すれば富の分配と生産が、文化其ものに大影響があると云ふことである。或程度に於て一國民文明の進歩は、その經濟的狀態に依頼する事と密接に關聯する者であつて、恰も原始人民の生活が、その地理的境遇に支配せられる事多いと同じく、文明人民にとつては、代々相重ねて勞力を蓄積し、色々の制度や組織を具へて來て、經濟的事情が重きをなす様になる。太古の人類は殆んど地理的境遇に支配せられたのであるが、現今の文明人は經濟的條件に支配せられて生活しつゝある有様である。第三章に於て述べた如く、太陽の破滅は直ちに人類の破滅になるが、それだからといつて、太陽のみが直ちに人類生活の來往變遷を一切造るものと云ふことにはならぬ。人生の曲節を造る原因には、經濟が重要であると承認しても、經濟的事情が人類の感情、思想及行爲を盡く左右するといふ事を承認する必要は必しもない。

然らば經濟は近世文明の如何なる部分を支配しつゝあるか、之に答ふることは必しも困

難ではない。一般通俗の見方からしても、経済的事情は吾人社会文明の輪廓外形に影響するは明である。例へば現今文明都市なるものは、近世工業の生むだ結果である。第十六世紀第十七世紀の如き時代には、未だ今日の如き都市を見受けなかつた。然るに第十八世紀の末葉に俄然工業革命が興つて、其以來今日まで、都市は瞬く間に其数を増加した。第十九世紀の初葉には、米國總人口の四分のみが都人士であつたものが、一千九百十年には四割となり、殆ど全人口の四分の一が五十の大都會の住民となつたと云ふ状態である。現代文明の特色の一たる都會生活と田園生活との極端なる對照は、一に近代經濟組織の發達の影響と云はなければならぬ。斯くの如く、今若し現今都會の發達原因を研究すれば、一に經濟的方面に存することは疑のない事實である。人工を補ふ機械の發明は、多くの人間を家庭より工場に送り出し、其工場主は商業的勢力に支配せられて、世は益々經濟的傾向を帯びるに至つた。他方では農業に對する機械の發明、科學的應用の發見は、益々人民を都會に集中するに至つた。彼等は都市の何處かに於て自己の勞働口を獲得しなければならぬ。斯して彼等は商業に走り工業に馳るのである。此等の社會生活は文藝的事情、教育敎化的事情に基づくのではなくして、唯一經濟的事情に基因して居るのである。

都會は近來西洋文明の大勢力となつた。田園都市生活の孰れを問はず、個人の實生活、及性格の上に、都會は大なる關係を持つに至つた。換言すれば都市に發生した經濟状態が如何なる點に於ても、個人生活に影響すると云ふことである。然し之を以て如何なる點に於ても、經濟影響を免れずとは云ひ難い。複雑なる生活の各方面に於ては、必しも經濟事情に支配せられざる部分があつて、個人の親交的關係に據つて、恰も經濟組織以前に於ける状態を維持するものがある。之は即ち人類社會の理想、思考、及價値の世界であつて、特に藝術、道德、宗教の世界のみは、決して富の分配生産の支配を受けないことは明である。經濟組織は我々の觀念や理想に誘惑的勢力を及ぼすが、然しそれで人の心を全く束縛はせず、又する事も出来ない。

現在の資本制度に勝る工業組織の必要

現今の經濟組織は、他方に社會問題と密接なる關係を持つて居る。即ち其社會問題と云ふのは、一方に現今の工業組織の改革が行はるゝに非ずんば解決することの出来ぬものになつて居る。今日の世界が正に要求しつゝあるものゝ中、就中新精神的要素、即ち價値の

新組織が最大なるものであるが、其とて他方に工業組織を改造しなければ十分に此の新精神を生み出す事は出来ない。現代の工業組織は、人類の社會的精神的發達を破壊せんとするものであるが、世人は尙ほ此の一事を閑却しつゝある現状である。幸にして此點に心付くことが速かなれば、必ず世界のためにも幸福であらう。人間奴隸が嘗て社會進歩の上に障碍であつた如く、近代社會生活に於ては、資本組織は社會進歩上に於ける阻礙物となつて居る觀がある。

現代の經濟組織は、資本的工業主義と呼ばれるものであるが、此は工業革命以後の事である。工業革命あつて以來、機械が人工に代り、工場組織は労働者職工に對して在來の手工場で得た自由を掠奪し去つた。人工に代る機械工業の發達は、人類文明に採つて實に一大革命で、大工場機械の經濟的性質は労働者の經濟的自由を奪ふのみならず、斯かる工業主義を實行する爲には非必要な資本主の專横を齎すに至つた。然し此處に注意すべき事は、資本組織は必しも賃銀労働の制度と混同すべきものでない。從來世人は、人が他人のために使役せらるゝ場合には、資本組織が必ず現れると云ふけれども、此言は果して真か。若し之を真とすれば、資本組織なるものは太古以來存在したと云はねばならぬ。然し吾人の

云ふ資本組織なるものは、或る工業を運轉する爲には資本を集める必要があつてその結果、労働者は已むなく富有なる資本家に左右せられる様になる状態を指していふのである。而して此の状態は現代文明に一般の事となり、西洋文明には資本組織がその主力になつて居る。

資本組織に對する非難、勞力の横領

然らば資本組織に對する非難とは何であるか。資本組織は、果して人類の社會的道德的發達を阻害するものと云ふべきか。この間に對して、現今の社會學者は、如何なる人と雖も、現在の如き資本組織の弊害を認めないものはないと云ふことを以てしやう。

先づ第一に資本組織は勞力に對する横領と云ふことが出来やう。所謂富を得んとするには、己のために他人を働かさせなければならぬ。其の労働者が假に正當な賃銀を得て居ると云ふならば、資本主とても忽にして大富豪とはなれない譯である。然るに現今の工業的經濟組織にすれば、富者たるものが、其の使役する労働者に對して過大の勞働を強ふることが出来るやうになつて来る。其結果は當然強者の弱者虐待と云ふことになる。今日に在

つては、労働者は假令賃銀は安くとも、少しも早く職業を得ることを欲して居る。勢ひ多數競争の結果、己と己の家族とを維持する必要の程度迄、其賃銀を低廉ならしめる有様で、今後更に低下する形勢が日々見えるやうになつた。

現在の資本組織から出て来る不當な富の分配

資本組織に對する今一つの非難は、富の分配の不當と云ふことである。資本家と労働者との以上の如き不自然な關係は、遂に労働者に對する富の分配を甚だしく不公平にする事は明で、事實今日は労働者を生産者といふ一階級として見れば、其労働に對して正當な支拂が出来てない。工業國としては最も進んだ國と云はるゝ北米合衆國であつてすら、労働者の六割五分は、一年六百弗以下の勞銀を受けて居る状態である。之に對して、北米合衆國の調査で、一千九百〇九年には、工業會社の純利益は、即ち利息、保險金、租税、其他當然支拂ふべき控除金を除きて、尙ほ一割二分であつたと云ふ。されば此點より見れば、資本主なるものは資本に對する利息の外に、一割二分の純利を獨占して居るのである。之に反して生産高の五十分の一強が、僅に賃銀俸給となつて労働者の中に落ちたと云ふことになる

のである。換言すれば、労働者は更に多くの利益を得る權利あるに反して、資本家なる比較的少数人は、殆ど投機的利純を潤澤に得ると云ふことになるのである。

利息金を取るが正當か否とかいふ問題は、從來社會主義者の大に論じた問題であるが、更に吾人の此處に云ふ私利獨占、投機的利益に關しては、其以上の大問題を惹起する譯になる。會社の取締役等に支拂ふ高給及利益は、之れ固より會社事業の運轉上當然の事ではあるが、苟くも其他の株主等に對する投機的利益は、何等社會に對する功勞を代表するものと認めることが出来ぬ。然るに近代の工業社會に於ては、斯かる投機的利益は當然事業主株主の特權的利益だと考へられるやうになつて居る。之は要するに總ての事業は皆事業主の手腕にのみよると云ふ處から起つた誤信である。成程社會の他の諸事業は多くあるが、其等は決して投機的利益てふ如きものはなく、皆事業の效果に對する報酬であつて、即ち必然の利益、純益、及取締役の給料の如きものに過ぎない。若し工業會社にあつても、其等の事業と性質が等しければ、自然資本主のみが獨占すべき投機的利益なるものがあるべき筈でない。

資本主と利益分配との關係問題は、將來多大の社會問題を惹起するであらう。兎に角現今

にあつては、資本主なるものが利息金を収める権利があると同時に、如上の投機的利益分配に與る権利があるとは云へない。公共政策の上から之を見ても、如上の兩者を同一資格と見做すことは出来ないと思ふ。換言すれば、吾人は社會全階級の收入に於て、所謂「正利」と「暴利」との區別をして居るが、此處に云ふ投機的利益なるものは、實に後者の「暴利」に屬するものと云はねばならぬ。

現に是等投機的所得に依つて資本主は次第に富裕となり、労働者は益々貧窮に陥るのである。一般論者の云ふ如く、貧窮が直ちに世界最大の弊害だといふことは出来ぬ。若し其境遇にして貧者たることを逃れ得る場合には、貧は必しも悲觀するに足らぬが、近世の工業的貧窮は之と趣を異にし、力ある者、才ある者でも、貧苦の境遇を逃れ得ない様な組織に出来て居る。絶望の貧苦は、喪心と共に、不道德的墮落の境に人を陥れ、遂には向上心を失ひ、惡徳犯罪を敢てせしめるに至る。然らば、斯の如くにして人情の弱點に乗じて人類各自の私慾を逞しくせしめるならば、如上の貧窮者は年々歳々其數を増加し、遂には社會革命の他には、此等を救済するの道なきに至らしむる外ない。眞に懼るべきことではないか。

階級戦争と國家戦争

資本組織の結果、富の分配が不當不平均になり、その爲に社會に於ける富者と貧者と二階級の闘争を惹起するであらうが、斯かる階級的闘争は、社會生活にとつて望まじき事でないのみならず、將來の危機を暗示するものと云はねばならぬ。然し現今に於ては之が西洋文明の一特色と云はねばならぬ。若し此の傾向をして益々激越せしめるならば、早晚労働者と資本主との間に血を見る騷擾を惹起するに相違がない。又斯かる争闘的狀態に立ち至れば、その中からして健全なる社會組織を産み出すといふ望は殆どあり得ない。

資本組織は最近に於て不必要にも國民間の敵對を激成せしめるに至つた。資本主は政府を籠絡して、彼等階級の利潤を計り、生産物集散の爲めには新市場を開き、貿易商業の保證を造らしむる等、所謂マキャベリ主義は、彼等の更に躊躇する處なく採用する處となつた。斯して資本家の横暴は、遂に歐洲國民間の戦争を惹起した。前章に於て吾人は現今の歐洲戦役を觀察して、それには、道德的衝突があり、即ち過去傳承及理想の不統一がその原因である事、又社會主義も更に國家間の私慾を寛和するに道なきことを云つたが、それ

以外に、目下の大戦争は世界に於ける二大資本國——英獨の衝突がその大原因である。即ち今まで資本組織が遂に國家を誤らしめる大原因となつたのである。英國の舊き資本組織は、新に勃興して來たドイツの新資本組織に對して嫉視し、遂に英國をして、アジア、アフリカに於けるドイツの新資本組織に對する外交的撲滅策を講せしむるに至つた。又他方に於ては、ドイツの軍國的資本家が、國民の私情的利己主義を後援として、益々經濟的衝突を大にし、遂に兩國民の大衝突を惹起すに至つたのである。昔にも戦争はあつたが、今日に在つては、此の資本組織の運動は、一社會の階級間のみならず、國民間の戦争を激成する原因となることは、鏡にかけて見るが如くである。

戦争は反つて將來平和の保證だ、雨降つて地固まると云ふが如き考は、抑も誤つた考であつて、嫉妬は益々嫉妬を惹起し、戦争は益々戦争を煽動する。即ち西洋文明に於ける貧富の争は、結局兩者全滅の凶兆を示して居る。階級戦争は遂に社會の滅亡を暗示して居るものと云ふべきである。

富者、貧者共に物質主義に赴く

資本組織に對する第三の非難は、貧富兩者孰れをも物質主義の奴隸とし、精神上の向上心を喪失せしめると云ふことにある。即ち富者は富者自ら奢侈のために物質主義の奴隸となり、所謂私利を貪る結果、社會責任心を全く撲滅し去ることになり、富力の増進は人格の墮落を惹起するに至る。何となれば彼等資本主は自己の慾を逞しうせんが爲にトラストを組織し、人力も神力も及ばざる範圍の權利を獨占せんと考へるに至るからである。斯くて社會の人々は實際生活は云ふを俟たず、人生の理想生活に在つても、唯だ物質的となり、宗教の如きも崇敬の形骸形式に止つて其眞の意義を失ふに至るのである。嗚呼斯かる人民に向つて、天國に入らんことを望むのは、駱駝が針の穴を通るよりも難い哉である。

以上述べた如く、私慾の増進は、遂に文明の基礎たり文明の價値たるものに對する明を亡ぼし、其結果は物質的奢侈に限なく、偏に私慾を逞しうして、遂に人生の意義を没却して顧みざるに至らしめる。而して此の資本組織の弊害は、以上の富者に止まらずして、之が經濟的關係上、貧者をも驅つて物質の奴隸たらしむるものである。勞働者とても出來得

べくんば資本家の豪奢を學ばんことは、人情の然らしむる處で、彼等は、自己の向上を計るに非ずして、目前の奢侈を獲得せんことに腐心して居る状態である。労働者の中で最も非運な者は貧苦の中に絶望し、その結果、精神的の事柄には何等の價値をも感じない様になる。即ち資本組織の結果は、結局、貧富何れの社會をも、單に經濟的物質的の方面にのみ走らしめる事になる。

在現資本組織の弊害を除く途

現代資本組織に對する我等の彈効は、枚擧すれば限なき有様であるが、特に其重要なるものを上げれば、如上の三點——一、労働の占領、二、富の分配の不公平、三、社會的生活の物質化である。此の三點を以て見ても、尙ほ能く現代西洋に於ける資本組織の弊を説明するに足るのである。蓋し如上の資本組織の弊害は、讀者をして能く首肯せしめる處あるであらうと信するが、更に此の弊害救済の道に就き、聊か讀者の同意を求めんとするものがある。現今にあつては、百年以上傳來の力を以て現出した資本組織の弊害を、一朝一夕に艾除するのは容易の事でない。又其と同一に、正義と自由とを社會に建設する如き、最良

の經濟組織と云ふが如きものも容易に組立てることが出来ない。されば現代に出來得る限り一步一步改善の途に就くべきであつて、急速に一時的革命の方法を執る如きは反つて不利に陥ることを覺悟しなければならぬ。

經濟的弊害救済の道は、先づ工業組織方法に對して社會的制御を施し、工業状態に對して社會的責任を明確にする方に進むべきであつて、俄に個人の所有權や個人の企業を廢滅する如きは、當を得たものでない。勿論、所有權を公共にするのは、その方が利益ある場合には之を施すべき者であつて、社會的責任と制御とは、此に依つて十分に實行し得る。然し現状では、それがどれだけ出來るかといふが問題である。固より吾人は社會と云ふ立場から公共的所有權及支配權を要望するが、其が果して個人的所有權や企業權を杜絶しなければ出來ないかといふ事になれば、大問題と云はなければならぬ。

個人的所有權や企業權能の利益と云ふものは、最も極端な社會主義者の間にも認められる處であつて、各個人間には各異なる性質能力があるので、之を一樣に見る事は出來ぬ。個人的所有權は、人生に家庭が必要なる如くに、公共的社會にも甚だ必要なる要素となつて行くので、社會學者のスマール氏は「モーゼの十誡の中にも個人的所有權のことが記し

てある」と告白して居る。實に、私有財産の組織は文明の基礎であると共に、社會組織の基礎たるべきものである。唯だ之に對する非難は、私有その者でなく、その濫用の結果、資本組織の弊害を醸す點にある。斯く論じ來れば、最後の問題は、社會に於ける大專業は私有たるべきか將た公共たるべきかてふ一點に歸著する。若し假に私有權の必要が社會にあるものとするれば、公共的所有權と相並んで社會に存せしめることが出來ないか。

著者の私見を以てすれば、個人の所有權は、若し適當なる國家的行政機關を以て之を制御し、加ふるに社會の適當なる理想を以て富者階級を利導して行けば、必しも社會にとりて不利益なものではないと信ずる。即ち實際上に於ては政府と社會の輿論及感情とが互に相提携して社會的の秩序と制裁とを計り、事の大小を問はず、終始公益を標準として行動することが必要條件となるのである。即ち此の方法は、社會に於ける事業が總て公共的で私的性質のものでないと云ふこと、労働者富者に對する一般正義の實行と云ふ立脚地に存するのである。

然し孰れかと云は、労働者の立場は常に不利益であつて、収入の僅少ななる上に、彼等の社會的位置は常に依賴的たるを免れない。然し若し世人が、如何なる事業でも常に公共

的職務であると思ふ様になれば、労働者に對する世の僻見を除くことが出来るに相違がない。此の精神を基礎として社會改良の道を圖るのはこれ眞の社會改良の意見である。而して社會改良策は、先づ労働時間、労働者の境遇、工場衛生、及風紀等の改良振肅を謀らなければならぬ。又労働者の病氣、災害、解職、老衰等に對しては、其々保險を組織し、其保險に加入し得ざるが如き赤貧者には、又夫々保護法を制定しなければならぬ。労働賃銀の規定も労働者の生活費を最低度としなければならぬ。其外官設口入所等を各市に設け、辯護士の要なき自由裁判所を設け、赤貧なる労働者社會のために多大の便利を與へてやらなければならぬ。尙ほ將來工業に據つて生計を營まんと志すもの、ために、特に無月謝徒弟學校を造り、其他消費組合及相互救濟會を設けて労働者間の自救を計らしめる。要するに經濟的弱者を保護すると云ふことが焦眉の急務である。

現在經濟組織の不公平を除く一方法は

税制の科學的改革

如上の如く云は、必ず駁論する人があらう。然らば汝の云ふ社會改良を行ふ資本は何

處から出るかと。然し事實今日の西洋諸國、特に富有なる國民にあつては、負擔を甚しく加へないでも、此等の社會改良運動を賛して之を遂行せしめるだけの資本は國內に裕に發見せられる。即ち社會一般の慈善的寄附にもよることが出来るが、其外には、國家が制定する租税に由つて之を得ることが出来る。即ち從來の税制を改正して如上の社會的要求を充たし、且つ富の公平なる分配と、商業上の機會均等主義とを實行し得る如くするは、敢て困難なことではない。實に税制を改革し、科學的研究に基いて之を公平にするのは、現代經濟社會の不平等不正義を打破する上に最必要な行政方法と云はねばならぬ。

前述せし如くに、今日の社會組織の下に認容せらるゝ収入は二種類あつて、一は「正利」で今一つは「暴利」である。而して後者は固より道德的にも又社會的にも前者の如く正當なもの認められない。此の「暴利」を公的収入の種類とせずして、單に個人的私財中に容るゝを許して居るのは、其は唯だ社會の認めた一時的權道であつて、自然斯かる種類の収入は重税の負擔を負ふべきである。實に今日、「暴利」と「正利」との嚴密なる區別問題は、未來の政治家の好研究題目であつて、今日ではなほ其兩者の區別が明ならざるために、富者は益々不當の「暴利」を貪る有様である。特に今日に於て、「暴利」は、遺産、及家督制度

上より來るものである。之より以上のものは、皆社會の堅實性の基礎たるべきものであるから、國法が之に對して租税を軽減することは敢て差支がないにしても、少くとも間接的遺産分配の如き場合には、累加の課税を課することは更に不當の事ではないのである。されば、個人的遺産相續等の場合に於ても、今後課税を重くすると云ふことは、極めて至當の事と云はねばならぬ。

尙ほ富者階級の不正當收入の一つは、土地所有權より生ずる「自然增收」である。近代人口の激増に比して、土地の狭小な爲、特に大都會で土地拂底の結果、遂に土地所有權の賣買又借地なるものが到る處に投機的に行はれて、これより莫大の利益を得ることがある。而して此等の利益を單に土地賣買及地主の個人的獲得に任ずることは、大に不可なることと云はなければならぬ。近時發達したる國々では、此等の利益を以て公的利潤の源とするに至つた。

今一つの不當利益は、所謂投機的利益である。元來投機なるものは、社會組織上多少必要なるものではあるが、是等の利益は當然個人獨占のものではなくして、公的のものである。従つて投機的利益には重大の租税を課すべきである。今日、文明諸國では、多く累

加所得税なる税制が行はれて居つて、其が亦國家行政の上から甚だ都合の良いものになつて居る。只だ今日で問題になつて居ることは、其累加所得税なるものゝ等級制限に關する問題で、事實上では非常に莫大なる所得には、其相應の課税が伴はないと云ふ弊があるらしい。尤も文明の進歩するに従つて、此等の税制も、次第に定まつた制度となるに違ひないが、將來の改革は、多額所得に對する累加課税の完備せんことである。

此の如き 制改革に對する非難

遺産相続や、所得や、獨占土地に對する課税は、社會改良のために公的に利用せらるべき性質のもので、若し斯かる税制に對して何分か反對のある場合がありとすれば、其は多く學者方面の反對である。一例を擧げて見ると、如上の課税より得た巨大の資金が少しも適當に利用せられず、反つて社會の頹廢を醸す原因となり、或は徒らに軍備擴張にのみ悪用せらるゝが如き事あらば、結局社會國家に採りて無意味の事となると云ふにある。然し其反對の實際を考ふれば、公共的資本を利用する社會改善案があれば、それは却つて其資本が軍備其他の方面に悪用せられないといふ保障となるに違ひない。

然るに他方に於ては、近代社會が資本家に對して重税を課し、以て生産界弊害救済の一助にしようとする方策は、社會の企業的性質を傷けるものだと云ふ反對意見を抱いて居る人々がある。即ち所謂「正利」のみを以て實業界を制限するのは、「暴利」を謀る資本家企業家の方面の興味を失ふことになり、資本家は、終には資本的同盟罷業を行ふに至るであらうと云ふにある。

斯かる事は近頃の事實を見て、實業界の道德心が廢れ、利己一逼になつた今の時に、此の如き事は起りそうに見える現象である。若し事業なるものが社會公共のために起り且つ興すものだと信せらるれば、強ち資本主同盟罷業なるものゝ現はれる譯はないのである。例へば戰時に於ける愛國的輿論から、物價の平時價格を維持して居ると云ふことは、其の明瞭なる一證である。尤も前述の如く、經濟といふ者が單に利己心のみを基にするとすれば、道德的制御は到底行はれない。けれども現今の心理學が説明する如く、人性は單に利己のみが本性でなくして、他面に利他心の存するものとすれば、斯かる公共的制御が全然行はれぬ譯はない。

されば工業界の改良案に反對して、社會の企業心を没却するものだと主張する人々に對

して、社會が道德心に依つて支配せらるゝ時には、事業心は決して冷却するものでない。云ふ事を辯明することが出来る。即ち事業家は、公共的精神からして薄利に甘じ、其他の不当利益、投機的利益は殆ど之を國家に提供し、個人的慈善を行ひ一般事業の發展を計る様になれば、結局社會の進歩を促すことになるが、兎に角資本家は自分の奢侈贅澤を制しなければならぬ。

此の如きは、富者に對して過分の要求をなすものと云ひ得やうが、此の如きは既にキリスト教の精神によつて、當然社會の輿論たるべきもので、又今日の社會學上より見るも社會的道德心より來る公共的義務の教義と正に一致するものと云はなければならぬ。彼の英國の一富工業家たるシーボーム、ロウントリー氏 (Seeborn Rountree) は云つて居る、勞働者に對する正義は、一に資本家の好意的犠牲にある。又社會的秤衡の一端たる貧を除くのは、他端の重みになつて居る富を減する外にない。現今米國の資本家も、多くは之と同一の意見を洩らして居る。

課税主義による産業的正義に對する非難の今一つは、苛酷なる課税は終に社會に於ける個人的慈善や、臨時的援助の美風を害ふに至ると云ふことである。然し其は必しも然りと

云ふことは出来ぬ。社會的正義を保持するに足るだけ十分に人道の考があれば、此の如き民本的の社會では、人と人との間に同情友情の缺けるといふことがない。實を云へば個人の合理的慈善は、それが行はれるに従つて、その目的とする所の救済が段々不用になるを理想とする。換言すれば、社會に於ける人類相愛の實は、慈善として行ふよりも、社會的正義によつて發表すべきものである。

經濟政策と社會主義との別

以上の如く論述して來ると、此等は「社會主義」だといふ人もあらうが、又黨派心の強い社會主義者は、吾人の説を以て只だ現在の資本組織に對する甚大の同情から來る學究的空想に止まると非難するであらう。然し今は、名を争ふべき時代ではない。若し假に社會主義なるものが、社會生活の有ゆる條件を支配すると云ふことにあるとすれば、從來の社會の歴史は、其と同一の目的に盡瘁して居るのである。社會生活の研究者は此意味で、總て社會主義者だと云ふことが出来る。尤も社會主義と云ふものを單に資本共有とか、國家が諸事業を獨占すると云ふことにあるとすれば、如上の吾等の説は固より社會主義と云ふ

ことは出来ない。さればとて吾人は、強ひて其の社會主義に反對する者ではないが、果して其の様な社會主義が實行し得らるゝや否やは大なる疑問と云はねばならぬ。歴史に現はれた社會運動は、最初吾人の云ふやうな哲學的社會主義を賛成した事もなく、又一層高等な社會生活を實現する爲に所有や事業を公共にするといふだけでは満足もしない。人生の全體から、唯だ消極的に經濟的定命論や革命的原理を主張するものが多數である。斯の如くにして社會主義運動は、建設的よりも破壊的となるに至つた。斯の如きは、現今の社會にとつて眞に憂ふべき現象である。將來眞實建設的の社會主義が、西洋社會に現出するや否やは大なる疑問と云はなければならぬ。若し幸にして斯かる氣運にも向はゞ、必ず其破壊的性質を脱却し、經濟的個人主義を排斥して現はれるものでなければならぬ。

以上吾人が略述した處の産業的正義論は、必しも學究論や卓上の空論ではない。現今、社會研究家や社會改良家の指導で、進歩した國民が實際上に進みつゝある針路は反て此にある。此の方策は、革命的行動なくして、労働者の貧窮状態を改善し得ると云ふ信念で行はれて居る。但し、此等とても社會の進歩を組織的又科學的に行ふ爲の準備的行動である。其以上には、人道の精神的基礎の建設が、何より重要なものとして存して居るのである。

第五章 社會問題に於ける精神的 及理想的要素

社會の發達に於ける觀念と理想との勢力

現今の社會が切實に要求しつゝある點は、所謂新經濟組織ではなくして新精神である。實は此の新精神を要する爲に、新經濟組織が改めて必要になるのである。而して此の兩者は兩々相並んで發達すべきものである。若し此精神があれば、假令新經濟組織が設定せられても、唯だ強者が弱者を虐待するといふ結果に終るに過ぎない。又此を他面から觀察すれば、産業の新組織なくしては、如何なる理想も社會に實現する道がない。若し不正義が人生の物質的方面を支配するものとするれば、人類をして四海同胞の理想を信せしめるに至らない。然し此は單に循環論でなく、實に社會生活にとつては、理想及觀念が社會的活動

を指導するものであつて、未來の理想的社會を迎へん爲には、先づ今日に在つて明日の理想を活動的に陣頭に進めなければならぬ。且つ其理想及觀念が實になり得るとの信念を喚起しなければならぬ。

世には觀念や理想の力を信せぬ事程悲しむべきことはない。事實歴史に於て外境の勢力が、大なる際にも尙ほ、人類社會の進歩を促進した主な原因が、常に社會的理想及輿論に存したる事を見なければならぬ。吾人は素より歴史が單に觀念で動くといふ説を採用するものではないけれども、尙ほ觀念や理想が社會的指導力として、文明の初期以來有力であつた事を疑ふことは出来ぬのである。例へば神を天父と仰ぐ觀念、四海同胞の觀念、自由の權利の觀念、此等が皆過去に於ける人類の歴史を形成する上に異常の勢力たりしことは明なる事實である。此の種の觀念は、決して物質的及經濟的境遇からのみ出来上つたものではなくて、反つて人性の根底から現はれたものである。若し世人が觀念理想の根源を外境的境遇に歸するならば、其は人性の本能や、創造的想像や、構成的理性力の存在を闕却したものと云ふべきである。換言すれば、人心が自働的である事は、外部の影響に動かされるのと同じである。現今の科學的研究では、人性が受働的心理のみで説明し得るものでは

いと云ふことを證明して居る。斯くて、經濟的定命論や、其他社會進歩に関する唯物論の如きは、今日に於ては全然科學的根底がないものと云はなければならぬ。

社會の進化が複雑になるに従つて理想の勢力も亦増進する

實に明日の社會は、今日に比して遙に精神的理想的要素を包含しなければならぬ。社會進化の複雑なる今日に於ては、特に精神的要素の偉大なる力を要する次第であつて、此の結果、科學教育の如きは、將來の社會を支配する大なる勢力と云はなければならぬ。吾人の社會生活を能く理會し、科學的發見、反省結論を社會の標準にし、即ち思想を價值に變換し行けば、社會的價值は一層増進する。換言すれば社會に於ける個人相互間の關係を社會的理想に依つて連結すれば、自然に完全なる社會を構成し得るのである。即ち理想といふものは、人間の判斷を活動の價值に移したものであつて、個人の間相互順應の生活を遂げるべき高等の標準を示すには、一日も缺くべからざる處のものである。されば吾人は社會的生活の理想を實現する前には、豫め其根底として、正しい理想觀念を準備しなければならぬ。

人類社會が正しい理想を有すべきは固よりであるけれども、尙ほ進んで多數の人々が常に正しい理想の下に協力一致する事を要する。若し不幸にして多數個人の間に意見及理想の衝突を來すことがあれば、社會に於ける調和の理想ありとて、卓上の空言に了るのである。例へば吾人が常に云へるが如く、現代は實に、人生の價值理想に關する絶望的の不一致の時代で、古よりの傳承は現代文化を宗派に分ち、政黨に分ち、階級に分ち、國民に分つと云ふ有様である。幸にも科學は、次第に人生理想に關する統一を作りつゝあるけれども、尙ほ社會的科學に屬する方面にあつては、先づ當初の問題として如上の社會的理想統一の問題が残されてある。換言すれば、科學的應用の行はるゝ以前に當つて、實際生活上に觀念や理想が重要である事を、人々が悟るを要し、殊に過去に於ては社會の調和統一を利したる經驗的方面は努めて保存維持の方策を探らねばならぬ。

西洋文明に於ける消極的觀念理想の發達

然るに現今では、不幸にも、商業上の利害關係より、多數の社會人は、過去の進歩を産むて來た價值に對して消極的態度を採り、只管利己的幸福を夢みる有様になつた。其のみ

ならず、甚だしきは下等動物の生活状態に逆行して、自然的本能及衝動を人生の唯一理想と考へるものさへあるに至つた。又随分多くの人は、此程には極端に行かないにしても、政治や道德や宗教の組織を無効と考へる人も少なからずある。又今日は、個人の存在を認めて、社會國家の存在を認めず、遂には極端に權力及成功を崇拜する人を多數見受けるに至つた。

例へば、ルソー、バクニン、ニイチエの如きは、現代の産物であつて、敢て特殊異例のものと見ることが出來ぬ。彼等は現代の消極主義の代表者であつて、此等の消極主義は、其他スペンサー及マルクス等、近代運動者を祖述する思想家の内に無限に流動して居る。實に近代の吾人の社會生活は、一方に於て、野犬の喧嘩にも似たらん如き個人主義の哲學と、他方に於ては、細菌の世界を聯想せしめる無價値の物質主義無神主義とに苦められつゝある有様で、倫理宗教の如き内面的方面になつては、渦動の種が多くなり、その結果は大旋風にもなりそうである。

然し若し精神的方面が社會生活上に必要缺くべからざるものであるとすれば、吾人は過去より今日に獲得したる精神的所得を如何に維持保存すべきか、又如何に未來の社會に傳

ふべきが大なる問題と云はねばならぬ。現今に於ては、社會の如何なる制度や階級に於ても、既にその精神的産物を喪失しつゝある有様で、特に四の方面、即ち家族、政治、宗教、道德の上に於て理想を失ひつゝあるは自明の事である。將來世界人道主義の上に寄與せんとする志あらば、正に此等の精神的遺産を確然保持する覺悟が必要である。

家族生活の價値を見直す必要

現代文明の虚無的傾向を除去せんとするならば、特に家族生活の價値を尙一度評價し見直すことが焦眉の急であらう。個人生活と社會生活との自然的中間となるものは、家族生活であつて、家族生活ある爲に、兒童は先づ簡單ながら、生産的、政治的、法律的、道德的宗教的傳承を教へられ、又其あるがために、友情と克己と獻身との徳に入門する事が出来るのである。近時心理學の説明する處によれば、社會生活に於ける忠誠、獻身等の徳は、家族生活が兒童の自然的愛情を養成するから生ずるのであつて、家族に對する愛情は、遂に變じて社會國家に對する愛となるのである。其證據として、家族的感情の強い國民は、必ず愛國的感情に富み、社會的同情心に富めるものである。

換言すれば、家族生活は、個人に社會的團結の意味と性質と、又社會的理想を教訓するもので、斯して家族的生活は、人の利己的本能と社會的義務とを連結する橋梁の役目を爲し來つたのである。然るに斯かる家族的訓練が偶ま廣く社會及人類一般に及ばざりし觀のあつたのは、必しも家族制度の罪ではなく、國家と同様に、家族も亦人道的理想と相應じなければ、人類の大きな生活に對して障害物となるといふ事を示すに過ぎない。實に義務の精神は、自然的愛情を基とする家族生活から發しなければならぬ。過去の文明が、家族生活によつて進展し來つた如く、今後の文明の中心も、一に家族的生活にあることを忘れてはならぬ。健全なる社會的傳承を繼續せしめんが爲に、此の如き家族生活の理想を維持しなければならぬ。又社會制度其のもの、一般人をして如上の家族生活を營ましむる様に組織しなければならぬ。

家族制度と云ふものが、從來其目的を果し得なかつたことがあると云ふために、其制度は全然價値なきものと認めることは誤謬である。若し其流義で家族制度を攻撃するならば、總ての社會制度を攻撃しなければならぬ。寧ろ吾々は斯かる家族制度の發展を妨げる個人生活や社會制度の缺點を探究し、且つ改善して行かなければならぬ。社會の將來を憂

慮するものあらば、須らく前述の優種論の場合と等しく、文化の要求に従つて家族制度の勃興を期待しなげばならぬ。人道的理想が結婚制度と家族制度とを通じて、社會に人道的理想を行はしめるは固より、更に其家族制度に據つて人類生活の價値を保存しなければならぬ。吾人は斯かる點からして、社會道徳の最高觀念として、父母の慈愛と云ふことを主張したいと考へる。又従つて各個人に對して、結婚して親となる義務と云ふことを教へなければならぬ。家族生活は個人的品格の源泉であつて、之に依つて社會生活の新鮮なる復活を求めなければならぬ。

政治の價値を見直す必要

尙ほ吾人は如上の社會問題を解決する爲には、政治と法律との價値を見直すを必要とする。過去に於ては、無邪氣にも、又は不合理にも、政治機關の力を重く見過ぎ、又社會の事が萬事投票で處置出来る様に思つて居た。然し現今の時勢に於ては、斯かゝる舊時の迷信を破つて、行政及法律機關なるものが果して如何なる範圍で有力であるかと云ふ事を研究し、他方に於ては、此の研究に基く社會整頓機關としての政治法律の新なる觀念を造ら

なければならぬ。此に關しては、新世界なる米國では、政治機能に關する過去の歴史を失つた。そこで法律無視と云ふことが米國人に對する一般の非難になつて居る。而して此は祖先の政治的理想を繼承しないと云ふ點から、幾分當を得た批難と云はねばならぬ。然し此は米國人の祖先が持つて居た政治に關する理想を失つたのであつて、即ち過去に於ける歐洲の政治なるものは、利己的政治であつて、一階級の利益のために、全體が犠牲になり、又一般政權を有するものも、自己の利益のためには、耻辱も忘れて利得を計ると云ふ有様であつた。斯かる制度の下には、到底健全なる政治生活なるものが現はれず、一般政治家行政家司法官に對する世の尊敬心が缺如するのも、自然の數と云はねばならぬ。従つて又、法律その物に對する信用も亡くなる譯で、立法者や司法官も愛國で仕事をして居るとは信ぜられない状態である。又斯かる事情の下では、眞の民本主義も發達しない。只だ國民の利己心、團體の利慾心のみを馳せるからである。

若し民意を本にする法律や政治が永續する要があるならば、愛國心に基いた政治を復活しなげばならぬ。何故となれば一階級が私利の爲に行ふ法律や政治は、何人も之を尊重するものでないから。眞の愛國心の上に築き上げた政治は、眞の人道主義に敵對するもの

ではない。人道は國家以上だと云ふが、人道的基礎を確定するには、小なる家族や郷黨から國家に至るまで、具體的範圍で實現すべきであつて、此の小範圍の團結は人道團結の基礎である。之を主張するためには、一團體に對する忠誠の發達は、必しも其以上の團體に對する忠誠を弱めるものでないと云ふ社會心理的原理を記憶するを要する。

政治に對する消極的態度は、第十九世紀中西洋諸國では、政治政體は云はゞ放任主義的個人主義となり、遂に虛無主義に墮落したためである。此等は現今の如く複雑なる社會生活並に之に關する秩序の要求から見ても、到底認容すべからざるものである。之に反して、現下の政治的要求は、全人類の利益を尊重すると同時に、個人自發性の發達を期し、社會の進歩を障害するものを全く排除せんとするにある。然も世界の平和及秩序を建設せんとする國際的進運を妨害するが如きものであつてはならぬ。一國民内部の政治は、必ず世界人類の大發展に資するものでなければならぬ。西洋の指導國民中、若し全く利己の念を去つて、虛心坦懐、人類の義務の遂行を期するものがあるならば、如上の理想世界を建立することは必しも難事ではないと信ずる。

宗教の價値を見直す必要

若し社會問題にして解決せられるものとするれば、再び社會に於ける宗教の價値を見直すなければならぬ。宗教は要するに社會的理想の普遍化、又體現と云ふことが出来る。政治やその他の社會的勢力と同じく、宗教も亦、誤つた價値を尊い者とする弊はあるが、社會の發達が複雑になるに従つて、個人の意識には深く社會的價値といふ者を印象する必要がある、社會的價値は主として宗教の形で個人を支配する者である。されば社會的行動の最も有効なる制統機關として極めて必要な普遍的且つ絶對的のものとして現はれて来る。従つて宗教は、從來社會の秩序を整へる上に於て重大なる意義を持つて居た。彼のウヰッド教授の曰つた如く、宗教は社會をしてその軌道を保たせる重力とも云へやう。其宗教的制裁が高潔なものであらば、その理想が勢力を有する社會の發達は必ず健全なものがあらう。一言にして云はゞ、宗教は、文明の高等生活と密接に連結し、宗教の亡びることがあらば、文明の高等要素も亦自然消滅することになるのである。

近世は假令無神論と云ふ程でなくも、宗教的要求に對して、甚だしく冷淡になつた時代

である。従つて社會が宗教なくして成立する所以を論ずる學者が、反つて世間から持離されると云ふ有様になつて來た。此の如くにして宗教は文化に於ける適當の位置を失つて、哲學と共に社會の一隅に葬られ、僅に尊敬の表徴として用ひられるか、又は全く迷信に過ぎないと見られて居る。

然し今までに見て來た如き社會現状の分析が正しいならば、宗教は能く人性の利己心動物欲を驅逐して、利他的信仰力に依つて、社會問題の解決に直接利する處があるに相違ない。特に社會的宗教は、個人、階級、國民乃至人種の上に超絶して、人類的義務を顯彰するもので、従つて人類的道德の立脚地からして、人種間、國民間、階級間の競争を杜絶する力にならう。社會問題の中心たる、個人間、階級間、國民間、人種間の戦争は、唯だ一に愛の宗教、義務の宗教に依つてのみ救はれることが出来るのである。

道德の價値を見直す必要

社會問題解決の爲には、最後に、道德と道德的理想との價値を見直すなければならぬ。家族、政治、宗教の三者は、吾人の道德實行を促し、又は道德の理想を支持する限に於て價

値あるものであることは前述の如くである。然るに近世に於ては此等精神的價値に關する人間行爲の問題に就いては甚しく冷淡なものになつて居る。彼のギデングス教授の云つた如くに「吾人は從來無教育者と教育者との間の連絡に關して非常に苦心をした。今日は貧富の間の連絡について工夫しつゝある時代であるが、唯だ惡者と善者との間に關しては、吾人の未だ意を用ひざる所である」と。正しく此の善惡兩者間の連絡は現今社會問題焦眉の事と云はなければならぬ。

道德とは要するに人間を調和的に連結させる處のものである。世に誠實や正直や忠誠、正義の徳なくして圓滿なる社會生活があると考へるは夢である。此等よりも高い徳、全人類の愛、人類に盡す義務などいふ事は暫く論せずとしても、道德なしに社會の理想を描く事は出來ない。吾人は須らく道德的實踐の必要を覺り、社會的生活に於ける道德的理想の必要に心を用ひなければならぬ。又従つて道德的傳承を維持し、道德教育を振興しなければならぬ。現今の社會問題中最重大なるものは、前述ギデングス教授の云へる如く、善惡兩者間に圓滿なる橋梁を架けるにある。惡徳劣情は、犯罪の入口で、犯罪は社會の秩序を破壊する力である。或る場合には、犯罪は精神的不具から生じ、又は經濟的不正義に培養

せられるが、然し、此等の犯罪よりも遙に恐るべきは、社會生活に關する理想の低減に基して居る犯罪である。而も此等犯罪の傳染力は、非常に迅速で、之がために今日の西洋社會は、所謂虛無主義の產出を見る有様である。社會にとつては非常な損害と云はなければならぬ。そこで文明を形成する各人の個性に就いて今少しく述べやう。

社會に於ける善惡の橋梁は如何にして架すべきか。これ大なる問題と云はなければならぬ。一言にして云はば、若し有効な信仰が現出して、個人及社會が之に依つて救濟せらるゝに至らば、其目的を果し得るのである。元來社會問題中の問題とも云ふべきは、如何なる種類の道德的理想が人道の増進と發達とを促すかと云ふ事である。前述の個人主義即ち自己の幸福と個人的發達とのみを主眼とする道德主義では、從來の西洋文明の中で人類の調和と進歩とを成し得なかつた。快樂主義や個人的修養は、善惡間の橋梁を構成し得なかつたのみならず、社會をして益々利己的非社會的の傾向に傾かしめた。社會的見地から見て、此等は何れも失敗した道德主義である。快樂主義に對しては學者の非難は多く現はれたが、「個人修養」の主義に對しては、十九世紀の思想家は、大抵此を人類の進歩に益ありとした。此は確に眞理の點もあるが、一般には此説は反社會の傾向に傾いた。

個人的道德主義は破産したが、さて如何なる道德主義が、今日の如き複雑なる社會の要求に答へんとするか。一言にして答ふれば、個人的發達及幸福等を眼中に置かずして、人道全體の發達を期する如き道德主義是である。即ち道德的理想は、完全の人といふ事を目じるしにせず、人道全體を包含する完全の社會として見るべきである。更に換言すれば、個人の道德的理想は、自己の利益幸福を人類に對する手段として考へるものでなければならぬ。此の人道的理想は、固より個人能力の十分なる發達を要求し、個人の幸福も皆此の人道的義務のために用ひられなければならぬ。斯かる見地より見て、人道的理想は、彼の快樂主義、自己修養主義の中に含むて居る善良な分子の綜合とも云ひ得るけれども、此を實踐の上から見れば、己れを主とするのと、人道を主とするのとは、非常な相違があると云はなければならぬ。

人道の爲に盡すといふ事を根底とする道德主義を天下に實施しやうとならば、現今の歐洲程都合の處はない。歐洲では早くより人道的キリスト教が行はれて居り、其宗教中に含蓄して居る博愛と義務の精神は、正しく右に云ふ人道的道德の根底となつて居る。道德的理想なるものは、總て絶對的信念を以て現はれ、又其宗教的の制裁を伴つて居る場合に

初めて、社會に對して教化の効力が現はれて來るのである。道德と宗教との分離は、その何れにとつても、社會の爲の用を失ふものとなる。道德的理想も社會的理想も共に社會的の宗教を要する、即ち人道的道德は必ず人道主義の宗教となるのである。而して其結果が人類の義務を此の宗教的理想と合致せしむるに至るのである。

キリスト教の價値を見直す必要

然るに實に遺憾とすべきは、現今人道的道德の必要を論ずる人にして、尙ほ宗教の必要を閉却し、加之キリスト教が斯かる種類の宗教として最も適切なることをも忘却して居る點である。コントは、社會問題を解決するにつけて、キリスト教の必要を認容しなかつたが、此はコントが接したキリスト教が宗派的逼狭のもので、近世の社會的必要を知らないものであつたのだから、恕すべき點はある。但し世界にある諸教會のキリスト教は、大抵コントの國にあつたキリスト教と大差ないものである。それ故西洋文明の中で、今の社會生活に應じ得る宗教を求めるとは大切な事である。社會的必要を閉却した結果、教會が甚しく世の信頼を喪ふに至つたことは確である。然し又他方に於ては、人道的社會的キリス

Willibrand:

1. 律法主義
2. 聖書主義
3. 道徳主義

Willibrand

ト教の新精神が、次第に西洋諸國民に勃興しつゝあるも明である。此の新キリスト教は、舊時代の神學論を放棄して、日常生活に人道的倫理の實際應用を専心するに至つて居る。今日に在つては、今更新宗教の建設を計るは困難であつて、寧ろ舊宗教を改善復活させるのが捷徑であり、科學的見地から見ても、社會問題解決の爲にキリスト教の價値を更に見直す必要がある。完全な社會道德を得んとするには、斯かる一種の救済宗教を要するのであつて、又やがて其の宗教が、前に述べた善惡二者の間の橋梁となるものである。

道德教育を改善して西洋文明に存在して居る

精神的價値を保存する要

善惡二者間の橋梁を建設する方法は、現今にあつては、現代青年の行爲性格を改善するにあると信ずる。即ち道德教育を盛にして、道德的社會的價値を青年の心に植ゑ付ける事である。米國に於ては、此の問題が久しく等閑に付せられてあつた結果、今日では米國の文化には道德基礎が十分でなくなつて居る。有識の人々は、斯かる状態は、一に米國社會が道德的傳説を維持するに周到なる用意を缺いたからだとなつて居る。

通例家庭と教會とは、専ら道德教育の唯一機關につなげて居つて、此の方面の教育には、此の二者が有効である事は争はれない。特に國民の宗教的生活の代表機關たる教會は、道德的理想の維持者たり命令者たる任務を持つて居、教會が其職務上社會の精神的權力者と呼ばれて居るのは理由のあることである。斯かる道德教育機關たる教會が、眞の道德的教化を行ふに至らば、最も都合のよい事と云はねばならぬ。

然るに、人民の大多數は今や教會の勢力に觸れず、又教會が十分に自らの天職を悟り、つまらない宗派別を脱したとしても、教會のみで西洋諸國全體を支配するには長月日を要しやう。そこで道德の最少限を與へる事は、學校教育に於て其目的を果さなければならぬ。道德教育は學校教育中の最も重要なものたることは、一般善良なる教師の是認する處である。然るに實際に見ると、此には種々なる困難が伴つて來る。例へば學校に於ける修身科なるものは、社會的必要に應ずるに足らず、又其の訓育は實例を示すに止まり、道德的理想の説明が甚だ不十分である。其上米國には、從來訓育と宗教教育とを全く區別して、兩者の混同を甚しく忌憚する奇妙な風が見える。之に反してヨーロッパ諸國にあつては、寧ろ道德教育を宗派宗門に一任し、その爲に宗派の別がやかましく、道德上の大切な問題

がその爲に混亂せられる。即ち全體としての結果は、ヨーロッパでもアメリカでも、此の複雑な文明の問題に當るべき高い道德は、學校では殆ど教へない事になつて居る。

兒童の品性は、恰も文化の性質と同じく、心を支配する力、即ち社會を支配する觀念及價值を中心として建設されて行くのである。其處で其の兒童の衝動や、習慣や、品性が、宗教教化に關係せずに發達するものとすれば、如何なる種類の中心觀念が彼等兒童の心を支配する力となるか、換言すれば、西洋文明が據つて以て立つべき道德的根本觀念が如何なるものなるべきかと云ふことになる。此の中心觀念の中で、人道的觀念は、國家、人種、階級觀念の上に超然たるべきものである。特に弱小國に對する強大國、其他劣等人種に對する優等人種、劣等階級に對する優等階級、弱者に對する强者の人道的任務に於ては、特に重大なものもあると云はなければならぬ。之と並んで重要なものは、利己的ならず人道的義務の立場からの個人發展、及自己獻身と云ふことが大切である。正義、平和、善意と云ふが如き觀念も、單に個人と個人との間の問題ではなくて、人種間、國民間、階級間の道德觀念でなければならぬ。家族、國家、團體の生活を人類文化の目的に適順せしむることを、是れ社會道德全體の要目と云はなければならぬ。

問題の解決は靜的でなくて、個人間の不斷の關係を整理する理性的支配力を求めて行かなければならぬ。而して段々論究した如く、斯かる整理的原則は今日社會學研究の程度でも缺けて居るとは云へない。即ち今までに得た知識を應用する丈でも、それだけ社會を改善する事が出来るのである。然し尙ほ遺憾なことは、現今の社會は、未だ斯かる社會問題に多く興味を持たない。從來世人は、或は天然の研究に熱中し、又は自己の利害休感を事として、その爲に人間の關係といふ事は多く考へずに来た。又舊時の文明は物質的、個人的基礎に強く執着した。其證據に今日教育の課程には、社會的の題目は一切なく、唯だ物理的科學や自己修養に關するもののみである。今まで科學が天然萬有の制御に熱中した位に、社會問題の解決に熱心になれば、一時代の中にも種々偉大の奏功を得るに違ひない。

外部組織では足りない

社會問題を解決せんが爲めには、單に外部的機關に依るのは無効である。然るに實際社會にあつては、一般に此の外部的組織方法が一見簡便であり、又個性や個人智力の困難なる問題に逢着することを嫌つて、兎に角外部的機械方法を採用しやうとする。然し社會は

結局、個人内心の融合から成立つものであるから、云はば自我の複合より成るものと云ふことが出来る。此に心付かず、唯だ社會の外形、形式に拘泥して、其内容に接觸しないのは、普通の社會主義者を初め、婦人参政権者等の場合に多く見る所である。宗教でも、政治でも、教育でも、又國際關係でも、組織制度を整へさへすればよいといふ考は、此等に從事する人の一種の甘い夢である。

現今の歐洲戰役は、云はば社會機關が失敗した結果を示したものであつて、其社會機關も採用すべき場所を過たぬ限り必要なものがあつた。然るに其等の機關は多く用をなさなかつた。例へばヘーグ萬國條約の如き、世界仲裁々判の如きがあつたが、それ等は皆何の用にも立たなかつた。是等は一に現今の歐洲文明なるものが程度低くして、此等の機關を適當に使用する途を知らなかつた爲である。然るに現今に於て尙ほ、歐洲同盟や、萬國警察機關や、乃至は萬國軍備廢止によつて、未來に世界の戰亂を防禦し得ると深く信じて居る人々がある。此に反して事實は國際間の嫉妬心が止まない限は、到底戰亂を絶滅することは出来ぬ。但し斯く云ふのは、國際同盟や平和同盟が全然無用だといふのでなく、此等の實行は之を希望するが、文明の基になるべき道德的理想が十分發達しなければ、此等も行

はれるに由ないといふのである。又例へば富者と貧者との間の争闘の如きは、將來に於ても益々猖獗になり行くであらうし、之を寛和させるためには、平和的理想や、人類的理想が社會一般中心點とならなければ、到底不可能の事と云はねばならぬ。事實、個人の判断力や性格を閉却したる機械的方法を以てしては、社會問題を解決するどころか、非常に恐るべき破裂をすら防ぐことは出来ぬのである。

一方に偏した立案では足りない

社會問題の解決は、單に一方面より遂行し得るものでない。吾人が以上述べて來た論點は要するに、一方面のみを固守する社會的運動では足りないといふ事に歸着する。例へば優種學者は、社會に於ける個人の方に注目し、遺傳の事實のみを研究すると云ふ状態であり、經濟學者や歴史家の如きは、經濟的現象のみを認めて、宗教、道德等の方面を不公平にも閉却して居り、又宗教家は、今日に於ては、正しい宗教及倫理的理想が如何に高等文明の上に重大であるかと云ふことを覺悟して居るけれども、今迄の宗教家は、人生に對する工業組織の影響や社會制度等に就いては、更に顧慮する所がなかつた。更に政治學者の

如きは政治組織社會組織と云ふ方面に心を用ひて居るけれども、個人的品性を形成する他の要素については殆ど閉却して居る者が多い。

吾人は以上の偏面の觀念や理想を脱することが必要で、若し斯かる偏面觀に縛せらるゝが如き事あらば、社會の進歩は得て望む事が出来ぬ。如上の消極的方法に代はるべき社會生活の綜合的見地を求めなければならぬ。個人の性質も、社會の性質も、一概に純樸なものでなく、複雑な要素が相集つて複合的作用をなすものであるから、單に經濟的方面のみ、或は行政的組織のみ、或は宗教、或は社會衛生の一面のみを改善することで、社會全般を改良し得ると思惟してはならぬ。圓滿な社會進歩のためには、社會運動及社會理論の綜合的眞理を要するのである。斯くて此の種の社會研究、高い社會哲學あつて、初めて社會の發達を期待することが出来る。要するに、社會的事業社會的立法なるものを、眞の意義に於て實行するには、社會全般に對する科學的研究に依頼せねばならぬ。

革命的方法では足りない

最後に、社會問題は突然の變化又は革命で之を解決する事は出来ない。此の如き見解は

外部的一部の變化では、到底社會問題を解決し得ない處から推して來た一の推論に過ぎない。革命と云ふことを、俄然として現はれるものとすれば、此の如き變革が、個人でも國民でも、その性格に、深い又は永續する結果を齎らし得ないといふ事は、歴史や心理學が之を示して居る。社會の事で一層良い方に進むのは、國民一般の知識程度を向上し、觀念及價値を向上することに依つて漸次に成就するものである。されば歴史上に於て見る革命の如きも、實は長年月の間に互つて次第に準備せられた曉の事と見るべく、社會の風習と云ふが如きものも、實は社會を造る個人多數の意見や習慣を變化すれば、漸次變革することが出来るのである。此の目的を果すためには、先づ青年の精神的態度を教育の力に依つて變革することが大切なこと、なるのである。

革命と云ふことが、治者階級の權力を被治者又は不治者階級が暴力で掠奪することならば、革命の手段は社會問題の解決に何の用もなさぬ事は歴史が之を證明する。唯だ治者權力階級が社會進展の道を杜絶し、到底社會の進歩に伴ふ事が出来ない場合には、革命は政治上にはあつてよい場合もある。然し革命は常に外部だけの變化であり、且つ革命の結果が社會の秩序を亂すために、概して社會改善の方法としては不適當のものと云はなければ

ばならぬ。革命が兎角血を流すと云ふのは、人間の動物性が復活した證左であつて、斯くまでに文明を野蠻の犠牲に供して、而もそれで文明を高く進めるといふ目的を達し得られるや否やといふ事は、所謂「革命による社會進化」といふ説に對する今日の大問題となるのである。

今日の社會學の研究から見ると、人類社會の力には一定の制限を要し、文明社會で暴力を用ひるのは遂には野蠻性復活の結果を來すのである。從來歲月を重ね苦心經營して來た處の社會的價値が一朝にして亡びることとなる。又人々が己の行爲を整理するために、次第に修得した道徳も遂に撲滅せらるゝに至るのである。革命の久しきに亙る際は、文明てふ文明は全く廢類に歸し、又理性的に完成せらるべき社會的目的も、其がために頽崩し去ることは明白なる事實である。暴力を用ひて文明の改革を遂げんとするのは、自殺に外ならぬ。一國に於ける内亂は殆ど國力の全部を消滅し盡す、されば國と國との間の戦争が破壊の結果を來すが如くに、一國の中で階級間の戦争は、その害之に倍蓰する。

然るに上述の如く云はゞ世人は、通常手段の盡きた場合には革命手段は止むを得ざるに非ずやと駁論するものもあらうが、元々革命は社會進歩を助ける一般手段ではなくして、

若し社會組織の弾力性を利用し得れば、斯かる破壊的結果をも逃れ得る場合が多いのである。且つ又社會學の研究の如きは、畢竟斯かる社會的災禍を逃れるために研究すべきものである。特に革命は、近世の民本主義の社會に於ては、到底容るべからざる性質のものである。民本主義の國では、立法行政等一に國民的意志の發現であるべきで、上下一致し彼我共同の同情理會の上に建設した民本的社會では、社會の進歩を促すための革命の如きは極めて無意味であり、治者が總て人民階級の要求に接觸し、法律、工業、教育、宗教等で權威を握る人が、總て公益を主眼とし、人民が互に同情理會で生活するならば、革命の要が生ずる譯はない。而して斯かる革命の災害を免れ得ざる場合は、固より社會に於ける優秀者の責任と云はねばならぬ。されば彼等は平素に於て國家に對する公平なる批評家となり、思想辯論等の力で常に邦家の指導者を以て任じなければならぬ。斯の如くにして尙ほ革命の必要があるといふ如きは殆ど夢想だにも能はぬ處である。

個人の性質が中心である

此の如く社會問題を解決するに、單に外部的一面的な革命に依つて遂行してはならぬ。

之に反して飽くまで青年を教育し、社會の理想及價値の方面より、内部的境遇を改善して行かなければならぬ。結局個人の社會的知識及社會的品性を進歩させることが、此の問題の中心であつて、問題は社會指導及社會的教育の一大事となる譯である。社會制度や乃至社會的變革の如きも、吾人の社會生活の中に、内部的精神的變化がその基本にならなければ、甚だ有力の効果は得られない。何となれば社會生活は、一に個人相互間の精神的態度其者に依存するからである。

社會生活が個人の性格即ち個人の衝動、習慣、智能、價値及理想の如何に基くと云ふ説は、蓋し從來社會學者が嫌つた所であつて、若し斯くの如き説を持するとならば、社會問題の解決は、社會問題として不可能だといふ事になるやに思はれる。幾億萬人の品性を改造してかゝるより、寧ろ其等を放棄して、社會問題を他方面より解決するがよいではないかと彼等は考へる。

然し社會的科學は、矢張り個人の品性問題を根本とし、個人品性の發達をどういふ工合に社會的に支配するかといふ事を研究する。科學的分析によると、個人の品性には三根據が在る。一は遺傳、二は一般的社會境遇、三は個人的教育、此の三者である。此に就いて

は既に詳論したから、此處には簡潔に是等を反復するに止める。

品性の發達とその支配との根本三點

第一兒童は、先づ此世に生を營むに當つて、發足點が良くならなければならぬ。即ち其天稟を社會生活の間に發揮するためには、健全な血統を持つて生まれて來ねばならぬ。其兒童の境遇や教育がよし好くても、其頭腦に缺點がある場合は、憾軻不遇の境涯に陥るか、又は社會關係の上で常軌を逸する人間になる。されば此點らして、優種論上の社會問題が必要となつて來るのであつて、遺傳は個人品性の第一根據になるべきものである。

但し個人の多數は、普通健全な性質を持つて生れて來て居る。然るに之が非常の差違を生ずるに至るのは、一に社會的境遇や個人的教育の勢力である。社會制度は確に種々なる影響を個人の上に與へる。例へば經濟的關係、或は職業の關係は、個人に重大な影響を及ぼす。天性は通常で、教育もかなりある人でも、經濟上失職者となる事は、現在の社會では有り勝ちの事で、その結果その人が遂に犯罪者となるが如きは、明に此の經濟上の影響

から個人品性の發達を阻害した適證である。即ち社會組織の悪いのは、善良な性格の發現に大妨害になる。

其他社會的標準、理想觀念のために、個人の品性が重大なる變化を蒙ることは事實で、例へば社會的傳承が個人の品性の上に影響すること、又社會的雰圍氣が、肉體に對する自然雰圍氣と同様に、個人品性の上に影響を及ぼすことは非常である。此等の環境が個人品格の發達を作るものではないが、之に影響し、その方角を定める事は争はれない。憎惡私利、惡徳の横行する社會に棲息すれば、人はどれだけかその感化を受ける。されば社會問題を解決するには、個人相互間の相愛、善意、義務などを養ふ雰圍氣を造らなければならぬ。

如上の主觀的精神的境遇及社會的雰圍氣は、特に西洋文明に見る消極的社會制度の影響で、適切に之を説明し得る。例へば今日の歐洲大戰の如きも、若し從來の文明に個人主義乃至利己的主觀主義が行はれて居なかつたなれば、必しも今日の戰亂を見なかつたかも知れぬ。現代の歐洲文明は實に事々個人放任主義の支配を受け、又社會は個人の契約で出來て居るといふ説が行はれ、此等が家族など個人同志親密の關係にも影響して居る。之に反して、社會的義務、社會的責任、又社會的奉公を重んずる如き説で、社會全體の空氣を作

り上げる様にすれば、その結果は目に見えて、個人の性格にも社會生活にも現はれて來るに違ひない。何れにしても、個人の利益といふ事を社會生活の原動力にし、而して社會問題を解決するに、個人にしても階級にしても、その各自の利益を天秤にかけてやつて見る如きは、到底徒勞たるを免れない。

社會的境遇や又社會的組織が個人品性の發表や發達の上に於て影響する事、又工業の組織、その他社會一般に行はれる學說、標準、價值等が、個人品性上に大影響がある事、此等が以上の決論である。他方に於ては個人教育の結果と社會の影響とを區別するのは難事であるが、之を區別するのは便宜であつて、青年の教育は、主として家庭及び學校と云ふ小範圍の環境の感化であつて、人工でするもの、その影響は青年の個性、即ち習慣や意見や理想を養ふものであるから、その事は別に之を考へる要がある。而して青年の教育は、遺傳及社會境遇の改善の上に大關係を持つて居る。社會が道德的でない場合でも、青年の教育にして適切ならば、其青年によつて指導せらるゝ國家は、大なる利益を得る。

犯罪の問題労働問題を社會問題解決の實例として見る

そこで遺傳、社會的境遇、及教育等が如何に社會問題解決の上に重大な關係があるかと云ふことを今少しく述べて見やう。例へば社會問題の深酷なる一例として犯罪に就いて一考して見やう。今日の科學的研究によると、犯罪には一種の遺傳的缺點が其重大原因となつて居ると云ふ事である。完全なる個人であつても、社會の犠牲になると云ふ事は、極めて有勝ちの事で、其社會の經濟組織や、其社會的理想が低い場合、例へば飲酒の風俗の如きは直接間接に個人の墮落を導く基因となるのである。結局犯罪は、家庭教育、學校教育の不完全から來る事で、此等の教育機關が不完全であると、經濟組織や社會雰圍氣が正しい場合でも、犯罪の原因たる遺傳的缺點といふ要素を制することの出來ぬために、犯罪の發生を妨ぐことが出來ぬやうになる。そこで、遺傳と社會的周圍と個人の教育とを、適宜に導く事が出來れば、少々偶事の外、犯罪の大部分は之を除き得やう。即ち犯罪の問題は解決のつかないものでなく、他の社會問題と同様の方法で解決し得るに違ひない。

近代の社會問題としては労働問題の如きは極めて複雑な關係を持つて居る。社會の經濟組織が如何に完全であつても、之に並行すべき完全な品性と判斷力とが個人に缺けて居れば、此の労働問題は依然として解決がつかず、又弱肉強食の競争的現象は必ず起るに相違

がない。有名な銀行家バブソン (Babson) 氏が近時云つた如く、労働者の知識と品性との並行的進歩を見ない限は、労働社会の経済状態を如何に改良しても、彼等の永遠の利益にはならない。労働者が他の階級に比して低級なる限は、如何なる場合にあつても早晩世の劣敗者となるのは自然の數と云はなければならぬ。即ち労働者は他の社会と等しく、個人の向上を計るべきで、それは主として教育の問題となる。労働者は、法律や工業組織の上で自己の力を張らうとするよりも、學校設備の上で自己の利益を主張すべきで、さすれば社会に於ける位置と力を自ら向上し得やう。此の如くにして初めて、自己の眞の利益を獲得することが出来るのである。

労働問題の如きは、社会問題中の複雑なる一例證であるが、一方に於ては経済制度の改善を必要とすると同時に、他方にあつては資本主並に労働者の道德觀念の向上が、此の問題を解決する上に大要件となるのである。然し此の問題を尙深く研究して見ると、單に教育組織を變更するだけの事ではなくて、社会制度、工業組織全體、社会の標準理想、その他遺傳の矯正などと共に行ふべき事であつて、社会全體の空氣を改めて、此を個人の生活や教育組織と相應する様にしなければならぬ。要するに労働問題の如きも、人間の品性、遺傳、

社会的境遇及個人的教育の四大根源から、使用人、被傭者共に改善の道を計らなければ、何等得る處がない。而して此は決して實行出来ない仕事ではないのである。

若し個人品性が社会問題解決に重大なる關係ありとすれば、社会学及心理学上より二個の點から之を考察する事を得る。即ち社会的要素としての個人の品性は、第一、本能及衝動を統御する優秀なる智能、第二、利己を抑壓する愛他心である。換言すれば盲目を支配する理性と、人間自然の性を抑制する利他心とである。此の二點は、動もすれば人間の弱點となり、人の天性は、元來衝動的であつて、理性に反する方に走らしめ、又自分の事を考へる方が、他人の事を思ふ方よりも強く働く。そこで、社会全體の組織、特に個人教育の組織は、特に人間の理性的方面、利他的性質を刺激し發達せしめる様にし、本能利己を制する様にするのが、個人の中に強い社会的性格を發達せしめる所以である。

かく云へばとて、自分の事を顧慮する衝動や感じを全然抑壓せよといふのではなく、此の如きは不可能でもあり、又必しも望ましい事ではない。唯だ他愛心で利己心を寛和すべしと云ふにある。又斯くして初めて眞の個人性を發揮せしめることを得るのである。單なる盲目的愛他は、却て社会に無益なるもので、愛他と智能とが常に社会的になつて並び行

はれなければならぬ。實行問題として云へば、個人の性格に、理性と他愛心とを強くするといふのは、社會に科學が盛になり、人道主義の倫理と宗教とが行はれるにある。人道的宗教の如きも、科學なくしては盲目たるべく、又科學は之なくしては活動の動機を喪ふものである。

コントは、理性と他愛心とが個人品性及社會的生活の間に秀づる場合には、社會問題の解決は易々たりと考へた。近代的精神に於ては、以上の二者の外に、第三者として有効性なるものを要求して居る。有効性とは、要するに知識と、社會化せられた個人品性の所産とに外ならない。有効性は固より國民としての圓滿な有効性を主とするのであるけれども、其外にも特殊の修練的性質のものがあつて、是等は單に社會的に上述の知識と他愛心のみでは行はれ難い。然し此等も、相合しては社會生活の要素となるもので、従つて社會問題を解決する上に重大なる關係があるのである。それにしても、他愛心と智能とは個人の國民的資格の上に重要なものであるから、其他の練習的有效性に比して高價たるべきは云ふを待たぬ。即ち今までに、世界がコントの言を眞面目に採用して居たならば、現在の困難は大分軽減するを得たであらうと思はれる。

斯の如くにして、個人の知識と他愛心とは、他方に社會組織の完全を待つて初めて其有効性を發現するので、此を逆にして云はば、社會問題を單に外形的社會組織の上よりのみ論ずることは、眞の社會の構成を洞察し得ざるものと云はねばならぬ。最後に此の適切な社會組織を保持するには、社會の事に通曉した専門家、即ち有力な社會指導者が必要であつて、此から少しく之を論じやう。

社會指導者を教練する必要

直接に實行し得べき社會案を提出するのは本書の目的でないから、今は只だ吾人の如上の論述に對する世人の批評に答へて、それで終を結ばう。世人は蓋し如上の論議を以て無用の循環論と批難するであらう。即ち個人的品性は社會問題を解決する上の重要點なりと稱し、而かも個人的品性は幾分社會的境遇に依つて造られると云ふ、これ一箇の無益な循環論に非らざるかと。

吾人は之に對して云ふ、今までの議論は循環論ではない。社會的事實とは、個人と社會との間に行はるゝ反應作用に過ぎないので、循環論と見えるのは、實に一箇の、社會的事

實である。社會的作用は、その何れの方面でも、常に動と反動との相關であつて、社會組織も條件も、個人が之を作成し得る以上に個人に影響することは出来ぬ。即ち個人の性格が集まつて人間世界を作るのであるから、社會問題を研究するは、主として個人の智能と性格とに基いて見なければならぬ。但し個人性格の變化に伴つて社會的周圍をも變じて行かなければならぬ。此が出来なければ、個人の改善も徒勞に終る。

且つ個人の品性が其根本に於て、社會生活の間に其特性を没却するものでないといふことは、一般社會學者心理學者の認める處であつて、個人各自には特質、個性、自由があつて、それで各自だけだけは社會の周圍以上に進み得る。若し之なくば社會は千篇一律の固定物となるのである。幸個人の特種性あるために、社會は常に内部より變革せられ、自由の變遷を遂げて行き、その中でも特別の個人があつて、特にその特性自由を發揮する。此の如き人は必ずしも天才たるを要しないが、指導の力ある人たるを要する。之につけても、社會に最も必要なものは、卓識ある指導者である。智力ある指導者なくば、社會は一箇の動物園に過ぎないので、進歩も變化もないことになる。之に反して教練を経た専門的指導者があれば、社會の進歩は必や數倍になる。

そこで社會問題の實際的重要點は、社會的指導者を發見するに在る。ワード氏が述べた如く、現今の社會に於ては指導者たる資格ある人は必しも無い譯ではない。唯だ斯かる指導者を發見し、之を養成すべきであるが、此は教育の問題であつて、主として大學教育に重大なる關係を有する。然るに今日の大學教育は、此の大責任について十分眞面目に仕事をして居ない。科學的研究は、近年甚だしく進歩した。加之法律學、醫學、農學、工學上の技術家は、多く輩出したが、人類の社會的生活の問題を解決し得る底の人物は益々罕である。然るに西洋文明が社會問題を解決し得ず、遂に自滅に歸すればいざ知らず、苟くも然らざる限り、現社會の最も要求しつゝあるものは此種の經綸的人物である。現代の大學は果して斯かる人物を養成しつゝあるや否や。

歸一協會叢書
第二集 社會問題的建設的解釋

附
錄

姊崎正治
文明の熱病
戦後の精神的覺醒

文明の熱病

人體に發熱といふ事があると同じく、文明にも亦熱病がある。身體發熱の現象が内臟の不調、血液の變調で生じ、又は外部から何か侵入した爲に起ると同じく、文明の熱病は、文明の爛熟と共に内部に發生する事もあれば、又異種の文明や國民の接觸で起る事もある。今や世界の文明は、此の兩方の原因で發熱して大煩悶大争鬭を経つつある。一つは主として工業組織から來た社會の變調と、一つは國家競争から生じた大戦争である。

一昨年大戦破裂の後間もなく、ドイツ人で心理學者としてアメリカに居る人が、一書を著して、今度の戦争は、ドイツ自衛の爲に已むを得ないといふ事を論じ、自衛の必要上、ベルジック中立の侵害も亦已むを得ないと大に辯護した。且つ又ドイツの兵備と愛國心は敵國を制するに餘りあり、戦争の結果は必然ドイツの勝利に歸するは謂ふまでもない事を盛に吹聴した。但しその人の意見では、ドイツ人自身も、十九世紀後半の工業勃興以來、段々自負心を増長し、物質主義に陥り、奢侈や敗徳に流れる様になつて來たのであるから、此の戦争で此の如き病を一掃して、新なドイツは、新鮮で健全な活氣を以て興隆するに違

ひない。此がその人の理想であつた。

此と同様に、フランスの一哲學者は、多數フランス人の考を代表して、戦争の意義を論じた。その趣意はかうである。今度の戦争は、「神意即ちドイツ主義」否「ドイツ主義即神意」だといふドイツ人の自負心に對する人類の抗抵奮闘である。一國民が獨で神意を代表すると云ふ様な思想が、他國民を服従せしめる様な事が出来ないのは勿論、一國民でも、此の様な思想で永續的に興奮するといふ事は到底あり得ない。ドイツ皇帝が戦を挑發して人類を敵としたのは、此の如き妄想の興奮がその頂點に達して爆發したしるしである。それ故に戦争の結果は、必ずドイツ主義といふ妄想の敗北壞亂に終るに違ひない。現にフランス人が此の戦争に依つて發揮しつつある愛國心は、今日まで通常に云ふ愛國心と違つて、人道の爲に戦ふといふ熱情、その熱情をフランス人が一方に代表して、ドイツ主義の妄想と戦ひつゝあるのである。

尙ほ此等以外に色々哲學的、社會的論評は、多くドイツにもフランスにも出て居、又イギリスやアメリカでは民主主義對軍國主義の戦争だとの解釋も盛に行はれて居る。それ等も、追々紹介したいと思つて居るが、先づ右に掲げた二方面の思想について、少し考へて

見たい。

右の二つの意見は、各々それぞれの真理を含むと共に、兩方とも奇妙な自家撞着又は缺陷をも示して居る。新興國としてドイツの商工業を盛にする爲に、ドイツの勢力範圍を廣める必要のあるは、衆目の睹る所で、之を自衛といふならば、今度の戦争は確に自衛の戦争である。少くともドイツ人は此く信すればこそ、戦争の苦痛に堪えて甚しい犠牲をも辭しないで居る。此の精神が愛國心であるならば、ドイツ人の愛國心は中々強い力を示して居る、——戦争最終の結果が何れの勝利に歸するにしても。さて此等の議論や解釋を眞理と許したとして、右の心理學者は、それだけドイツの正義を信じ、ドイツ人の愛國心に信頼して居ながらも、尙ほ、少くとも今までのドイツ人の奢侈を嘆じ腐敗を慨する理由は何處にあらう。且つや又、此の慨嘆は正當であらうが、その慨嘆すべき事が、如何なる原因事情で生じ又如何にして、又何故戦争で之を除き得るといふ見込が立つか。此處に至つては、右の心理學者はその理由を少しも示して居ない。云はゞ、彼れは病氣の現在症状と豫後とにいつて見る所があるのであるが、——その當否は暫く別問題として——その病因を確めやうとせず、又單に戦争がその治療方法だと獨斷したのである。

之に對してフランス哲學者の意見も、ドイツ主義の妄想に對する論評としては多くの眞理を含み、又現在の戰爭を以てドイツ主義に對する人類の奮闘だとするのは、少くとも聯合軍側の一種の信仰であつて、此の信念は、確にドイツに對する包圍攻撃の大勢力たる事は拒み得ない。且つ又現在の戰爭に處して、フランス人の信念が、單に愛國心といふよりも以上に、一種宗教的熱情を帯びて居るといふ事も、議論以上に諸種の事實に關する報道が之を確めて居る。然しそこで問題はやはり先の場合と同じく、戰爭だけでドイツの妄想を破り得るや、又フランス人の熱情は、果してその目的を達するまでは、戦後までも同様に續くかといふ點に歸着する。ドイツが戰爭を仕向けたから、フランスは之に應戦し、而して進んでドイツ人の妄想を破らうといふ意氣込になつて來たのであるが、ドイツ主義の妄想はドイツだけにあつて、その他の國、——フランスなり、又はその他の聯合國——にも存しないであらうか。ドイツ主義を打破り得たとしても、それと同様の妄想が他に潜伏又は活動して居るのに對してはどうするか。

そこで此の間に對して、右のフランス人は何等の考をも言明して居ない。「何れの方面から見ても、又兩方の意見で一致して居る點は、今の大戰がドイツの膨脹をその直接の原因

として居るといふ一事である。即ち商工業に於て皆て後進國であつたドイツが、必要と慾望とに刺激せられて、初はイギリスに興つた工業組織を取り入れ、科學の應用で之を精鍊し、而してその産物を以て世界の市場を占領しやうとした。その必要の爲に外に向つては外交手段に訴へ、兵備を備へて、どしどし四方に侵略的態度に出ると共に、内には國民統一の必要上ドイツ主義といふ一標幟で民心を纏めた。而してこの旗じるしは、内國に止まり得ないで、外國に向つて侵襲的にドイツ主義の傳道的宣布となつたのである。他の諸國にも、多少は此に似た思想や政策もあり、イギリスの帝國主義、フランスの文明抱負、ロシアの侵略主義など、皆此に似て居るが、此等の思想と勢力とに集中統一を與へて侵略の態度に出たのは、ドイツである。此のドイツ主義のあたり憚らぬ進撃が、世界全體に變調を起し、大戰爭といふ大熱を發したのである。ドイツ國內だけで見ても、ドイツ主義の慢心は頗る發熱的狀態にあつたのだが——僕自らの五六年を隔てゝの再度の觀察でも、その症候はどしどし進みつゝあつた、——その發熱の進撃に依つて、ヨーロッパ全體、世界の大部分が大發熱を起して、今は一寸とした下熱劑ぐらいではきかない様になり、自然の経過を待つ外ない有様になつたのである。

此の如きドイツの膨脹と、その侵襲的政策が、正當であるや不正當であるやといふ道德的評論は、暫く別にして、此の如き國內並に國際的發熱が、その直接の原因に於て新文明の工業組織にある事は争はれまい。大仕懸の工業、それに伴ふ商業擴張の必要、それから出て来る労働者と資本主との懸隔、生活の便利に伴ふ人慾の増進、組織的大仕懸けから生ずる人格の輕視、理想の墮落、此等はどうしても今の工業組織から出る必然の結果である。勿論、今の工業組織の中でも、此等の害を除き又輕減する方法がないではなからう、又之を除く爲に色々の思想や主義、研究や試験は盛に行はれつゝある。然し現在の工業組織を急激に進めやうとすれば、弊を除き又は害を軽くする餘裕なしに、害がどしどし現はれて来る。右のドイツ心理學者の慨嘆は此の點を指したものである。

但し此に注意すべき事は、此の如き發熱の原因が具はつて居るのは、獨りドイツのみでなく、多少の別こそあれ、世界何れの國でも之を有せざるはない、——或は又何れの時代でも、と云つてもよいかも知れない。即ちイギリスは、その内國の社會組織の上では、發熱の時代を早く十九世紀前半に通過したが、植民地問題の方面では今現にその最中である。その最中に又外部からドイツの競争を受けて、一層激烈な熱病にかゝつて居るのである。

ロシアの如きも、今後戦後の状態が工業革命の方に進んで来るならば、又同様の危機に遭遇するであらう。

然し交戦國では、今回の大發熱の爲に、今後の形勢に一變化を來す事と考へられる。その事は他日に譲つて、ヨーロッパ交戦國以外に、工業並に社會組織の中に危機に進みつゝあるのはアメリカと日本とを最とする。——支那や印度がそこまで行くには尙ほ多少の經過があらうが。——アメリカと日本とは内部で此の如き危機に向つてづん／＼進みつゝある所へ、ヨーロッパ大戰の爲に一層その危機を重大にするかと考へられる。此が實に考ふべき點である。

勿論アメリカと日本とは、その富源の大小社會組織の状態で大に違つた點がある。然し工業組織が急激に進み、社會全體がその振蕩を受けつゝある點に於て、又ヨーロッパ大戰の影響で、此の變化を促進せられて居る點に於ては、相似た點が多い。アメリカの事を先にして、殷鑑何れにあるかを考へて見やう。

アメリカの大半は今日も尙ほ農業國であつて、その東部の工業が盛になつたのは最近四五十年來の著しい變化である。その變化は今やどし／＼中部諸州にも及び、此の社會的變

化は、又移住民の續々入り來ると相合して、アメリカの社會并に道德問題は甚しい振蕩を受けつゝある。その振蕩は、大體に於てドイツで見ると同じく、理想主義の廢頽と、之に比例して實利氣風の横行である。之に加へて、アメリカの建國が、元來地方分權と共に個人の自主權を重んじて來たのであるから、實利氣風は往々にして極端な個人主義と結び、大仕懸な工業や商業組織も、少數資本家の私慾の爲に壟斷せられる患は實に多く、トラスト征伐や、商店検査などで之を防がうとして葛藤を生じつゝある。

此の如き國內の社會問題は、家族や教會、市政や司法等あらゆる方面に波及して、悲觀論者の中には、捨て、置けば社會的瓦解を來すと見る人すらある。その當否は暫く別問題にして、右の如き國內の葛藤は、内國だけに止まらず、國際關係にも及ぶ。十數年前イェバニアと戰端を開いた時に、キューバ方面に資本を下ろした資本家の力が大に與つて力あつた事は明白であるが、近くは隣國たるメキシコとの關係、遠くは支那との關係に於て、石油トラストや資本團などの勢力が如何に働きつゝあるやは、眼前の事實である。此等の事は今一々之を述べないが、我々の注目すべき事は、現在の大戦に伴ふ經濟上、社會上の變化である。アメリカには日本と違つて、今の戦争に對して道德上の論議意見が甚だ有力で、

若し大統領ウイルソンがドイツに對して斷乎たる方針に出る事があらば、それは道德上ドイツに反對する輿論の刺激後援が有力であるといふ事は忘れてならぬ。然しそれにも係らず、戦争の結果、聯合國側が武器彈藥を要して、之をアメリカの工業に注文する事、同じく聯合國側が此等の支出の大部分を公債にしてアメリカで募集する事、それでも足りないで、正金が續々アメリカに流入する事、交戦國の通商が一部麻痺した結果、その一部分（又は大部分）をアメリカが引き受けるに至つた事、此等は相合してアメリカの商工業に急激極まる膨脹を來しつゝある。而かも此の如き急激の膨脹で増殖しつゝある富は、分配が一局部に偏して、他の大部分の人民は物價騰貴やその他の不便に苦みつゝある。元來新開國の常として富の分配が極めて不平均な所へもつて來て、今の様に不平均の原因を一層加へたのであるから、その結果は想像に餘りある。云はゞ、身體諸處に血液が不平均に集まつて、欣衝を起すと同じ現象を呈し、發熱の原因と程度とは一層増したわけである。此の經濟上の變動は、道德にも及ばざるを得ない。所謂成金氣風はその一つである、他の疲弊を却て己れの殖利の幸とする氣風はその二である。次では戦争に對する一部資本家の考へ、即ち戦争は或る種類の商工業に利益を來すといふ觀念に支配せられる者の多く

なる事、その三である。又不時の工業勃興に伴つて、一部の勞働者の要求が増進し、その生活が（有形無形共に）變動を生ずる事がその四である。此等も詳しく説けば長くなる事であるが、その徴候は現に諸方面に現はれて、有識者の間には、その前途を憂ふる人が出て居る。その意見によれば、アメリカは、只さへ富の程度の高い上に、今一層を加へて、一人の身體でいへば、ふとり過ぎて居る。而してそのふとつたのは、他の瘠せた、即ち交戦國の疲弊に乗じた爲といふべく、今後アメリカが他に比して不當にふとるといふ結果は、殆ど避け難い事實である。且つや、交戦國民の精神状態を見るに、何れも戦時の緊張が、愛國の情、自己犠牲の心を養つて居るは明白であり、加之、戦争の結果は必や一方のみに非常に利益のある講和に終るといふ様な見込は斷然ないから、此の緊張状態が戦勝の慢心で弛むといふ様な事は萬々あり得ない。然らば、ヨーロッパは鐵火の洗禮を受けて、精神的に一つの新生命を發揮する様になり、精神の緊張嚴肅は、必ず社會生活や道德生活に、新氣力を生ずるに違ひない。之に反して、アメリカには、此の緊張状態の代りに、急激の膨脹から生ずる慢心、奢侈、油断が資本家の側に生じ、一般人民の方には、不平、煩悶が生じはしないか。ふとり過ぎたアメリカは、肥滿、脂肪過多の爲に、道德上の心臓を侵さ

れはしまいか。

アメリカに起りつゝある此等の新事情は又實に日本の病となるべき性質の事ではなからうか。此が我々の將來にとつての大問題でなからうか。勿論、今までの經濟事情や社會事情には、日本とアメリカと異なつた點が多いが、現今戦争の爲に生じつゝある變動、並にそれが根本になつて居る工業の勃興といふ事實に於ては、日本の病は、規模は違つても、アメリカと同様の病症がどしどし進みつゝある。今や我々は文明の熱病に於て、熱度を増すべき状態に踏み込みつゝあるのである。

大戦が初まつて以來、日本の一部には、ヨーロッパ諸國の疲弊は即ち我々の利益であるから、此の際我々は大に利權を擴張しなければならぬと主張する人が甚だ多い。此の打算からして、南洋の占領も、支那の横領も、火事場泥ぼう的にやるがよいとすら見て、それが思ふ様にゆかぬといつて憤慨する人も往々ある。單に利益といふ點から云はゞ、此等の意見には多少の眞理はあらう。然し今や世界は、政治上には割據の世の中の様であつても、經濟上には利害彼此影響する事、殆ど一つの身體の如くなりつゝある。一部には貧血して他の方には充血するといふ有様は、必ず全部の病氣を惹起して來るに違ひない。現に戦争

の影響として、日本國內だけでも、海運や鐵工業などは、非常の利益を占めつゝあるが、大部分は、世界全體の疲弊に影響せられて苦痛を感ずる事は、日々に甚しくなりつゝあるではないか。

よし又經濟上利益が多いと許しても、此の利益は、却て現在文明の熱病を増進するといふ點を考へて來れば、現今の状態は實に深い憂を包藏して居ないか。勿論商工業の振作は必要である、然しその奥底に横はる國民の精神生活に活氣なく、道德生活の源に缺點があるならば、商工業や殖産業は、却て國民の病を増すに違ひない。日本の工業は、今尙ほ幼稚であるにしても、それでも尙ほ、社會組織に大變動を生じ、村落家族生活に振盪を來し、富の不平均、不平、反抗氣風の鬱勃、個人私慾の實利主義、此等の病を至る所に起すだけの力は十分にある。工業勃興の弊を矯めるべき工場法の實施は如何の結果を呈するかは知れぬが、現在の有様では、到底多きを望み得ない。都市の膨脹に伴ふ地價の變動、租稅負擔の問題、此等は現に起りつゝある文明熱の症候である。

然るに、戰爭に伴つて、此等の症候を増進すべき事實は續々起つて來て居る。人はロシアの注文で金が流入して、正金の殖えたのを喜んで居るが、吹けば飛ぶ黄金を抱へ込むで

その跡には社會の氣風道德の上に、憂ふべき成金氣風や實利主義をのみ残したならば、有形無形共に損得どちらが多からう。帝國主義者は、頻に支那に對する高壓手段を主張して、その方面に利權を得やうとするが、それが隣國民との眞實の交情を破つたならば利害はどちらが多いか。隣國交情の事は暫く別としても、此の方面の變動と内國での經濟的膨脹と相合して、アメリカ資本家のキューバやメキシコに對すると同じ様な勢力が、國家を支配する様になつたならば、一時の利得、又は將來起り得る戰勝の結果は、必や國內に一層富の不平均と氣風の廢頽とを來すに違ひない。此の如くにして一時の利得は却て永遠の損失になり、外に向つての膨脹は却て内部活力の墮落を惹起する様になつたならば、利害得失云ふまでもない事ではないか。

此等の事情は、日本がアメリカと病を同じうしつゝある點である。近代文明の熱病は、此の如くにして、交戰國以外で（日本は實質上殆ど交戰國でない）比較的繁榮に進みつつある國を襲うて居る。此の點に於ては、アメリカ識者の憂として居る事は、即ち又直に日本の深憂である。

然るに日本には此の一般の文明熱以外、更に一層の熱病を持つて居る。それは軍國主義

である。軍國主義が軍事を支配するのは不思議でない様であるが、それも國防の本義、國家成立の大義の上から見れば、頗る疑問である。況や日本の軍國主義は此を以て社會全般を支配し、教育に干渉し、學問に命令を下し、道徳をもその配下にしやうとするのである。此點に於ては殷鑑遠からずドイツにあつて、軍國主義が國民全體を支配すれば、必ず兵戈を弄する禍を來す。

何れの國にも文明の熱病はある。現今の大戦もその一結果である。戦争の後に交戦國に精神上の覺醒が起つて、此の熱病を免かれるや否や、此れ一つの大問題である。然るに交戦國以外で、アメリカと日本とが、共に熱病の症候を加へつゝある事だけは、不幸にして確である。

戦後の精神的覺醒

言ふまでもなく、戦争は一生懸命の仕事である。國としては、盛衰存亡を賭し、個人としては、命を捧げ出している仕事である。それ故に戦争は、多數の人に對して、自己の利害のみならず、生命の犠牲を要求し、個人は全體の爲めに己れを捨て、或は献身、或は勇氣、或は忍耐の美徳を發揮する。然しながら文明の潮流として見れば、何處かに不調和があり、衝突があり、爆發して戦争となるのである。それ故に戦争は文明の熱病である。但し熱病と云ふのは、身體の不調和を整へて、健康を回復する必要手段であるから、熱病と云へども、悪い意味にのみ取ることは出來ない。要は世界の文明が、如何に發熱状態を通過して、健康を回復するや否やにある。

古來戦争の後には必ず精神的覺醒が來る。何れの文學でも、大叙事詩は戦争の物語であるが、單に戦闘を叙するだけでなく、戦争に於ける命懸けの争ひ、生死の巷に出入する人の心持ち、且つは又戦亂の爲めに恐慌を來し、悲惨な目に逢ひ、人生の艱難を痛切に經驗する人の心持ち、其の上、又戦争の濟んだ後、熱から醒めた人心の覺醒、信仰の要求、こ

れ等が人生の現在、現實以上に渉る永遠の意味に觸れて、沈痛深遠な精神動搖が起る。これ等の覺醒、動搖が、何かの思想を信仰として、叙事詩の背景となつて現はれる。而して叙事詩を歌ふ者も、之れを聴く者も、共に同じ精神の旋風にまき込まれて、深遠な感化を得る。これが大戦争の文學に残した印象であるのみならず、何れの戦争にも、其のすんだ後に來るべき精神覺醒の記念である。

日本で云へば平家物語、印度の大パーラタなど、一々實例を擧げるまでもなく、大戦に際しての精神的動搖は、此等文學が其記録を留めて居る。それ故、斯くの如き文學は、單に詩想や空想の産物でなく、血と涙との跡である。筆や口で綴つただけでなく、命懸けの筆である。

今度の戦争が世界的大亂たることは勿論、文明の潮流の上に於て、十九世紀の工業文明、植民政策、國際的競争の大爆發たる事も明白である。此爆發の後には如何なる傾向が生ずるか。今迄の文明が破裂し破壊して其後に新なる文明が起るか、又は今までの工業、植民などの競争を一層激烈にして、世界は全く武装した休戦状態に陥るか、人々の見る所各々異つて居る。然しながら其結果、何か覺醒と變動とが起ると云ふことは、何人も想像し、

豫期して居る。

一個人の身體で云つても、例へばチブスの如く非常な發熱を來し、身體の組織を一變するやうな動亂を経た後の回復期には、新たな生氣が加はる。其の第一には滋養分の吸収、組織の回復である。食慾が増す。全身に壓へ切れない衝動が盛になる。此點から云へば、幾百億の財を費し、幾百萬の人命を殺した後の世界文明は、物質上の健康回復を必要とするに違ひない。第一は商工業の回復、續いては他日に備へる軍備の充實、其他經濟組織、社會制度、教育方法など、さしづめ文明と國民との有形的要求を充たすための努力が加はることは明白である。此の努力なくば、病後の人體に營養のないと同じく、世界の文明は衰退に歸する外ない。そこで戦後の策として、經濟の研究や軍備論の出るのは、自然の勢ひである。

然しながら、有形上の健康回復だけで、戦後の動搖が終ると思つたならば、大間違ひである。チブスの回復期にある病後の人が、新たな生命を感ずる場合には、精神上にも新鮮なる力を覺ゆる。古來精神的改革者となつた人の經歷を見るに、病後の新鮮な魂を以て天地人生に對し、そこに新たな生命を發揮した實例は決して少くない。此事は病後でなくとも、

我々の日常生活にも、經驗することである。夕やけの光が殊に美しいと云ふことは、誰も知つて居る事實であるが、それは單に空の色が美しいと云ふだけでなく、終日浮世の事物に疲れた眼と脳髓とが、夕陽と云ふ一種の別世界に接して、新鮮の感化を得たるために、特別の感動を生ずるのである。兎に角疲勞の後、發熱の後には、身體に新たな生氣を發揮すると共に、精神的にも新たな世界を作り出す。一個人のみならず、一國民でも、或は又世界全體の文明にも、常にこれと同様の新生命を得て、混亂の後には覺醒が來り、破壊の後には建設が來る。

そこで物質上の健康回復が戦後の世界に起るにしても、其が今まで通りの工業組織や、國際競争の形を採るか、若しくは何等かの根本的改革を要求するに到るや、こゝ二十世紀の文明にとつての大問題が横はる。今のところ何人も前途如何なる社會組織、經濟組織が現はれると云ふことを想像し得ない。而して人間の想像と思想とは、既知の材料に基いて、類推するに過ぎないから、多くの人は戦後に一層激烈な經濟や、國際の競争が起ると考へて居る。然しながら人生の事實は、今までの經驗に基いて推定する以上、又は以外に出て、殆んど豫想し得ない新事物を生ずることが甚だ多い。今度の戦争でも、常識や推論で

斷定して居たことは、多くはづれて、豫想しない方面の事實が續々出て來た。フランスは墮落しつゝあつた國民であるから、一溜りもなく、ドイツに倒されると、豫想した人が多かつた。然るにフランス國民は、數百年の熱情と勇氣とを回復した如くに奮起した。一度は眠つた如く見へたフランス魂が蘇生した感がある。ベルジックは國土を蹂躪されたけれども、却て其の獨立的精神を發揮して、戦争に新しい精神を作り出すことゝ考へらる。ドイツは戦争に對して豫定の計畫が全くはづれて、進退共に恐慌を來したが、其でも兵糧攻めに對しては存外ネバリ強く抵抗する實を示して居る。今日ドイツ人の力を示して居るのは、區々たる戦場の小成功よりも國民全體の艱難に堪へる精神にある。ロシヤの覺醒は益々國民全體に普及しつゝある。戰場となつて亂されたポーランドには、却つて將來の獨立に備へる氣分が起りつゝある。此等のうち、多數の人が多少豫想して居つた事もあるが、又全然豫想以外の事も現はれて居る。而して豫想以外の事と云ふのは、常識や推論の立ち入り得ない側、即ち理想、意志の力にある。

今日フランス國民を動かして居る力は、彼等が世界文明のためドイツと云ふ猛獸と戦ひつゝあると云ふ信仰である。ベルジック國民が、其の慘憺たる生活の裡にも矢はずに居る

理想は、國家には國土財産よりも大切なもの、即ち名譽と正義があると云ふ熱情である。ドイツ國民は其爲政者軍國主義者に誤られはしたが、兎に角今日まで其耐久力を持續して居るのは、國民の至實たるドイツ文明の存立に懸ると云ふ信仰である。

兎に角一個人に於けると同じく、一國民でも、其生命を維持し、危難の後に新たな生命を發揮する力は利害の打算や、理論の解釋でなく、意志の力、理想に對する信仰である。而して此力、此信仰は、個人若しくは國民自身にも豫期しない方面に現はれ、豫想以上の結果を呈する。先に述べた病餘の身で新たな精神を持つて世界に接し、其結果一世の革新を促がし、萬世の指導者となつた人々は、彼等自からも豫期しなかつた理想に動かされ、平素は知らず居た力を發揮したのである。それと同じく、一生懸命の戦亂を経た國民には、精神理想が亡びない限り、之れと同様の新生命を發揮するに違ひない。而して其新生命は従來の制度や組織に固着するのではなく、自分にも他人にも思ひ到らなかつた方面に進むに違ひない。自由平等を叫んでブルボン王朝を破壊した革命時代のフランス人、若しくは又ナポレオンの壓抑に反抗して、國民の自由のために戦つたドイツ人、彼等は其大動搖の後に、十九世紀の科學時代、工業組織が來やうとは、想像だにし得なかつたであらう。然る

に其結果は現に今見る如くである。

十八世紀の貴族的文明が破れて、十九世紀の平民的文明が現はれたのは、アメリカの獨立戦争とフランス革命戦争と、此二つの大動搖を経た結果である。然らば今の戦争の後に如何なる文明の改造が來るや、後世の史家は、原因結果の關係を以つて、之れを説明し得ると考へるやうな變遷が起らうが、其變遷を今日の我々が豫想するには、原因結果の推移でなくて、我々自からの意志、信仰の力で之を創造しなければならぬ。推理は多くの事後の探究に止まるが、創造は事前の力の裡に含蓄して居る。戦争に就て、物質方面の研究が必要である事は、無論であるが、其奥に隠れた精神的覺醒、理想の創造力、其等を閑却しては、必ず大きに違算を來すに違ひない。

我々が、戦後世界文明の精神的覺醒に對して重きを置くのは、之れが爲めである。而して其覺醒が如何なる方面に向ふかは豫想甚だ困難である。然しながら、こゝに最も注意すべき事がある。戦後の世界がどうなるかと單に待ち受けるのは、理想なく、信仰なく、創造力なき愚人の事である。將來どうならうかと問ふよりも、將來どうしやうかと云ふ考へで進まなければならぬ。但しどうしやうかと云ふのも、單に空想で考へるのでなく、戦争の

齋し來つた大動搖、大感動の裡に既に見え始めて居る力を捉へ、一生懸命に戦闘に従事しつゝある國民の間に萌へ出さうとして居る、理想信仰の機微を捉へて、信仰と創造の力に依つて之れを陶冶し、理想の力を發揮する者—個人にしても國民にしても—斯くの如きものが、將來の指導者になるに違ひない。之れに反して戦後の新世界に對して舊套の經濟組織、軍備組織、乃至人生の價值觀念に捉はれて、戦後にも今までと同じやうな事を繰り返さうとする者は、將來の文明の進路に於て、落伍者となり、世界からとり残されるに定つて居る。此點に關して、現在日本の軍備論者、若しくは經世家に對して云ふ可き事は多々あるが、歸着する所、新たなる世界には、新たなる精神と新たなる眼光を持つて進めといふにある。

ロバートソン、スコット氏が云つた「物質上にも精神上にも、世界は今再建すべき時期に到達してをる。然るに多くの人は、この後現はれるべき新時代を判断するに、舊世界の考を以て考へる。爛熟して生命を失つた今までの考が、今も尙行はれて、それを以て社會の幸福、國民の進歩に大切な點を律しやうとする。政治や經濟に關して行はれてる思想には已に枯渴したものがあつた。それを保守せんとする人も多い。我々が已に超越し、若くは

排斥し、若くは離脱した、宗教或は社會上の制裁を珍重して、その考で他人を評しやうとするものも少くない。

この様な精神状態、この様な思想の方法で、どうして將來に對する眞理を捉へ得やうか。新時代に對しては、今まで貴重だとして來たことでは役に立たない。新たなる價值が生じなければならぬ。今我々は、新世界の入口に立つて居る。その新時代に對して考へるについて、第一に又切實に必要なのは一語にして盡す、即ち「大膽なる眞摯」である。今まで信仰でその根の枯れたものは、これを捨てなければならぬ。この機會は今到達しつゝある。我々が云ふ所は、我々の考ふる所であり、我々の行ふ所は、我々の考ふる所であり、我々の行ふところは、我々の考ふる儘の眞でなければならぬ。此の如き見解と勇氣とは、新世界に對する考の第一要件であつて、これはなくては、何事を認め、又書くとも無益である。現代の後には新時代が來りつゝある。我々の子孫は、我々が遺して置く重荷を負擔するであらう。その新時代に對して、我々の先見熱心が何かの動力を有するならば、それは大膽なる眞摯から來た結果であるに違ひない。

「大膽なる眞摯」それが如何なる方面に向つて進まうか。戦後の精神的覺醒は何を齎すで

あらうか。曰く人生に於ける價値の轉換、猶具體的に云へば、人類共同精神の發揮、國際精神の發揮、而して其が商業と學術と信仰との力で、人類を結合する方に向ふに違ひない。然し之れに反抗する力も、亦強く働かう。之が二十世紀の問題であらう、而してそれが將來文明の試験石にならう。

附錄終

大正六年一月五日印刷
大正六年一月八日發行

第一協會叢書 第二集
社會問題の建設的解釋

不許複製



發行所

東京市日本橋區本町三丁目
振替貯金口座東京二四〇番

博文館

編者

姊崎正治

發行者

東京市日本橋區
本町三丁目八番地

大橋新太郎

印刷者

東京市小石川區
久堅町百〇八番地

高橋季吉

印刷所

東京市小石川區
久堅町百〇八番地

博文館印刷所

定價五拾八錢

東京帝國大學文學部教授 編 姉崎正治君

歸一協會叢書

第一集 ★社會道德上の共同責任

歸一協會は、宗教、教育、道德、經濟等社會各方面の問題と活動とに對して、調節歸一の氣運を促進するを目的とし、その研究討議の結果を發表する爲に、茲に叢書を續刊す。社會生活の上に於ける道德上法律上の責任は、如何なる點までは個人に歸し、如何なる範圍に於て社會の共同責任に歸すべきか、是れ第一輯が研究せんとする所の問題也。

菊判洋裝 瀟洒美本 紙數百八十餘頁 定價五十八錢

博文館發行

第二集

社會問題的建設的解釋 最新刊

新進化論

本書の特色は「宇宙の進化」「地球の進化」に「生物の進化」に關する最近最新の學說を平明確に記述したる點にあり。例へば今より七年前に起りたる「宇宙及び地球の新進化説」又は「ダーウイン」以後の新進化論を明確に示して、容易に其要領精髓を味はしむるが如き在來の邦文進化論書の上に一頭地を抜くものと謂ふべきなり。著者は生來化學的頭腦を有し、進化論の研究に思を凝らす事茲に年あり、本書は著者が殆んど有らゆる進化論書を精讀し咀嚼して成りたるもの其間七箇年の長歲月を費せり、その最も苦心せしは進化論殊に近來の進歩したる進化論を成るべく解し易き様通俗平易に叙述したる點にあり、故に何人も此書を讀めば能く進化論の要諦を理會するを得べし。

全一冊菊判洋布特製美本 堅牢函入紙數六百五十餘頁 正價金二圓三十錢 小包料内地金十二錢

東京帝國大學教授 著 神田博士 著 氏ケリ、ギ、一ニドシ

人類進化論

本書は誠物した「新進化論」の續編とも見るべきものであつて、其の主なる目的は、人間の起源と性質とに關する科學的見解を叙述するに在る。故に其大部分は、ダーウイン後の進化論的新人間論であるが其の論と對比する爲めに、古來の舊人間論をも述べた。此書に於いて述べる所は、彼の「新進化論」に於て述べた所の宇宙地球及び生物の進化殊にダーウイン後の一般進化論と相關聯して離るべからざるものであるが、是非必要に照して引用せられたるもの外は煩雜を恐れて成るべく復説を避けた。又此書に於ては從來私が珍重せる幾多の名著を始め、數十冊の参考書を渉獵したけれども大方は人類進化論に直接の關係ある部分の外は引用せず(中略)期する所はたゞ古今の人間觀の一般的表现を試みるに過ぎない。(著者序文の一節) 附録 人類の社會的進化(一)、文明の發達(二)、自然界に於ける人間の地位

全一冊菊判洋布特製美本 堅牢函入紙數一千二十餘頁 正價金三圓五十錢 小包料内地十二錢

博文館發行